
神の語り手といわれた少年

がぶりえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の語り手といわれた少年

【Nコード】

N5079J

【作者名】

がぶりえる

【あらすじ】

生まれつき不思議な能力を持った吉原九十九は、父親が買ってきた鏡を蔵の中にしまう最中に鏡に吸い込まれてしまう。

鏡に吸い込まれた先は異世界だった。

しかし、持ち前の楽観的思考のおかげであまり苦悩することはず、自分のペースで異世界を旅する九十九。色々な仲間と出会いながら、九十九の異世界冒険が今始まる。

この物語は主人公が最強というわけではありません。

どちらかと言えば主人公の周りが最強です。

暇があつたらばちばちと書いているので、不定期更新です。

矛盾を指摘された為、大幅に修正しているところがあります。
気になる方はご覧ください

第5話で大陸や国のことを補足しました。一度確認をお願いします。

序章（前書き）

初めまして、がぶりえると申します。

小説を書くのは初心者なので、誤字脱字や物語に矛盾が生じることがあります。

もしそういうことがありましたら、お手数ですが報告をお願いします。

ではごうざうざ。

序章

俺には物心ついた時から不思議な力があつた。
それは火が出せるとか瞬間移動できるとかいう事ではない。

古くなつた物の言葉を聞き、自在に動かすことが出来るということだ。

春が過ぎて、これから夏になるというこの時期。俺こと、吉原よしはら 九つくもはうだる様な暑さの中、家の蔵を整理していた。

「暑いなあ、くそっ」

（ほっほっほ、そう言いなさんな、坊ちゃん）

「でもさあ、蔵のじっちゃん。いくら木陰にあるといつても暑いもんは暑いぞ？何だつてこの暑い中整理しないとダメなんだか・・・」

（それはー、あれだの。なんだったか・・・そうそう、何でも旦那様が古い鏡を手に入れたが置く場所が無くて、ここに置くことにな

つたらしいぞい)

またかよ・・・、とぼやきながら俺は蔵の中を片付けていく。
俺の親父は骨董品を集めるのが趣味で、気に入った物があればホイホイ買ってくる困った親父だ。

「だー！めんどくせえ、・・・お前ら起きろ、蔵整理だ」

(はっ！なんだ坊ちゃんか。へいへい動きますよ)

(あらーん、坊ちゃん久しぶりねえん)

(ワシは奥がいいんじゃ、どかんかい！)

(何言つてやがる！ここは俺の場所だっ！)

「はいはい、落ち着け落ち着け。壊れにくい物は下になれ、武器達は隅に一纏まり、壺とかはちゃんと棚に入れ」

()()(はい、坊ちゃん)()()

とまあ、こんな俺の日常をつらつらと語っていいこうと思ったんだが、まさかあんなことになるとはなあ・・・。

序章（後書き）

短くてすいません（、・・、）

でもほら、プロローグなのでっ！

感想などなど、お待ちしております。

第1話

「よし、こんなもんか・・・皆お疲れさん」

（ほっほっほ、ご苦労だったのう。坊ちゃん）

「本当だよ・・・うあー、疲れたあ」

昼過ぎから始まった蔵整理は、夕方頃にようやく終了した。

しかし夕食後に親父が買って来たという古い鏡を移動しなければならぬ作業がある。

「飯まで少し休むか・・・じゃあまた後でな、蔵のじっちゃん」

（ほほ、またの）

「ふいー、疲れた・・・」

（おお、九十九。蔵の整理は終わったのかえ？）

「あー・・・桜華、今終わった」

声をかけてきたのは机に置いてある鉄扇。名を桜華という。（本人談）

こいつも親父が買って来たものだ、何でも戦国時代の武將が使っていたとか何とか。

（疲れておるのう、どれマッサージでもしてやろうか）

「おいおい、鉄扇がどうやってマッサージするんだよ」

（どうってと言われるとこう・・・べしべしと？）

「やめい、お前自分が鉄ってことを忘れてないか？」

（むむむう、人間になれたらのう・・・）

「まあ気持ちだけ受け取っておくよ、ありがとな」

（うむつ）

そんな会話をしていると母親から「ご飯できたわよー！」と呼び声がかかった。

「そんじゃ、飯食って鏡運ぶかー」

（九十九九十九つ、わらわも連れてっておくれっ）

「ん、了解。でもお前重いからなあ、腰のところでいいか？」

（んむんむつ）

「ふいー、食った食った。」

（いいのう、母上の作るご飯はいつも美味そうなの・・・。）

ふははは、うらやましかろうーっと言ってる場合じゃなかった。こいつを運ばなきゃな。

「親父ー！もう運んでいいのかー？」

奥でござこそしている親父に声をかける。すると「おーう！丁寧に運べよー！」と返ってきた。

「はいはいと・・・お、案外軽いな？」

どっこいしょ、と親父みたいな掛け声と共に持ち上げた鏡は思いのほかに軽かった。

「もしかするとお前より軽いかも知れないぞ？桜華」

（ええい、わらわを馬鹿にする出ないっ！鉄扇なんじゃから重くて当然じゃっ！）

べしべしと背中を叩いてくる鉄扇の彼女、案外しゃれにならない威力だ。いてて。

「いててっ、悪かった！叩くの止めてくれっ！」

（分かればいいのじゃ）

そんなやり取りをしていると蔵に到着した。両手が塞がっているのでじいさんに扉を自発的に開けてもらいつつ、中に入って予め作っておいたスペースに鏡を置く。

「ふう、改めてみるとかなりいい鏡じゃないかこれ。古いつてことだから話せるんだろつか・・・よし」

鏡の上に手を掛け、軽く集中する。すると鏡全体に光が灯り一瞬にして消えた。

言葉や動かしたり、物自体が動いたりするためにはこの作業が必要だ。何でかは知らん。

「さてさて、起きてるかー？」

つんつんと鏡を突いて見ると、反応があった。

（ん・・・ここは・・・一体？）

「お、大丈夫みたいだな」

（声が、私の声が聞こえるのですか・・・？）

「ああ、俺のちょっと変わった力だね。ちなみに動かしたりもできるし、お前自体動けるはずだぞ。」

するとゆっくりと鏡が動き出す、傍から見ると怪奇現象以外の何ものでもない。

（ああ、本当です・・・貴方を・・・貴方様のような人を待っていました！）

興奮したように話す鏡に俺は少しひるんだ。

「え、ちょ、何だ急に！」

（私の国を救ってください！語り手様！）

「え、語り手？・・・ってなんだおい！引っ張るな！」

（おお、この鏡はかなりの力をもっておるぞ！九十九！）

「ちょ、おま！言つのおせえよ！」

身体がどんどん鏡に吸い寄せられているのに、桜華は今更なことを言った。こいつめ。

（申し訳ありません、語り手様。どうか、どうか私の居た国を救ってください・・・！）

「とりあえず説明しろ！せつめ・・・うおおお！のまれるつつつつうー！」

（こういつときはあーねー！って言えばいいのかな？）

「お前のんき過ぎるだろおおおおおおお・・・」

こうして俺とのんき鉄扇の桜華は、何の説明もなしに鏡の中へと吸い込まれていった。

第2話

「おい、鏡さんよ・・・説明も無しに飛ばした拳句よ・・・ここはどこだよおお！」

しかし返ってきたのは木霊だけ、そう、ここは、森の中である。

「ったく・・・一体何だつてんだ・・・」

鏡に吸い込まれ、なんかわからん渦の中をぐるぐると回って、ぱいつて吐き出されるように外に出されたら、地面に叩きつけられた！そして辺りを見渡したら・・・木、木、木、木、巨木、木と見事に森の中だったというわけさ。

「森でどうしろってんだよ・・・桜華、無事か？」

（大丈夫じゃ、それより九十九。どうするのかえ？）

「あれだ、こういうときは確か川を探すんだ。んで下流に行けば村の一つや二つあるだろうよ」

（樂觀的だのー）

お前に言われたくないわっ、と思いつつ川を探し始める。
木や草が鬱蒼と生え茂っている森の中をしばらく歩くと、サアーっ
という水の流れる音が聞こえた。

「よーし、川発見！しかし疲れた・・・ちょっと休んでいくか」

（そうだのー、森の中を歩くのって案外疲れるもんじゃのう）

「だよなあ・・・ってお前は俺が運んでるんだろっがっ！」

「ふうー、結構歩いたなあ・・・まだ村や町がないのかよ」

（ほれほれ、がんばれがんばれ。もうすぐ日が暮れてしまっぞ？）

「だーかーらー！・・・はあ、まあいいや」

相変わらず我関せずな桜華を放っておいてひたすら歩く。すると川の切れ目が見えてきた。

「むーらーはまだですかーよっと。おお！村発見！」

（おお！でかしたぞっ、九十九！）

その切れ目は少し滝になっていて、下を見ると丁度夕食時なのか村らしき場所からいくつも煙が上がっていた。しかし・・・

「よっしゃーっとあれ？なんか様子がおかしいぞ・・・？」

そう、いくら夕食時だといっても煙の数が多すぎるのだ。

「なんかやばそうだが・・・とりあえず今晚の寢床の為だ、行ってみるか」

（なあに、いざとなったらわらわを使えばよいのじゃ！）

「おう、期待してるぜ！」

そうして村に向かって走り出す。近づくにつれ村の様子がわかってきた。

ところどころ木の家が崩れていたり、いくつもの家が燃えていたが、どうやら襲われた直後のようだ。

「一体何が・・・賊か？」

（どうやら、その様じゃの）

そう判断したのは、明らかに人対人の戦いの声が聞こえてきたからだ。

自警団が奮戦しているのだろう。しかし如何せん数が違いすぎるようで、あちらこちらで家を荒らしまわっているのが見える。

「だけど、自警団と賊以外の人は見ないな」

（警邏が察知して逃がしたのだろう、なかなかやるものじゃのう）

数が違うといっても、個人個人の實力は盜賊達より上みたいで、自警団が押し始めている。自警団つええ！

「ここは任せてもいいみたいだな、俺達は残った敵と逃げ遅れた住民を探すか！」

（そうじゃの）

（なんとも、あつけないのう・・・）

「ああ、何でこんなに弱いんだ・・・？」

そう俺は呟く、後ろには俺が片付けた盜賊達が無造作に転がっていた。

いくら俺が喧嘩に慣れているとはいえ、盜賊達は明らかに弱かった。

元の世界で俺は、生まれ持った能力のせいでいじめられていた。

そのことが悔しかった俺はいじめっ子達に喧嘩を吹っかけるようになった。

そのおかげか、喧嘩という実戦ならそこそこ強いと自負している。しかし、盗賊相手に圧勝というのもおかしい・・・そしてこっちに来てから身体の調子がいいぞ？

「うーむ、なんか身体が軽かったし、試した感じ力も上がってるみたいだ」

（ほう、それはまたなんとも珍妙な・・・）

「この分だと、桜華を使うこともなさそうだな」

（つまらんのう！）

プンスカ怒っている桜華をほおっておき、周囲を見渡す。

すると、村のちよつと外れたところに小さな道があるのに気づいた。

「桜華、ちよつとこの道に入ってみるぞ」

（うむ）

しばらく進むと、小さな家があった。

しかし盗賊に襲われているようで窓が割れたりしている。そして・

・

「嫌！離して下さいっ！」

と、女の子の悲鳴が聞こえた。

「っ！桜華、行くぞ！」

（うむっ！）

そして勢いよく家の中に入っていく。

するとそこには俺と同じ年くらいの女の子と、妹だろうか、14歳くらいの女の子が3人の盗賊に囲まれていた。

「げへへ、お嬢ちゃんたち観念しろよ」

「早く立つんだナ」

「けひひ、早くするでヤンス！」

そこに居た盗賊達は、典型的なやられ役だった。

長身の男、太った男、痩せてチビな男、明らかに弱そうだ。

「おお・・・何という小物臭」

（プンプン臭っておるのう）

そして俺と桜華は見たままの感想を述べた。

「んだとう！？誰だてめえは！」

「誰なんだナ」

「誰でヤンス！」

一斉に振り向く盗賊達。

「えーと・・・名乗るほどの者じゃございませんよ。例えるのなら通りすがりの正義の味方かな？」

（なんじゃそれは・・・）

とぼけて見せる俺に、呆れながらもつつこみを忘れない桜華。

そしてその言葉に怒ったのか、怒りを顕わにしながら長身の男が部下に命令をする。

「ふざけやがって！お前らやつちまえっ！」

「分かったんだナ！」

「いくでヤンス！」

何だその一昔前の掛け声はと思いながら俺は、剣を片手に隙だらけに突っ込んでくる盗賊達を迎えうつ。

太った男の大きく横薙ぎに降られた一撃を屈んでかわし、かわしたときの反動を生かしたアッパーを放つ。

「おらああああー!!」

「ブフウツ!？」

「うしっ、かかってこいや!」

次の男を相手にしようとしたとき、桜華から待ったがかかる。

（九十九、少し待つのじゃ）

突然の待ったに、俺は相手を警戒しながら念話で桜華に答える。

（おう?どうした）

（いやなに、このまま小柄な男を倒してしまっっては、頭があの子を人質にするのではないかと思つての）

（ああ、なるほど・・・）

その言葉を聞いた俺は小男の攻撃をかわしつつ、リーダーの後ろに座り込んでいる居る女の子に目配せをする。

目配せの意味に気づいたのか、女の子達は物音をたてないようにそろりそろりと移動をした。

そんなことをしている間にかわされ続けて焦れてきたのか、剣を振り上げ小男は突撃をしてくる。

「っしやああああー!!」

「オゴフツ!？」

それをチャンスだと思った俺は、半身を動かして攻撃をかわし、鳩尾に思い切り右ストレートをはなった。

渾身の右ストレートを受けた小男はテーブル等を巻き込み吹っ飛んでいった。

「デブ！チビ！・・・くそう」

やられた二人の部下の名前を叫ぶリーダーらしき男、そのまんまじやねえか。

「こうなったら女を人質に・・・っていねえ！？」

桜華の予言通りに女の子を人質にしようとしたリーダーらしき男は後ろを向き、いつの間にか居ないことに驚愕した。
その隙を見逃さなかった俺は突撃し腰の乗った右ストレートをはなった。

「貰ったああああっ！」

「しまっへブウツ！？」

きりもみ回転しながら吹っ飛んだリーダーらしき男は、小男の上へべちゃっと落ちた。痛そうだな。

「危ないところを助けて頂き、ありがとうございました・・・」

盗賊達を縛り上げた俺は女の子達の無事を確認していた。
よく見たら可愛い子達で、盗賊達が狙うのも分かる気がする。

「いやいや、当たり前のことをしたまでだよ」

普段あまりお礼を言わないので、少し照れながらそう返す。

「お兄ちゃん、強いんだねっ」

妹らしき女の子が目を輝かせて言うてくる。やばいお兄ちゃんだって！凄い照れる！

「そ、それほどでもないぞう！」

あ、声が裏返ってしまった。恥ずかしい。
くすくすと、笑う女の子達。ここは天国ですか・・・？

「あ、私はシエラと申します。こっちが妹のミレルです」

「よろしくね、お兄ちゃん」

「俺は吉原九十九、こっちだとツクモ・ヨシハラになるか？」

恐らくアメリカンな感じだと判断する。

「ツクモ様ですね」

「ツクモお兄ちゃん！」

お、おお・・・お兄ちゃんにこれほどの威力があるとは・・・恐るべし妹属性！

（む、何か不純なことを考えておるな？）

（そ、そんなこと無いぞ！）

危つく妹属性に飲まれるところだったぜ・・・そういえば村の様子が気になるな。

「よし、とりあえず俺はこいつら連れて村に戻ってみる」

「私達も一緒に一緒に連れてください、邪魔にならないようにしますから」

「ああ、ここに来る間ザコはあらかじめ片付けてきたら大丈夫だろう」

そんなこんなで村まで戻ることにした。

村に到着した俺たちは、盗賊を縛り上げていたおっさんに話しかける。

「あの一、こいつらも一緒に縛り上げてください」

「む、君は・・・？」

俺に若干警戒心を覗かせつつ尋ねてくるおっさん。当たり前か。

「バードおじさん、この人は私達を助けてくれたんです」

「シエラ！ミレル！なんでここに！」

「お母様の形見を忘れてしまって・・・取りに戻ったら盗賊が居たんです」

「それで囲まれてた私達をこのツクモお兄ちゃんが助けてくれたんだよっ」

「そうだったのか・・・私の姪を助けてくださり、ありがとうございます」

事情を聞いたバートさんは真摯にお礼を言ってきた。渋いぜ！

「いえ、当然のことをしたまです。それに少し打算もありましたからね」

「打算？このような状況なのであまりお金は出せませんが・・・」

莫大なお金を取られるのではないかと思っただバートさんは、申し訳

なさそうに答える。

もちろん俺はそんな鬼畜じみたことをするつもりはない。

「ああ、そうじゃなくて！泊まるところを都合してもらえないかと思っただけですよ」

「そうでしたか、疑ってしまって申し訳ありません・・・」

「気にしないで下さい、それが普通のことなんですから」

（そうだのう、もし金を取ると言った時はわらわがしこたま叩いてやるところじゃったわ）

貴方に本気で叩かれたら死んでしまうので勘弁してください、桜華さん。

そんな話をしていると、遠くから地響きみたいな音が聞こえてきた。

「バートさん、何か聞こえませんか？」

「確かに、森のほうからのようですが・・・」

「行ってみましょう」

嫌な予感がした俺は桜華に念話した。

（桜華、何か嫌な予感がする）

（奇遇じゃの、わらわも感じておる）

そしてバートさんと数人の自警団と共に村の外れにある森の入り口

にやってきた。

その間もどんだん地響きが近づいてきているみたいだ。

「これは・・・何か巨大なものが近づいてきているのか？」

「もしかすると・・・ま、まさか・・・」

「バートさん、何か心当たりが？」

「もしかすると何ですが、この森の奥に住む凶暴な魔物が「グオオオオオオッ！！」やはり！」

そこに現れたのは、熊を二倍にして額からとてもたくましい一本角を持ったやつが出てきた。

第2話（後書き）

こんな駄文を読んでくださり、ありがとうございました。

これからぼちぼちと書いていきますので、応援の程よろしく願い
いたします（、・・・）

感想などなど、お待ちしております。

第3話（前書き）

とりあえず、戦闘シーンは終わらせよう！と意気込んで書いてみました。

しかし、なにぶん初めてなもので・・・うまく頭の中で考えたシーンを読者様が想像できるか不安です。

こうしたほうがいいよですとか、こうしろや！ですとか、そういったアドバイスを随時受け付けします。

ではどうぞ！

第3話

ななななな何だこいつは！？てかでけえ！なにあの角！熊ですか！
！そうですか！

（これ九十九、落ち着かんか。）

（だだだだだってなにあれ！？）

（落ち着けというに・・・バートとやらが何か知っているみたいだから聞いたらよかるう）

あわあわしている俺に桜華が話しかけてくる、なんでそんなに冷静なんだよ！

「あれはオルガベア！なぜこんなところに・・・！」

「知っているのか！らいd・・・じゃない！バートさん、知っているんですか！」

「え、ええ・・・さっきも話したとおり、あれはこの森の奥深くに住んでいるオルガベアというBランクの魔物です。」

Bランク？なんだそれは・・・モンスターフォームか？

「そのオルガベアっていうのがなんでここまで？」

「わ、わかりません・・・」

（恐らくじやが、ここの戦いの気配に釣られて出てきたのだろう）

「そうなのか・・・って落ち着いてる場合か！どうしようっ、凄く強そうだよ！」

話を聞いて少し落ち着いた俺だったが、のしのとオルガベアが近づいて来ている。やばい！怖い！

「私達では足止めにすらならないでしょうが・・・ツクモ殿、シエラ達のことをどうかよろしくお願いします！」

なんか渋く命を捨てる覚悟決めちゃったよこの人！ちくしょうかっこいいぜっ！

（だから落ち着けというに！九十九、この世界に来てからわらわも力があがったみたいじゃ）

（いくら力があがったとはいえ、一般ピーポーな俺に戦えっていうのですか！）

（そうじゃないわ！なぜか知らんが、あることが分かったの。わらわを手を持ち力を籠めよ。九十九）

お、おう・・・なんか威厳が出たというか、そんなオーラが桜華から出てる。

（こ、こうで良いのか？）

（うむ、そして目を閉じ想いを籠めて念じよ、「顕現」と）

むむむ・・・けんげん・・・顕げん・・・顕現・・・！

「顕現せよ！」

そういつた途端、持っていた桜華から目が眩むような光が放たれた。決死の覚悟で迎え撃とうとしていたバートさん達と今にも襲い掛かろうとしていたオルガベアがその光にひるんだ。そして持ってた俺もすごく眩しい。へあゝ、めがゝめがゝ！

徐々に光が収まっていき、視力が戻ってくる。そして手には何だか柔らかい・・・そう、女の子の手のような感触が。

視線を前に向けていると、着物を着た美女が立っていた。

身長は俺の肩くらい、黒く艶のある長髪を腰まで伸ばし、袖口や裾などに桜の模様が入った黒い着物を少し着崩していて、腰帯には二本の黒い鉄扇が挿さっている。

顔は切れ長の目なのだがすこしたれていて、右目のふちに泣きボクロがある。

鼻は小ぶりながらスツとしており、瑞々しい唇は桜と同じ薄紅色。プロポーションは抜群で胸はC・・・いやDか！

着物を着崩しているの、胸元が少し顕わになっている。全体の雰囲気と泣きボクロと合わさって凄くエロイ・・・おつといけない、よだれが出そうに。

「ふむ・・・こんな姿になるのじゃな」

「えつと・・・お、桜華か・・・？」

間違えということは無いと思うが、一応聞いてみる。

「そうじゃぞ、九十九」

やっぱり当たっていた、しかしどうということだろう・・・と悩んでいると。

「おおー、これが九十九の感触か・・・やっと、やっとこの時が・・・」

ちょ、なにやってるんすか！ふぶっ！顔をはしゃむにゃー！

「可愛いのが可愛いのが・・・では長年の夢を・・・」

「え、え？あの、桜華さん。なんで顔を近づけて・・・んむっ！？」

「ちゅっ・・・ん・・・つぶあ、ふふ、ご馳走様じゃ」

う、うえええええい！？キス！？キスされたよ！？え、なんで！？どうして！？なぜにWhy！？

「ふふ、少し落ち着かんか、九十九」

「ただだだっただだっただって！キ、キ・・・キス・・・！」

「うむ、よい感じじゃった・・・これで元気百倍というやつじゃの？」

元気百倍って・・・ほら、バートさん達とあのオルガベアまでばかりんってしてろぞ。

「さて、バートとやらとお付の者よ、下がっておれ。あのけむくじやらはわらわが相手致そう」

「は・・・は？し、しかし女性の身でオルガベアは」

「なあに、わらわに掛ければあんな獣などいどころじゃ」

ちよ、そんなこといつちや「グオオオオオッ！」ほら怒ったじゃん！っていつか言葉わかるの！？

「桜華、大丈夫なのか・・・？」

「うむ、なぜか負ける気はせん。見ておれよ、九十九」

そういつつ、俺から離れた桜華は腰に挿さっていた二本の黒い鉄扇を両手に構えた。

鉄扇の長さは見た感じだと50cmくらいあるだろう。鉄で出来ているので重いはずだが、桜華は重さを感じさせずに持っている。どうなってるの？

「では往くぞ、けむくじやら！」

「ガオオオッ！」

グンッ、とそのか弱く美しい女性とは思えないほど速く飛び出した桜華。地面が少し陥没していた。

しかし、やはり動物というべきか、凄まじく速い桜華の行動が見えるのか巨腕を振り下ろすオルガベア。

だが桜華は何を思ったか、その巨腕を二本の鉄扇を交差して受け止めようとする。

「お、桜華っ！」

潰れると思った俺は思わず叫んでいた。しかし・・・

「ふむ、この程度かや？」

桜華は易々と巨腕を受け止めていた。

「ではこちらから参るぞっ！」

桜華は受け止めていた巨腕の上に弾き、両手の鉄扇を開く。そして開かれた鉄扇を弾いた巨腕に薙いだ。

「ガオオオツ！？」

鉄扇の薙がれた巨腕は深々と斬れており、その傷からおびただしい血が流れ出ている。

その血に当たらないようにか、さらにオルガベアに距離を詰める。

「はっ！ふっ！」

左右の手に持った鉄扇をオルガベアの左腕と右足に薙ぐ。飛び出る鮮血。

そして難いだ反動を利用して回転しながら飛び、首を狙う桜華。しかし野性の本能か、オルガベアはあたる直前に首を引いた。かわされたことに舌打ちをし、瞬時にオルガベアの胸を蹴り離脱する。

するとその一瞬後にオルガベアの腕が振り下ろされた。離脱しなければ叩き落されていただろう。

グオオと悔しそうに鳴き、今度はオルガベアから距離を詰める。熊の二倍ほどの大きさに似合わぬ速さで動くオルガベア。

「ふふ、中々速いのう」

楽しそうに眩き、開いていた鉄扇を左だけ閉じる。そして振り下ろされた右腕を左の鉄扇で弾き、左腕を半身ずらしてかわし、開いていた右の鉄扇で、先ほど深く斬りつけたところをもう一度斬りつける。

シュピツという風切り音が聞こえたと思ったら、オルガベアの左腕はなくなっていた。

あの細腕でオルガベアの巨腕を支えていた骨ごと斬り飛ばしたのだ。ギョオオオツと血を噴出しながら激しい痛みで踏鞴をふみ、ひるむオルガベア。その隙を逃さず右足を斬る。今度は右足が飛んだ。

「これでもうお主は逃げれまい。往生せよ！」

激しい殺気と共に、閉じていた左の鉄扇を開き、くるくるくるくと回転しながら、右足をなくしバランスを崩し倒れかけているオルガベアの至る所を斬りつける。血飛沫が舞い散るその中を黒い鉄扇を広げながら回る姿は、幻想的な舞を見ているようで俺は見惚れていた。

「これで仕舞いじゃ」

その声と共に両手の鉄扇をパチンツと閉じる。そしてその音と共に、オルガベアはズウンと力なく崩れ落ちた。

鉄扇を軽く振り、ついていた血糊を飛ばし腰帯に挿す。あれだけ激しく血飛沫が舞っていたのに、返り血一つ浴びずにこちらに近づい

てくる。

そんな桜華はまだ見惚れている俺に、コテンと首を傾げ一言呟いた。

「ご褒美、くりゃれ？」

第3話（後書き）

強いですね、桜華さん。そしてエロイです。

私の妄想では、もうエロエロです。もー、あーんなことやこーんなことウナニヲスルヤメロー！

感想などなど、お待ちしております。

第4話（前書き）

かるーい世界の説明となっています。

詳しいことは後々というところで（・・）

ではどうぞー

第4話

「ご褒美、くりやれ？」

「へ？え、あ・・・ご褒美？」

いかんいかん、ぼーっと見惚れてしまっていた。しかしご褒美ってなんだ？

「そんなもの決まっておろつ。では早速・・・」

「え、ちょちょちょ、待った！」

そんなこといいながら近づいてくる桜華に待ったをかける。そのご褒美の正体がわかったからだ。

正体は何だって？そりゃーあのーゴニョゴニョ・・・。

「む、どうしてかや？」

「ど、どうしてってほら・・・バートさん達もいるし！」

「そんなのほおって置けば良いではないか」

「そんな訳いくかー！」

バートさん達も何とか言ってくさいよ！という気持ちでバートさん達のほうを見る。

「ええ、我らのことは気にせずどうぞ」

ほら、バートさんもそういつて・・・えーっ!?!どつぞじゃないよ！周りもウンウンと頷くな！

「ふふ、では遠慮なく・・・」

「ちょ、ま・・・いやあああ!」

まるで女の子のような叫びをあげてダッシュで逃げる俺。そこ！いくじなしと言っな！

「逃がさぬっ!」

後ろからドンツという音が聞こえたと思ったら、いつの間にか目の前には桜華が居ました。

ツクモ は 逃げ出した。

しかし 回り込まれてしまった。

「えええ!?!オルガベアの時よりは、っんむうう!?!」

「はあ・・・はあ・・・息できなくて死ぬかと思った・・・」

「ふふ、すまぬのう。わらわの長年の夢だったのな」

そっぴいながら、とても幸せそうに微笑む桜華。ちくしょう可愛いじゃねえかべらぼうめ！

「も、もうよろしいので・・・？」

「うむ、まだまだしたりないが、これは後々の楽しみにしておくでしょうかの」

おずおずと聞いてきたバートさんに、にやりとしながらそう返す桜華。

怖い！怖いよこの人！後々ってなに！？何されるの！？

「では村に参りましょう、シエラ達と他の自警団員が待つておりますので」

「そっじゃの、ほら往くぞ、九十九」

「ああ、わかった・・・ってそんなにくっ付くな！」

おかしい、鉄扇だったときは確かに甘えたがりだったが、もっとしつかりしていたはずだ。

しかも夢ってなんだ？向こうの世界では聞いたことないな。

「んふふふ・・・鉄扇のときも思っていたが、九十九は良い身体付きをしておるのう」（すりすり）

や、やめてくれー！腕にくっ付かれると、む、胸が・・・胸がああ
っ！

「ツクモ様！バートおじさん！」「お兄ちゃん！おじさん！」

くっついてくる桜華をどうにか離そうとしていると、シエラちゃん
達がこちらに走ってくる。

「凄い音がしたので心配してました・・・無事で何よりです」

「一体何があつたの？」

「ああ、オルガベアが出たんだ」

そう心配そうに聞いてくる二人に、バートさんが答える。

「「オ、オルガベア！？」「」

オルガベアの名前を聞いた途端に、ものすごく驚く二人。なぜだ？

「なあ、そのオルガベアってそんなに強いのか？」

「たいしたことなかったかのう？」

「そんなにって、Bランクですよ！？普通に戦ったら王国騎士10
人は居ないと・・・、あら？」

「お兄ちゃん、その綺麗な人は誰・・・？」

疑問に思ったことを桜華に聞いたところ、シエラちゃんに突っ込ま

れる。

そして今気づいたのか、俺の腕に巻きついていてる桜華について尋ねてくる二人。なんか黒いオーラがっ！

「あ、ああ、こいつは俺の「嫁じゃ」なんだ、ってうそつくなよ！？」

「「嫁・・・？」」

ああ！黒いオーラが増した！？何だこの威圧感は！怖いです！

「ち、違うよ、こいつは俺の「妻じゃ」なんだ、ってもうやめて！？」

「むう、それでいいではないか」

よくないッス！二人のオーラで胃が痛くなってきたマッス！

「こ、こいつは俺の武器なんだ！」

「「武器？」」

「そう、ほらベルトに挿してただろ？」

それを聞いた二人は、そういえばと思ってくれたのか、オーラを抑えてくれた。

まだだしぶ残っているが。

「ですけど、今は綺麗な女性になっていますが・・・」

「ふふ、綺麗と言われると嬉しいのう。お主も鼻が高いであろう？
九十九」

しな垂れかかってこないで！二人のオーラが、オーラが増すから！！

「そ、それは何でかよくわからないけど、力を籠めた瞬間この姿になっただ」

「確かに、構えたと思ったら眩しい光が出て、気づいたら立っていましたな」

あれが一体何なのか分からないが、たぶん小説等によくある異世界移動による主人公補正で俺の元々持っていた能力が強まったんじゃないかと思う。

そして俺の能力を三人に説明すると。

「ま、まさか・・・！」

「なんと・・・伝承の中だけだと思っておりましたが、実在したとは！」

「お兄ちゃんすごい！」

な、何だ？驚いてるぞ？ミレルちゃんそんな輝いた眼で見てこないで！照れる！

「あの、伝承とは・・・？」

「それはここではなく私の家でお話しましょう。今は村の復旧をして、夕食のときにでも」

「ああ、わかりました」

向こうで食べてきたとはいえ激しい運動したから、丁度腹が減っていたところだ。

「ではそのように。シエラ、ミレル、お前達もおいで」

「はい」

「わーい、ジーナおばさんのご飯」

説明してくれるなら、その時にこの世界のこと聞いてみるか。とりあえず今は村を復旧させないとな！

そんなこんなで避難していた村人達と合流し、村をあらかた片付け終えた俺達は、そのままバートさん宅へお邪魔することにした。

「貴方、おかえりなさい。ツクモさんもお待ちしておりました。シエナ、ミレル、ツクモさんを手洗い場まで案内してあげて？」

「はい、わかりました」

「お兄ちゃんこっちだよ！」

俺達を迎えたのはバートさんの奥さんで、ジーナさんだ。村人と合流したときに挨拶を済ませている。

バートさんの家は被害があまり無かったので、ジーナさんは先に戻り夕食の準備をしてくれていた。

「貴方、本当に無事でよかったわ・・・」

「ああ、ただいま。ジーナ・・・」

そして抱きしめあっていたことは、それはまた別のお話。

「うめー！これうめー！」

「こりゃ九十九、はしたないぞ！」

「ふふふ、気に入ってくれたみたいで何よりですね。たくさんあるのでどんどん食べてくださいね？」

まじでうめー！鶏肉っぱいのをトマトソースっぱいのでコトコト煮た料理をガツガツ食いまくる俺。

他にもポテトサラダっぱいものやコンソメスープっぱいものなど、全部うまい！

「ね、ジーナおさんの料理おいしいでしょ？」

「ああ、想像してたのより更にうまいな！」

手を洗つてるときに、ミレルちゃんから如何にジーナさんの料理が美味しいかを聞いていた俺だったが、その想像を遥かに上回る美味しさだった。

昔、村一番のモテ男だったバートさんを落とした料理がこれだという。やはり男を落とすには胃袋を押さえるのが一番らしい。

そして食べ終わった俺達は、お茶を頂きつつ伝承について聞いてみた。

「バートさん、伝承についてと、よかつたらこの世界の常識なんか教えてくれませんか？」

「わかりました、お話ししましょう」

おっほんと、佇まいを直してバートさんは話し始める。

「それは遠い昔からの伝承で、『この世界が滅びに向かうとき、神々の鏡から生み出されし者、世界を救うであろう。その者、神の語り手という者也』という話で、何でも聖剣などの伝説の武器を具現化し、世界を救ったといわれているのです」

「なるほど、確かに鏡に吸い込まれたしなあ、それに具現化？もできるし・・・でも世界を救うって何だ？」

「最近なぜかわかりませんが、魔物達が活発化していると噂になっているのです・・・そちらの方が倒したオルガベアも、本来ならこのような所まで出てくるはずはないのです」

うはー、これはベタな展開だぞー。きっとその原因は魔王とかそんなのだろー！

「ひとまず話はわかりました、それでこちらの常識とか注意することってありますか？」

「ツクモ殿はこれからどうなさるおつもりで？」

「うーん、とりあえず旅をしていこうかなと思ってます。なんか救わないと帰れなさそうだし？」

「なるほど・・・常識は追々教えていきましょう。注意する点は、盗賊や山賊などや魔物がいるということでしょうか」

「うーむ、オルガベアみたいなのがうじゃうじゃ居たら困るな・・・ん、Bランクって何かきいてみよう。」

「バートさん、オルガベアにBランクって言ってたのは何ですか？」

「ああ、あれはギルドによって定められているランクですよ。ギルドというのは村や町に必ずあります」

「ギルドですか・・・それって何か大事なんですか？」

「そうですね、冒険者なら登録したほうがいいかもしれません。ギルドというのはEからSSランクまでありまして、クエストというのをこなしていけばランクが上がるシステムとなっています。詳しいことはギルドで聞いたほうがいいでしょう」

「おー、やっぱりあったか。何だかゲームの世界みたいでわくわくしてくるなあ。」

「じゃあ、登録しておこうかな」

「それがいいのう」

「では明日シエラ達に案内させましょう」

わくわくしすぎて今日寝れるか心配になってきたな。

「しかし・・・この村はいいのですが、大きな町のギルドにオウ力殿を連れて行くのはやめたほうがいいかもしれません」

「なぜじゃ？」

「冒険者というのは、粗忽者が多いので・・・もちろんそうじゃない人もいるのですが」

「あー、なるほど・・・桜華は綺麗だし、特徴的な服を着てるからなあ」

「きつ・・・綺麗など・・・九十九に言われると照れるではないかあ」

あ、なんか顔を赤らめてクネクネし始めた。可愛いなあ。

「うーん、しかしなあ・・・連れていけないわけにもなあ・・・」

「それなら、元の姿に戻ればよかろう？」

「できるの!？」

だつたら最初から言えＹＯ！

「だが、町に着いたらの話だけどの」

「え、なんで？」

「人間の姿に憧れておったのもあるが、こうして九十九と触れ合えるという理由が一番じゃのう」

そっぴいながら俺にしな垂れかかってくる桜華。ふおおお！柔らかいものがっ！

「ツクモ様、お茶のお代わりはいりませんか？」

「iiiiiii頂きます！」

いつの間に近づいてきたシエラちゃんから、例のごとく黒いオーラがあふれ出していた。

なぜだかわからないが、胃がキリキリしてきた。怖いです。

「ごほん、とりあえず今日のところはお休みになられたほうがよろしいですな。シエラ、二人を案内してあげなさい」

「はい、ではこちらですツクモ様、オウ力様」

にこやかに笑いつつオーラを漂わせながら案内してくれるシエラちゃん。これに比べたらさっきのオルガベアなんて怖くないぜ！

「ではツクモ様はこちらで、オウ力様はお隣の部屋になってます」

「なんじゃと！わらわは九十九と同じ部屋に決まっておろう！」

「えええ！？その姿で！？」

「もちろんじゃ、それに夜はまだまだ長いゆえ、お楽しみと往こうではないか」

お、お楽しみって！だめだめ！なにするつもりなの！！

「ミレルも居ますので、そういうわけには参りませんよ・・・」

あばばばば、シエラちゃんのオーラが更に噴出して渦巻いてるよ！ゴゴゴって聞こえるよ！？

「む、むう・・・ならば仕方の・・・」

「わかってくださり、ありがとうございます」

シエラちゃんつええええ！

そうして異世界で初めての夜が更けていった。

第4話（後書き）

はい！読んでくださりありがとうございました！

ほんとにちよつとしか説明してないのですが、少し補足を。

世界の名前とか大陸とか国の名前とかは、次の町で明らかにあります。決してこの話で説明するのがめんどくさいんじゃないですよ？

後は考えてるのですが、シエラ&ミレルをレギュラーにするか、ここでお別れにするか悩んでおります。

シナリオをちゃんと考えているというわけじゃなくて行き当たりばったりでやっているところなんです、わかります（´・・´）

そんなわけでして、もしレギュラーにしてくれ！っていうのでしたらご一報をw

では感想などなど、お待ちしております。

第5話（前書き）

皆様こんばんわー。

やってきました、冒険者ギルド。綺麗なお姉さんに話しかけ、説明も終わりいざクエストへ！というお話になってますが。まだ冒険に出ません・・・ああ！物を投げないでください！痛い！

相変わらずの説明パートですが、ご容赦ください。

ではどうぞー

第5話

「ふぁーあ、よく寝たぁ」

昨日は案内された部屋に入っすぐ、ベッドINしてしまった。疲れてたのかな。

眼をこしこしと擦りながら、ベッドから立ち上がる。

「んー・・・今何時だろうか」

もちろんこの世界には時間の概念はあるらしいが、この家には時計がないらしい。ちょっと不便だ。

「まあ、大きい町に出たら探してみるか」

そう呟き、俺は居間に向かった。

「おはようございます、ツクモ殿。今朝は早いですな」

「おはようございます、バートさん。早いつて今何時くらいですか？」

「太陽を見るに、8時くらいでしょうな。よく眠れましたか？」

なんと、目覚まし無しで8時に起きた！人生初の快挙だ……。

「ええ、おかげさまでよく眠れました。太陽を見るにつて、時計はないんですか？」

「残念ながら……。」

そう聞くと、バートさんは申し訳なさそうな顔をした。

「時計というのは高価でしてな……一般家庭で持つてゐる人はあまりいないのです」

「そうなんですか……ところで、他の皆は？」

基本手作りになるから高いんだろう。

これ以上聞くのもアレなので、話を変えることにした。

「ジーナとシエラは朝食の準備を、ミレルとオウカ殿はまだ寝てるようですね」

「そうですか、じゃあ俺は桜華を起こしてきますね」

さてさて、桜華の部屋は……ここか。

あいつ鉄扇だったときから寝起きが悪かったからな……物で低血圧ってなによ？

「桜華ー、入るぞー」

「ん．．．う．．．」

「おー、案の定ぐっすりだな」

シャツとカーテンを開け、桜華を揺する。

「おーい、起きろー」

「むう．．．後3年．．．」

「なげえよ！ほら、起きろ！」

「どんだけ寝るんだよ！」

そう心の中でもつつこみつっ、起きないのでさっきより強く揺する。

「む、むー．．．九十九．．．つくもお．．．」

「うおおお！？こら！抱きついてくるな！」

「柔らかいんです！何がと言わないけどね！」

「ふふふ、つくもお．．．一緒に寝よ．．．う．．．」

「だー！また寝ようとするな！そして俺をひっぱりこむなー！」

そんなやりとりをしていると、ガチャツという音が聞こえ、一拍置いてからものすごい殺気が押し寄せてきた。
この感じ．．．シエラちゃんか！？

「朝から、なにを、しているの、ですか・・・？」

「ひいつ！？なんでもございせん！！」

起こしてきたミレルちゃんを連れて入ってきたシエラちゃんは、笑顔を浮かべながら聞いてきた。

その区切り区切りの言葉に恐怖を感じた俺は、今までにない速さで桜華から離れる。

「ちっ・・・いい所で邪魔しよって・・・」

「起きてたのかよ！？」

舌打ちしながらのそのそと起きはじめ。

桜華・・・恐ろしい子！

「朝食ができましたので、どうぞいらしてください」

さわやかにっこり笑顔とは裏腹に殺気を放つシエラちゃん。
失神しそうなので、殺気やめてください。

「ツクモ殿、ギルドの登録が終わったらすぐに出発なさるのですか

「？」

「あー、それも考えたんですけど、旅をするのにお金を貯めないと行けないので、この村で少しクエストをしようかと思ってます」

何にしても、先立つものは必要なですよ・・・

「なるほど、いかほど貯めるおつもりですか？」

「んー・・・旅するのに十分なくらいですねえ」

「ふむ・・・これからのことを考えると5000ゴールドくらいでしような」

「ゴールド？」

なんだ？こっちの通貨か？

そっいえば金の事とか何も知らないな、俺。

「ああ、ツクモ殿はこちらのことをよく知らないでしたな」

「ええ、よかつたら教えてくれませんか？」

「わかりました、まずこの大陸の通貨はゴールドといいます」

バートさんはそう言いつつ、腰の袋から1枚のコインを出した。

「これで1ゴールドですな。この銅貨のほかに、銀貨と金貨があります」

「へえー、銀貨と銀貨の価値ってどれくらいですか？」

「この銅貨1000枚で銀貨1枚、10000枚で金貨1枚となっています」

ふむふむ。

「そして銀貨10枚で金貨1枚ということですね。例外として、このコインが欠けたらその分だけ価値が下がるようになっていきます。その場合は受け取る側との話し合いになると思いますぞ」

「なるほどー、うーん・・・どれくらい貯めればいいんでしょう？」

「そうですね・・・大人一人が一日で使う食費が約30ゴールドです。宿は高級じゃない所なら80ゴールドから100ゴールドくらいですから、万が一のことを考えると5000ゴールドくらいがよろしいかと思います」

ほー、そんなものなのか・・・つまりー、1ゴールド100円って感じか？

そう考えると、5000ゴールドは中々貯まらないなあ。

「宿代があつては中々貯まらないでしょう、どうぞ我が家をお使いください」

「え、いいんですか？」

「もちろん、この村を救ってくださったのです。これくらいは当然ですよ」

そう言うてはっはっはとにこやかに笑うバートさん。そこに痺れる
憧れるう！

でも悪いなあ、食費くらいは払ったほうがいいよな。

「ありがとうございます、でも悪いので食費は出しますよ。クエ
ストが無事終わってからですが・・・」

「気にしなくても・・・と言いたい所ですが、そうしてくれると助
かります」

そりゃ、襲われたばかりならしかたないわなあ。

「ついでに、この世界の国々のこともお教えしましょうか？」

「あ、お願いします」

バートさんは机にあった地図を取り出した。

「まずこの一番大きな大陸はドルーガリフといます。そしてこの
大陸にはサザーランド王国とミッシュガルド帝国がちょうど半分ず
つ治めています。この二つは現在戦争はしてませんからご安心を。
そして私達が住む、フレッセント村があるのはサザーランド王国で
すな」

地図の真ん中にはドでかい大陸がドーンと描かれてある。地図か
ら見ると、大きさや形はアフリカ大陸くらいか？

その左にはドルーガリフ大陸の半分くらいの大きさの大陸と、二つ
の大陸から少し離れたところに、一回り小さい大陸がある。

「この大陸と小さい大陸は？」

「隣の大陸アルーガリフといい、聖アルサルム教国が治めていて、その隣は未開の大陸ですな」

ほうほう、大陸は全部で3つしかないんだな。

「うーん、どこに向かうか・・・」

「目的がないのなら・・・そうですね、幸いここからサザーランド王国王都ザナログリフまで、歩いて10日もあればいける距離です。そこで色々と情報を集めるといいでしょう」

「おお、そうなんですか」

じゃあ当面の目標は王都ザナログリフに向かうでしょう。

その後、バートさんにこの世界の常識と呼ばれるものを教えてもらい、一通り教わったところでギルドに登録をしにいった。

「冒険者ギルドによつこそ」

到着した俺達は、窓口に向かい、早速登録をする。

「あの、ギルドに登録したいんですが」

「ありがとうございます、後ろの方達も一緒にしようか？」

「ああ、登録するのは俺だけです」

「かしこまりました、ではこちらにお名前をお書きください」

「ぎゃー！バートさんに文字を教わるの忘れてたー！？」

「異世界移動のおかげか、文字は読めるんだが・・・うーむ。」

「どうしようと悩んでいたのに気づいたのか、受付のお姉さんがフォローしてくる。」

「文字が書けないようでしたら、私が代筆致します」

「あ・・・お願いします」

「その気遣いに惚れちゃいそうです、お姉さん。」

「かしこまりました、ではお名前をどうぞ」

「吉原・・・あー、ツクモ・ヨシハラです」

「ツクモ・ヨシハラ様ですね」

「おおっ、こっちではこう書くのか。何か不思議な感じだ。」

「それでは次に、戦闘タイプをおっしゃってください」

「戦闘タイプ・・・うーむ、俺の戦闘タイプってなんだ？」

わからなかったので後ろの三人に相談してみる。

「勇者様はどうでしょうか？」

シエラちゃん、それは恥ずかしいというか、自信過剰すぎる！

「んー・・・お兄ちゃん！」

ミレルちゃん、もはや戦闘タイプじゃない！

「そうだのう、何があるのか聞いてみるといい」

「そうするか。すみません、戦闘タイプってどんなのがあるんですか？」

「戦闘タイプですね、一概にこれといった定義はありませんが。剣が得意なら剣士、いろんな武器を使うなら戦士、魔法が得意なら魔法使い、神に仕える者でしたら神官、といった具合になっております。もちろん騎士の称号を持っていましたら騎士でも構いません」

なるほど、でも俺って剣は使えないし、魔法も使えないし、神に仕えてないし、騎士の称号なんてのも持ってないぞ。
と、なると・・・

「じゃあ戦士でお願いします」

「かしこまりました、では登録致しますのでしばらくお待ちください」

い」

そう声をかけ奥にひっこんだ受付のお姉さん。
見計らって桜華が話しかけてくる。

「九十九や、どうして戦士なのじゃ？」

「ほら、俺は剣もってないし、唯一の武器っていったら桜華だしな。
だから戦士にした」

「なるほどの・・・そこまでわらわのことを想ってくれるとは嬉しいのう」

その言葉を聞いて何が嬉しかったのか、笑顔で抱きついてくる桜華。
目立つからやめてくれ！

「お待たせ致しました、こちらのブレスレットをお付けください」

そう言いつつお姉さんが渡してきたのは、黒いブレスレットだった。

「これは？」

「そちらのブレスレットにツクモ様個人情報やギルド情報が入っております。もし破損や紛失した場合は千ゴールドで再発行を致します」

なるほど、結構高いんだなあ。

「続きまして、まず冒険者にはランクといったものがございます。
このランクはクエストによってポイントがありまして、そのポイン

トが溜まったら次のランクに昇格いたします。そして、自分のランクより上のクエストは受けられません。さらに、同ランクの5人の方とパーティを組まれれば、一つ上のクエストを受けることができます。」

な、なんだかややこしくなつて来たな・・・

「その上で一つ注意がございます。例えばツクモ様がランクEと仮定します。そしてランクDの方4名とパーティを組むときは、そのツクモ様のパーティはランクEの依頼しか受けることはできません。これはランクが低い方の危険を避けるための措置です。ですが、そうした場合ランクDの方はポイントが半分しかもらえません。ここまでではよろしいですか？」

「はい、大丈夫です」

「続きましてクエストの受け方ですが、入り口右手側にございます、クエストボードから用紙を持って、こちらのカウンターで受付し、出発となっております。ランクごとに分けて張っておりますので、あちらからご利用ください。ツクモ様のランクですが、どなたからも紹介がなかったためEランクからとなっております。ランクEからランクDまでは500ポイント必要となっております。ランクはEからSSランクまでとなっております。ランクが上がりますと、下のランクでパーティを組んだとき以外、報酬の半分以上をギルドが頂くことになっていきますので、お気をつけください」

ランク上がって、下を受けると半額しかもらえないのか・・・まあ、ペナルティがないと下のクエストばかり受けるからなあ。あと500ポイントって長いのか・・・？

「魔物討伐系のクエストを完了した場合は、魔物の部位を持ってくる
てください。それが証明となります」

「部位、ですか？」

「はい、例えばランクEの魔物レッサーアントでしたら牙、ワンハンドクラブなら爪といった物ですね。詳しくは魔物図鑑を購入するか、クエストを受ける際に私どもにお聞きください」

なるほどなるほど、如何にもクエストって感じだな。

「以上で説明を終わらせて頂きますが、何かご質問はございますか？」

「んーと、特にないです」

「かしこまりました、ではまたのご利用をお待ちしております」

説明を聞き終えた俺達は、早速ボードに向かった。何かいいのある
といいな。

「ふむ、農場の草刈り20ポイントと100ゴールドか・・・これって高いのか？」

「どうなんでしょう・・・その広さにもよりますが、普通に受ける分なら問題ないと思いますよ？」

「そーなのかー」

「ふふ、あまりやりたくなさそうですね」

「そりゃあ、草刈だしなあ・・・」

「やっぱり、クエストといったら魔物を倒したり、冒険だよなー」

「こつ、心が熱くなる感じのやつがあればいいよな！」

「まあ、まだまだ時間あるし、よく吟味しておくか！」

「そうじゃの」

「私達は家でお待ちしてます。クエストがんばってくださいね」

「がんばってねー！」

クエストについてこれないシエラちゃん達は家に帰っていき、俺と桜華はクエスト選びを始める。

「ふむ、ネコを探して、5ポイント10ゴールドか、ダメだな」

「こつちは犬じゃの」

ちなみに、魔物以外は向こうの世界と同じ動物がいるらしい。
あんまりいいのがないなあ・・・と思っていると、一番端にいいものを見つけた。

「桜華、桜華！遺跡調査だってよ、これいいんじゃないか？」

「ほうー、でも危険ではないのかえ？」

「いや、魔物の掃討は終わってるらしくて、学者さん連れての調査なんだってさ」

「ふむ、ちなみに報酬はどうなってる？」

「100ポイントに500ゴールドだってよ、行くっぜ！」

遺跡調査という如何にもファンタジー的なクエストに興奮してしまう俺。男として普通だよな！
はしゃいでる俺を見て、桜華は・・・

「ふふ、微笑ましいのう」

「おわ！子供じゃないんだから頭を撫でるなよ！」

「わらわにすれば、九十九はまだまだ子供じゃよ」

と、頭を撫でてくる。恥ずかしいからやめてください。

「とにかく、これ行こうぜ！」

「
うむ」

こうして俺達の初クエストが始まるのだった。

第5話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

いきなり次の町にいくのもなーお金のこともあるからなーと思い、とりあえずしばらく滞在させておくことにしました。

次の話ではなんと・・・！と期待させておきますw

感想などなど、お待ちしております。

第6話（前書き）

さくさく更新しますよ！

いつまでさくさく出来るかわかりませんが、出来る限りがんばります！

さてさて、遺跡調査に向かうために依頼人の下へいく九十九達。

合流し、遺跡調査に乗り出した依頼人と九十九。そこに待ち受けていたものとは！

ではどうぞ～

第6話

「甘える子猫亭は・・・あった、ここだ」

遺跡調査のクエストを受けた俺達は、依頼人の学者が待つこの村で唯一の宿屋にやってきた。

やたら可愛い名前の宿屋だな。

中に入ると、正面に受付があり、左手に階段、右手には食堂兼酒場があった。

俺は宿の主人に挨拶をし、そのまま右手に向かった。

「えーと、依頼人は・・・」

学者の特徴といえば、白衣やら変な帽子だと思っている俺は、とりあえずそんな服装をしてる人を探し始める。食堂には数人いるのだが、村人っぽい人と冒険者っぽい人しか居なかった。

「あれ、まだ着てないのか？」

クエスト依頼書を片手にキョロキョロしていると、如何にも冒険者！という感じのお姉さんが話しかけてきた。

「貴方、もしかして遺跡調査のクエスト受けたかしら？」

「え、はい、そうですけど・・・？」

「待ってたわ、私がクエストを依頼したクレアよ」

「ええっ、冒険者だったんですか？」

「あはは、違うわよ。最近は物騒だからね、旅をしている以上学者と言っても戦えないとダメなのよ」

「そうだったんですか・・・」

どう見てもやり手の女冒険者にしか見えなかったよ！

依頼人のクレアさんは、背は175cmある俺より少し小さいくらいで、綺麗な金髪ウェーブを肩口でそろえている。眼は碧眼で如何にも外国人ですよって感じの美人さんだ。

「それにしても全然受けてくれる人が居なくて困ってたのよ、助かったわ」

「え、こんな高いポイントとお金もらえるのにですか？」

「ええ、いくら周辺の魔物を掃討したといっても、成り立ての冒険者は怖がって受けてくれないし、かと言ってDランクにはこれより高いクエストばかりだしね」

「はあー、ラッキーではなかったのか」

「見たところ貴方も成り立てのようだけど、武器は何を使うのかしら？」

やっぱり成り立てってばれてしまうのか、そんなことを聞いてきた。そりゃ心配だわな。でも安心してくれ、俺には桜華がいるからな！
(他力本願)

「ああ、俺はこいつを使います」

「えーと・・・鈍器かしら？」

パーティーで依頼を受けたわけじゃないので、桜華には元の姿に戻っててもらっている。

クリアさんにいつものベルトに挿した桜華を見せたが、どんな武器か分からなかったみたいだ。

「ちよつと違うんですけどね、こつやつて開くと斬撃にも使えるんですよ」

と、開いた桜華を軽く振って見せる。シュピツといい音が聞こえた。

「へえ、変わった武器ね・・・それに美しいわ」

そう、桜華は閉じていると黒い鉄の棒のように見えてしまうが、開くと桜を象った模様が、夜空一面に広がっているようでとても綺麗なのだ。

（美しいといわれると、やはり照れるのう）

（まあ、実際に美しいからな）

（・・・ッ!?!）

ははは、照れてる照れてる。可愛いなあ。

「それで、クリアさんは遺跡でなにをするんですか？」

「ああ、あの遺跡には神を祭っていたみたいで、壁一面に不思議な文字が書かれてるのよ。それを一度見てみたくてね」

「ほー、そうなんですか」

神を祭っていたのかー、お宝がありそうだけど、もう調べ尽くしてあるみたいだから、残念だけどもうないだろうなあ。ちえ。

「さて、それじゃ早速いきましょうか」

「わかりました、がんばりましょう!」

木の枝と枝の間から、燦々と煌く日の光を浴びながら歩くこと一時間。遺跡の入り口と思われる場所に到着した。

道中、依頼書に書いてあった通り、魔物と一匹も遭遇しなかった。動物は居ただけだね。

「これがここの遺跡、フレッセント遺跡よ」

「おー、ここがそうなんですか」

フレッセント村にあるからフレッセント遺跡というらしい、安直だ

ね！

「さ、時間も惜しいし行きましょう」

「はい！」

うおー、遺跡だ、生遺跡だー！とはしゃぎながら調査を開始する俺。クレアさんは若干興奮気味に壁の文字を読み、書き写しながら進んでいく。ちよっと色っぽい。

「はぁ・・・すばらしいわ。ここまで完璧に残ってるなんて・・・」

「普通の遺跡ってこんなに綺麗じゃないんですか？」

「そうなのよ、大抵は所々魔物に壊されていたりとか、ギルドに発見を報告しない低脳で！下種で！屑な！冒険者に荒らされてたりするわ」

ちよ、クレアさん怖いです！

しかし、本当に学者なんだなぁ・・・と感心する。

「もちろん、そんな冒険者ばかりではないのだけどね」

「あ、あはは・・・気をつけます」

「そうして頂戴、遺跡というのは先祖が私達に残してくれた貴重な財産よ。それを壊す、荒らすということは先祖の顔に泥を塗ることと同じだわ」

「熱心なんですね」

「あはは、学者として当たり前のことを言っただけよ」

若干照れながらもそう答えるクレアさん。尊敬しちゃうね！

「この先にある大部屋が私が一番見たかった所よ、魔物も居ないみたいだから、書き写すことに集中できるわね」

石で出来た大きい扉を二人掛りで開いた先は、ドーム型の部屋になっており、先祖が残したとされている文字や絵が、壁一面に描かれていた。

「ああ・・・すばらしい！とてもすばらしいわ！」

さつきよりも興奮しながら一心不乱に書き写すクレアさん。

「しかしこれだけのものを書き写すって時間かかりそうだなあ・・・暇だし、ここらへんぶらぶらしてくるか。桜華もそうしたいだろ？」

（うむ、そうじゃの。しかしここは神聖な空気が満ちておるのう。気持ちがいいわ）

「ほー、そうなのか・・・クレアさん！俺ちよつと周辺を見てきますね！」

「わかったわ、気をつけてね！」

いきなり居なくなるのもどうかと思い、クレアさんに声をかける。返事をもらったし、行きますか！

この部屋に来る途中に、色々和小部屋があつたので、そこを見てまわることにした。クレアさんが学者仲間から聞いた話では、小部屋には文字や絵が描かれてないらしく、クレアさんは素通りしていた。しかし異世界初クエストな俺としては、全部見て回らないと気がすまない！ということで只今見回っている最中である。

「ほー、石で出来た寢床だ。机もあるし、使用人の部屋かね」

（どうやらそうみたいじゃのう）

あちこち見て回っていた俺だが、今まで見てきた小部屋とは違う感じの部屋にたどり着いた。

「今までが使用人の部屋なら、ここは偉い人の部屋みたいだな」

中に入り、色々調べまわる。遺跡ってすごいなあ。

（む・・・九十九、何なら隅にある岩から大きな神気が溢れておる）

「神気？この変な模様の入った岩からか？」

（いや・・・この岩の奥からじゃ）

奥？てことは動くのか？よし、やってみよう！

「ぜえ・・・はあ・・・ぜえ・・・はあ・・・全然動かねえじゃんか！」

押したり引いたりしてみたが、全然びくともしなかった。

（おかしいのう・・・確かにこの奥から溢れているのじゃが）

「ちくしょう、岩の分際で！」

腹が立った俺は、岩の側面を強く蹴った。すると・・・

ゴゴゴゴという音と共に岩が横にずれていった。なぜかと思いついてみる。

よく見ると、つま先が当たった部分が少しへこんでいる。なるほど、へこんでる部分に強い衝撃を与えると動く仕組みになってるのか。

（おおっ、でかしたぞ！九十九！）

「おうよー！じゃあ行って見ようぜー！」

コツコツと下に続く階段を下りていった俺達は、さっきの大広間にあった扉より豪勢な作りの扉が現れた。

（ほおー、すばらしいの。この事をあの学者に知らせなくていいのかや？）

「んー、もしかすると魔物がいるかもしれないし、先に調べてから報告するさ」

魔物が居たとして、学者さんに戦わせるわけには行かないしな。

（そうか、では参ろうぞ）

「うし、思いつきり押すぜ！」

さっきは二人掛りでゆっくりと開いていったから、一人だし思いつきり押してみよう。

「いくぜー、どりゃーっあああああ！？」

手が触れた瞬間に、カコンといとも簡単に開いた扉。思いつきりよく開け様としたせいか、勢いあまって転がってしまった。そして、何か硬いものにゴンツと後頭部からぶつかった。

「いつてえええ！？」

うおおお、と頭を抑えて悶えていた俺に桜華が声をかけてきた。

（九十九、九十九！）

「おおおう・・・お・・・おー、どうした？」

（この剣から神気があふれ出しておるようじゃ）

「剣だと？」

まだ痛むが、気にせず後ろを向く。するとそこには、とても綺麗な剣が刺さっていた。

半分ほど埋まっているが、刃には壁で見た昔の言葉が刻んであつて薄く光っている。上にいくと鏝には大きな青い宝石がはめ込まれており、両側には羽の模様が刻まれている。

そして柄頭には、鏝と同じ宝石がはめ込まれてあつた。

「ほおー・・・綺麗だな・・・」

（九十九！不用意に触れるでない！）

いつの間にか、綺麗な物を手にしたいという欲求に負けて、柄を握っていた。

すると頭の中に声が響いた。

（私の声が聞こえますか？）

「お、おう・・・聞こえる」

（あぁっ、この時を・・・この時をどれほど待ち続けたことか・・・！）

愛しいものにようやく会えたような、感動した声が響く。

「む、むう・・・なんだかよくわからないが、良かったな？」

（はいっ！本当に良かったです！）

「うむ、元気がよろしいようで。それじゃ！」

シュタツと手を上げ、その場を去ろうとする俺に焦ったように声をかけてくる剣。

（あああ！待ってください！行かないでっ！）

「あはは、冗談だよ、冗談」

（主様は意地悪です・・・）

「ごめんごめん・・・主様？」

（はい！主様です！）

えーと、どうということなの？

「あの、主様って・・・？」

（え？主様は主様ですけど・・・呼び方嫌ですか？）

「いや、それはどうでもいいんだけど、何で主様なの？」

（だって、語り手様ですよ？）

「えーと、何かそうみたいだけど・・・」

（私は語り手様のために作られたんです、ですから語り手様が主様なんです！）

おおい！どついうことだこれ！！

「つ、つまり・・・君は俺の物ってこと？」

（いゃん、主様ったら大胆・・・でもそついうところもす・て・き）

す・て・き　じゃねえよ！訳を説明しろ！

（まあ、落ち着け、九十九よ）

「あ、ああ・・・そつだな」

（む・・・そこの貴方は何者ですか？）

（む？わらわは九十九の嫁じゃが・・・）

（なんですつて！？）

こら桜華、しれつと嘘ついてるんじゃないやありません！

「こいつは俺の相棒だ、名前は桜華」

（そ、そうでしたか・・・）

（相棒・・・九十九のいけずう）

しよげている桜華をほおっておいて、話を進める。

「それで、俺が君の主ってわかったけど、名前とかってあるのか？」

（あ、そうでした。私の名前は聖剣セラフィムと申します。主様）

「セラフィムか、セラって呼んでいいか？」

（はいっ）

「それでセラ、俺が君の主ってわかったけど、どうすればいいんだ？」

嬉しそうにしていると、話を悪いけど、話が進まないんでな！

（あ、はい。えーと、私を抜いてから、力を籠めて、顕現せよと強く念じてください）

「ああ、あれか。わかった」

柄を持ったままだった俺は、そのままゆっくりと上に抜いていく。セラは想像以上に軽く、まるで羽を持っているようだった。そしてそのままセラを両手に構え、力を籠めて念じる。

「顕現せよ！」

その言葉と共に部屋一面に眩しくも優しい光が広がっていった。

第6話（後書き）

はい、いかがだったでしょうか。

新しい仲間が出来ましたよ、その名も聖剣セラフィム！

ペンネーム見て分かる方もいると思いますが、私は天使が好きなんです。

なので、どうせなら天使の名前でいいかなー？と安直につけました。本当は天使の名前じゃないんですけどね、役職みたいな感じですよw

では、感想などなど、お待ちしております！

第7話（前書き）

この小説にアクセスしてくれた方が、なんと1万人越えました！
こんな駄文を読んでくださり感動しております！！

これを励みにがんばって行きますので、どうかこれからもよろしく
お願いしますw

ではどうぞ～

第7話

眩く優しい光が徐々に引いていく。
ゆつくりと眼をあけると、超が着くほどの美人さんが目の前にいた。

「セラ・・・か？」

「はい、主様。セラにございます」

「はぁー・・・えらい美人だな」

「まあ、照れてしまいますわ」

（浮気者ー！）

率直な意見を言ったらセラが頬を染めて照れる。ていうか桜華、浮気者ってなんだよ！

背は俺の肩くらいで、美しく輝く銀髪を青いリボンで腰で纏めている。

眼の色は深みのある蒼色で、鼻筋はすつと通っていて、黄金比ここに極まれりな顔をしている。

プロポーションは出ているところは出て、引っ込んでいるところはキユツとしまっている。

服装は膝丈までの真っ白なワンピースに、銀で出来たこの世界の古い文字が刻まれた胸当てと間接を守るプロテクター、それと同じく銀で出来たガントレットとブーツ装備している。

腰には革で出来たコルセットとびっしりと古代文字が刻まれたベル

トをつけており、自分と同じ剣が銀で出来た鞘に収められている。
うまく想像できない人はどこぞの騎士王みたいな格好と思ってくれ
ていい。

そんな風に観察していると、セラは俺の目の前で片膝をつき、祈る
ような姿勢になった。

「私はとても長い間、主様をお待ちしておりました。これから貴
方の剣となり、邪悪なる者を全て切り払い、主様に指一本触れさせ
ないとこの剣に懸けて誓います」

「う、うん。よろしくな、セラ」

「はいっ！」

（一応、よろしくしてやらんこともない・・・だが九十九は渡さぬ
ぞ！）

「ふふ・・・是が非でも頂きましょう」

ああ、桜華とセラの間に火花が散ってるようにみえるのはなぜだろ
う・・・

と、そんな風に現実逃避していると。セラが真剣な顔つきになった。

「どうした？」

「主様、悪しき気配がこちらに近づいてきております」

「悪しき気配・・・？って魔物か！？」

「はい、気配の数が多いので恐らく群れでしょう」

「た、大変だ！早くクレアさんに知らせなきゃ！」

「っていうか、この辺の魔物掃討したんじゃないかねえのかよ！」

「大変だ！クレアさん！」

「ひゃっ！ど、どうしたの？」

壁画を写すことに集中していたクレアさんに、魔物の襲来を大声で知らせる。

「魔物の群れがこっちに向かってきているらしいんだ！早く逃げないと！」

「あはは、そんなまさか・・・本当なの？」

「はい、間違いなく」

「貴方は・・・？」

「そんなことよりも早く逃げない！」

今はセラを説明している時間も惜しい、初クエストで死亡なんてやつてられるか！

「もしそれが本当だとしたら、この遺跡は魔物に荒らされてしまうかもしれないわ」

「そ、そうかもしれないけど！」

「私は貴方に説明したはずよ、こんなすばらしい遺跡を破壊させたりなんかしないわ！」

剣を抜き放ち、天高らかに宣言するクレアさん。
か、かつこいい・・・じゃなくて！

「でも群れなんだ！俺達では・・・」

「ふふふ、主様は私をお忘れですか？」

「え、セラ・・・？」

「気配からして、数は30近くですが、私には造作もありませんわ」
見惚れるような笑みを浮かべ、そう言い放つセラ。
そんなセラに桜華は確信をもって言った。

（まあ、あの程度の気配ならセラにはかすり傷一つつけられないだろうて。無論わらわも余裕じゃがの）

「そうなのか・・・3人なら何とかなる・・・のか？」

いや、でも依頼主に戦わせるわけにも行かないよな・・・

「ふふふ、主様達のお手を煩わせることもございません。私一人で十分ですわ」

「す、すごい自信ね・・・とにかく、早く外に出ましょう」

外に出た俺達は、ここに向かってくる魔物を待ち構える。

ドドドつと地鳴りが聞こえ、遠くに魔物らしき影が見てきた。

「あれは・・・Dランクのサーベルウルフの群れね。でも何て数なの・・・」

クレアさん曰く。

サーベルウルフはその名前の通り、サーベルのような長い牙を持った狼だ。

大きさは成人男性くらいで、動きはすばやいが攻撃は単調なのでランクは低い。

だが群れだと必ず一回り大きなボスがいる。そいつが統率しているので少しばかり厄介な敵らしい。

普段は5匹程度の群れなのだが、今回は30匹近く・・・なんでもんなに？

「恐らくけど、ここの掃討で群れ同士が合流したんだと思うわ。そして住家によさそうなこの遺跡に来たんでしょう」

「なるほど・・・セラ、いけるか？」

「お任せください。主様」

美しい剣を抜き放つ、遺跡内でも光っていた刃だが、日の光を受けて更に輝きを増す。

そして剣を構え、一気に飛び出す！

凄まじい速さで先頭にいたサーベルウルフに横薙ぎで切りかかる。そのあまりの速さにサーベルウルフは対応できず、無抵抗のまま真っ二つに切り裂かれる。

振り切ったセラは、その勢いを殺さず回転し、横にいた奴らの首を飛ばす。

暴風みtainな攻撃で、一瞬にして5匹のサーベルウルフを屠ったセラ。

それを見て、ボスは指示を出すように遠吠えをした。

その遠吠えを聞いた部下達は、セラを囲むように散開する。

「少しは頭が回るようですが、その程度では私を止めることはできません、よっ！」

完全に囲まれる前に動き出すセラ。狙いは一点、ボスのみだ。

部下を散開させたことによって、ボスを守る壁は薄くなったところ
ついたので。

「はあああつ！」

剣に光を纏わせたセラは、ボスを守ろうと前に出てきたサーベルウ
ルフ達に向けて剣を振るう。

剣から凄まじい衝撃波が生まれサーベルウルフ達を切り刻んだ。

「ふっ！」

後ろから飛び掛ってきたサーベルウルフを後ろ回し蹴りで吹き飛ば
し、横からきた奴を反動を利用して両断する。

囲まれているのを物ともせず、近づかせないセラ。

嵐のような斬撃と、時折体術を織り交ぜ、サーベルウルフはどんど
ん数を減らしていく。

敵を蹴散らすその姿は、まるで美しい剣舞を見ているようだった。

一歩引いたところから見ていた群れのボスは勝てないと悟り、部下
に指示を出す。

殿を数匹残して、撤退することを選んだみたいだ。

「そう簡単に逃がしはしません！」

指示を受けた部下は、決死の覚悟でセラに向かってくる。

しかし、セラは剣を上段に構え、神々しく輝く神気を大量に纏わせ
る。

「我が振るうは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝き！ジャ

ツジメント・セイヴァアアア!!」

目が眩むような輝きを纏わせた剣を振り下ろす。
刹那、凄まじい光が轟音と共に、向かってきたサーベルウルフ達を飲み込む。

しかしそれだけでは止まらず、大地を抉り、岩を砕き、木をなぎ倒しながら一目散に逃げていた群れをも飲み込んでいった。

「ど、どうなったんだ・・・？」

光が収まり、ゆっくり目を開け前を見ると、セラの前から扇状に約100メートルにわたり、近くにあったものは全て消滅していた。岩や木、そしてもちろんサーベルウルフ達も。

残った木から木漏れ日が降り注ぐ下で剣を鞘に収め、こちらに振り返り、誰もが見惚れる笑顔を浮かべ、セラは爽やかに言った。

「ふふ、神罰完了です」

第7話（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！

少し短いですが、如何だったでしょうか？

・・・はい、すいません。戦闘シーンに迫力がありませんよね。わかります。

本当はもっと凄いです、セラさんは！ただ私に文才が無いためにこんなことに・・・これからもっと精進していきたいと思います
(; ; ; ;)

では、感想などなど、お待ちしております。

第8話（前書き）

どうもー！

戦闘シーンのグダグダ感に定評のあるがぶりえるです！

もつと迫力のある戦闘シーンが書けるようになりたいですね・・・
どなたか矮小なる私めに文才をください・・・（；；；）

あ、補足ですが。

セラの一人称である私はワタクシと言っています。分かりづらくて
申し訳ありません（´・`・´）

第8話

サーベルウルフ達を殲滅し終えた俺達 といつても、実際に倒したのはセラだけだが は一先ず遺跡の中に会った使用人達が使う1室に集まっていた。

戦闘終了後からこの部屋に移動するとき、そして今にかけてまでクレアさんはセラのことをじーっと見ている。

しかしそんな視線を物ともしないのか、にこにこ俺の隣に座っているセラ。

さて、どう説明しようかな・・・。

「え、えーと・・・」

「ツクモ君」

「ひゃい！」

とりあえず、大部屋に来る前に会ったと言えはいいかなと思っていた俺は、いきなりクレアさんに名前を呼ばれ変な声が出てしまった。

「その子は一体・・・？」

「こいつはですね、そのー・・・」

なぜクレアさんに本当のことを言わないかというと、俺が語り手と知った場合における二つのマイナス面を考えたからだ。

第一に、クレアさんが国とつながりがあった場合、城に連れて行か

れて王に会い、勇者とかしてか英雄としてか担ぎ出され、国にいいように使われてしまう可能性。

そして第二に、クレアさんは歴史学者だ。そこに遙か昔からある伝承の中に登場する者が現れたら、どこぞの研究機関に連れて行かれて、研究という名の実験動物にされてしまうかもしれないじゃないか！

（一つ目はわからなくてもないが、二つ目は考えすぎじゃ）

（いやいや！ここは慎重に行かないとだめだ！）

（主様、私はこの人に話しても大丈夫だと思いますよ？）

（む、なんで？）

というか、人型でも念話出来たんですね。

（この人からは邪まな気は感じませんから）

（へえー、そういうのもわかるのか）

（ええ、ですから信用してもよろしいかと）

ううむ、まだ一抹の不安は消えないが話してみるか。

「ええとですね。こいつとは、この遺跡の地下で会ったんです」

「地下？そんなものはないはずだけど・・・」

「大きい部屋を調べてたんですけど、その岩陰から階段が出てきて、降りたら居たんです」

すごいさつくり説明してしまった。通じるかな？

「大きい部屋・・・大神官の部屋かしら？ちょっと案内してもらえ
る？」

「あ、はい」

大神官の部屋に入り、中にあった階段を下り、扉の前にたどり着く。

「こんなところが・・・ここも書き写さないと！」

「と、とりあえずそれは後にして中に入りましょう！」

「あ、え、ええ・・・そうね」

なんだこの人、壁画書き写したい症候群にでも患っているのか。
そう思いつつ中に入る。大丈夫、今度は転ばないさ！

「す、すごい・・・地下なのに明るいし、何よりもこの壁画・・・」

「！」

「えーと、ここで会ったんですよ」

「でも、何だってこんなところに？ツクモ君より早く見つけてたのかしら」

「いえー、私はそこに刺さってたんですよ」

「さ、刺さって・・・？どどういうこと？」

セラは自分が刺さっていた場所を指差す。しかしクレアさんは意味が分からなかったみたいで、説明して欲しそうにこちらをみる。

間違えじゃないけどさ、その説明じゃ誰にもわからないと思うぞ・

・

「とりあえず、見てくれれば早いと思います。セラ、一回剣に戻ってくれないか？」

「わかりました」

とてとてとこちらに歩いてきて、にこにこしながら目の前で止まる。動きが一々可愛すぎるんだよ！

セラの肩に手を置き、集中する。

「送還」

すると一瞬光ったあと、俺の手には剣の感触があった。

「え、あの、え・・・？」

「まあ、驚きますよね」

「え、えっと、どうなってるの・・・？」

「えーと、神の語り手の伝承について知ってますか？」

「え、ええ、大陸中に知られてるし、私達歴史学者の最大の研究対象だから・・・ま、まさか！」

「何か俺が語り手みたいです」

あ、クレアさんが固まった。

それからクレアさんが復活するまでしばらくの時間が掛かった。
そして復活したクレアさんかというと・・・

「語り手様とは露知らず、大変無礼なことを致しました・・・」

「だから、そういうのはやめてくださいって！」

「そういうわけには！」

ずっとこんな調子である。困ったな。

「と・に・か・く！さっきみたいな口調でいいですから！」

「わ、わかりました・・・いえ、わかったわ」

やっと戻ってくれた。しかし語り手って偉いのか？

でもあの家族は・・・そういえばミレルちゃん以外は敬語だった気がする。

「クレアさん、語り手ってひょっとして偉かったりする？」

「ええ、伝承にも残されているくらいだしね。それに実在したという記録は残されているから、恐らく大陸中の王よりは偉いはずよ」

「うひゃー・・・」

そんなに偉かったのか・・・実感がわかないなあ。前の世界の家では一番地位が低かったし。

それにしても、俺が語り手とわかってても態度を変えなかったミレルちゃんは大物になるな。

「びつくりするのはこっちのほうよ、まさか本物の語り手に会えるとは思ひもなかったわ・・・」

「本物のってことは、偽者がいたってことですか？」

「ええ・・・それこそ山のようにね。ただの錆びた剣を持って、偉そうにしている奴とかたくさんいたわよ」

「その人達ってどうなったんですか？」

「死刑ね」

ひいひいひい！？

そんな重罪になるの！？

「とりあえず私は壁画を書き写す作業に戻るわ。ここも書き写さないといけないからね」

「あ、すいません。護衛は俺の仕事だったのに、作業を中断させてしまつて」

「謝らなくていいわ、それに貴方のおかげでわかつたことがあるから」

申し訳ない気持ちで謝つた俺を止めたクレアさん。
わかつたことってなんだ？

「わかつたことって？」

疑問に思い聞いてみると。

「この遺跡が語り手のために作られたつてことがわかつたからね」
クレアさんは見惚れるような笑みを浮かべ、ウィンクしながら言った。
惚れちゃいそうです。

（（浮気者ー！））

ええい、黙れ！

クレアさんが書き写しているのを見守りながら、俺は思ったことをセラに聞いた。

「そついえばセラ、お前って鞘はないのか？」

（鞘ですか？ありますよー？）

「む、どこにあるんだ？美しい剣と言っても、流石に抜き身のまま持てないからな」

（いやん！もう、美しいなんて主様ったら）

ここで装飾のことって言ったら怒るだろうなあ。まあ人型でも恐ろしく美しいんだが。

そんなことを考えてると桜華がちょっと焦ったように聞いてきた。

（九十九よ、わらわはどうなのじゃ！）

「ん？ああ、もちろん桜華も綺麗だよ」

（うむうむ、そうであるうつ）

ああ、可愛いなあ・・・この子達。

「それで、鞄はどこにあるんだ？」

（あ、えっと、刺さっていた所の近くにあったはずです）

どれどれ・・・お、あった。

セラのインパクトが強すぎて忘れてたなあ。

セラを鞄に入れ、ベルトに挿す。

ちなみに桜華は後ろのほうに挿している。

しかし後でこっちの服買わないとだめだなあ・・・旅をすることも考えて、マントとかも欲しいな。

（確かにのう、そのていーしゃつとじーんずとやらも格好いいんじやが、旅には不向きじゃな）

（そうですね、それにその姿じゃ寒そうですし）

「そうなんだよなあ、バートさんの古着ってもらえたりしないだろうか？」

そんな何気ない話をしていた俺達に、全て書き終わったのかクレアさんが声をかけてきた。

「何の話をしているの？」

「ああ、クレアさん、終わったんですか？」

「ええ、もう全て書き写したわ。それで？」

「旅に出るための服装とか、道具とか何があつたらいいか話してたんですよ」

「ふふ、なるほどね」

む？何かおかしかったか？

「ああごめんなさい、伝説の存在がそんな話をしてるのが面白くて」

「むう、伝説とか言われてますけど、俺はただの人間ですよ？」

「ふふ、はいはい。そうだったわね」

何か釈然としないぞ！

俺達が村へと戻った頃にはもう夕方だった。そしてギルドで依頼完

了の手続きをした。武器が一つ増えていたが、タイプを戦士にしていたので特に不審に思われなかった。

ちなみに、サーベルウルフの群れのことは、セラのジャッジメント・セイヴアーで大半が消滅していたので報告だけ済ませた。

「なんか、終わってお金貰うのって嬉しいなあ」

「ふふ、ツクモ君はすぐに旅に出るのかしら？」

「いえ、旅の道具や服とか集めないとダメですし、お金もある程度ためないとダメだと思うんでここを拠点にしばらくいるつもりですよ」

そう答えるとクレアさんは「そうなのね」と考え込んだ。

そしてなぜか若干頬を染めながら提案してきた。

「よ、よかったら明日道具や服とか見繕ってあげましょうか？」

「え、いいんですか？」

「もちろん、ツクモ君の都合が良かったらだけど・・・」

「喜んで！・・・と言いたい所ですけど、お金足りるかなあ」

一応バートさんにゴルドの価値を教えてもらったが、不安が残る。

「500ゴルドもあれば旅の服くらいなら簡単に揃えられるわ、それにもし足りなくても私が貸してあげる」

「む、流石にそれは悪いような・・・」

「いいのよ、気にしないで」

そう言われてもなあ、自分でいうのもなんだが、謙虚な日本人としては中々受け入れられない。

そんな気持ちがあったのか、クレアさんは俺の額を指で軽く突きいった。

「人の気持ちは素直に受け取っておくものよ？」

「はい、じゃあお願いします！」

そんな言葉を受けた俺は、これ以上遠慮するのも悪いと思い、笑顔で承諾した。

どこまでも着いて行きます！姐さん！と言ってしまいそうになったのは俺達だけの秘密だぞっ

（でーとじゃ・・・）

（デートですね・・・）

うるさいよ！

つとそうだ、クレアさんに言っておかないと。

「クレアさん、俺が語り手っていうことは秘密にしてもらえませんか？」

「あら、どうして？公表すれば何もかも思うがままに出来るのよ？」

「んー、実感わかないっていうか、偉いってことに慣れてなくて・

・それに、偉くなったら自由がなくなるじゃないですか」

確かに金とか美味しい物食べれるのとかは魅力だが、自由がなくなるのは嫌だ。

フリーダムで居たいんだ、I・mフリーダム！・・・フリーダムの綴りがわからなかった訳じゃないぞ！本当だぞ！

「ふふふ、貴方って不思議ね」

「む、どうしてですか？」

「普通は権力というものは魅力的なはずんだけど・・・でも貴方のそういうところ、私は好きよ」

これは所謂、フラグというやつでしょうか？

（何をー！わらわのほうが好いておる！）

（私だって負けません！）

あー、はいはい。ありがとう。

「それじゃ、私は宿に戻るわ。明日の昼頃来てくれる？」

「あ、はい。わかりました、昼頃ですな」

「ええ、それじゃまた明日」

そういい残し颯爽と去っていったクレアさんを見送り、明日のことを考える。

うーむ、そう言われると確かにデートか・・・だからクレアさんは照れてたのか？

（九十九！わらわも行くぞ！顕現せよ！）

（私も行きます！顕現してください！）

さてさて、明日が楽しみになってきたぞ。

（（きーー！！））

そんなこんなで、俺の人生初の冒険は終わった。

第8話（後書き）

ということでしたー！

いやー、戦闘シーンだと言き詰まるけど、日常シーンだとこんなに書けるのは何でしょう！不思議っ！

次回ですが、新たな可愛いあんちくしょうが増えるので楽しみに！

では、感想などなど、お待ちしております！

第9話（前書き）

どうもー！

今回はクレアさんとお買い物、もといデートのお話です。

でも途中で戦闘が入ったりしますので、こんなに長くなってしまいましたw

あと2話ほど進んだら冒険に出ますので、今しばらく日常をお楽しみくださいませ！

補足

お金のことに関してですが、多少変更しました。

大人一人当たりの一日の食費は30ゴールド。

そして銅貨1000枚で銀貨1枚、10000枚で金貨1枚とされてますが、銀貨10枚で金貨1枚にもなりません。

では第9話、始まり始まり〜

第9話

「ん、んー・・・昼頃まで寝てるつもりだったけど、目が覚めちまつたな」

硬くなっていた身体を伸ばし、ベッドから降りる。

「桜華、セラ、起きてるか？」

（はい、おはようございます。主様）

（むー・・・もう朝かえ・・・？）

「おはよう、二人とも」

カーテンを開けて桜華達に声をかける。

なぜ桜華達が俺の部屋で寝てるかというと、セラが俺の部屋で寝るって言ったのに対し、桜華が対抗して自分も寝ると言って一悶着あったからだ。

人型だったらどっちも部屋に入れなかったが、元の姿だったので受け入れた。

「なあ、まだ時間あるしギルドでクエストでも受けてこようぜ」

（そうじゃのう、金も稼がねばならぬからな）

（そうですね、魔物討伐は私と桜華さんが居れば楽勝ですし）

昨日クエストが終わり、バートさん宅へ戻った俺達。

無事に帰ってきたことと成功したことをバートさん達は自分のことのように喜んでくれた。

そしてジーナさんのご飯を食べ、風呂に入り、ベッドに入ったのだが、その時に約束通り、500ゴールドの内30ゴールドを食費として払ったのだ。

470ゴールドではある程度は買えるだろうが、十分な装備は無理だろう。

クレアさんは足りなかったら奢ってくれるって言ってくれたけど、それに頼るわけにもいかない。

別に装備集めてすぐ出発といったわけでもないのに、のんびり集めていけばいいのだが、早くクエストといったことに慣れておきたいのと、金を貯めておきたいといった思惑もある。

それを踏まえて、時間あるときはギルドでクエストを受けようと思ったのだ。

「おし、そうと決まれば早速準備して行こう！」

（はい！）

（うむっ）

「さて、何かいいクエストないかなあ。むぐむぐ」

ギルドに到着した俺は、ジーナさんに作ってもらったサンドイッチを食べながらクエストが貼ってあるボードを見ていた。

少し固めのパンにトマトにキャベツ、厚めに切ったベーコンにジーナさん特製ソースをかけ、それを挟んだ物だ。めちやくちや美味しいぞこれ！

（主様、あの派手な依頼書なんてどうですか？）

「ん、どれどれ・・・緊急・山奥のオルガベアの巢壊滅、3000ポイント3万ゴールド・・・ってランクAじゃねえかこれ！」

俺はまだランクEです！

（おるがべあとは、あの毛むくじらのことかや？楽勝じゃのう）

（それでしたら桜華さんと私が居れば余裕ですね）

「ギルドの規定で自分より高いランクは受けちゃダメなの！」

それに怖いし！

（むう、つまらんのう）

（つまらないですねえ）

ぶーぶー文句いつてる二人を無視して、クエストを探し始める俺。お、なかなかいいのがあったぞ！

「畑に出たレッサーアント5匹討伐、30ポイント300ゴールドでランクEか、これにしよう」

クエストを見るとここから畑まで20分くらいみたいだし、間に合うな。

そう思いボードから依頼書をはがし、受付にもっていく。

「これお願いします」

「はい、ランクE依頼、レッサーアント5匹討伐ですね。ブレスレットをお出してください」

受付のお姉さんは、差し出したブレスレットに小さな針見たいのを差し込む。

この作業はブレスレットにクエスト情報を記録する物らしい。何らかの魔法で針に情報を読みこませ、それをブレスレットの穴に差し込んで、ブレスレットが情報を記録するといったことらしい。

魔法って便利だなあ・・・

そんなことを考えていると、受付のお姉さんが聞いてきた。

「ヨシハラ様、レッサーアントのことはご存知ですか？」

「え、あー・・・魔物のこと全然わからないんですよ」

「そうでしたか、よろしければこちらのギルド発行の魔物図鑑を貸し出し致しますが、いかがでしょうか？」

あー、昨日いったやつだな！

「あ、お願いします」

「かしこまりました、それではどうぞ」

「ありがとうございます」

渡された図鑑を早速読んでみる。

レッサーアント・・・アント系の魔物で、大きさは大型犬くらい。動きは遅いが、顎の力と鋭い牙には注意が必要。巣に餌を運ぶ役割を持っている。

他には巣を守る役割のソルジャーアント。女王の護衛のナイトアント。女王のクイーンアントが居る。持ち帰る部位は牙。

ふむ、たまに張り切りすぎて遠くまで来てしまつて、帰り道が分からなくなったはぐれアントもいるのか。今回のレッサーアントはそのはぐれアントか。

「そちらの図鑑ですが、紛失したり破損させたりしますと、弁償と
いうことで1000ゴールド頂きますので、お気をつけ下さい」

「わかりました、ちなみにこの本って買えるんですか？」

「はい、1000ゴールドで販売いたしております」

なるほど、これはいつか買っておきたいな。

「では、ご武運をお祈りしております」

「よっしゃ、行かー!」

畑近くに到着し、依頼主である畑の所有者の家に向かった。

「すいませーん、ギルドから来ましたー」

扉をノックし声をかける。すると一拍置いて扉の中から人が出てきた。

「あ、すいません。ギルドから来ました」

「おう、とりあえず入れ」

こちらを一瞥し、奥に引っ込んでいく依頼主。何か感じ悪いぞ？中に入り、早速状況をきいてみる。

「レッサーアントが出たとのことですが」

「ああ、どこからか分からないが、いきなり現れてな。畑の作物が荒らされるんだ」

「何時くらいからと、どこから現れるか教えてくれますか？」

「大体この時間くらいと夕方の2回で、山のほうから来るんだ」

ほうほう、一日二食なんだな。

「じゃあちよつと見回ってきますね」

「ああ・・・お前みたいな子供で大丈夫なのか？」

ああ、だから感じ悪かったのか。このやろう・・・

「ええ、任せてください。それじゃ行つて来ます」

「あ、ああ」

依頼主の家を後に問題の畑へいつてみる。

（主様を子供扱いとは・・・ふふ、神罰が必要ですね）

（そうじゃのう、八つ裂きにしてしまおうか？）

「お前ら落ち着け、実際子供なんだからいわれて当然なんだ」

（しかしのう）

「まあ、これを早めに片付けて力を見せてやろうぜ」

（主様がそうおっしゃるなら・・・）

俺のことで怒ってくれるのは嬉しいけど、内容が過激すぎるわ！

（よし、九十九。わらわを顕現せよ）

「んー、今回は俺の力だけでやってみるよ」

（なっ！？危険ですよ！）

（そうじゃぞ、わらわ達に任せておけばよい！）

「それだといざと言う時困るだろ？だから俺一人でやるさ、敵は弱いみたいだしな」

任せつきりだと、自分ひとりのときに恐怖で固まって動けないってなったら大変だしな。

それに女に頼るのは男として情けない・・・俺よりも遥かに強いけどさ。

（む、お出ましのようです。主様）

気配を感じたセラが注意を促してくる。

（ええい、ならわらわを使え！流石に素手だと心配じゃ！）

「サンキュ、久しぶりに使わせてもらっよ」

がさがさと茂みのなかから、大型犬くらいの赤い蟻が5匹出てきた。こちらを敵と見なしたか、ガチガチと牙をならして威嚇する。

「うわー、如何にもモンスターって感じだな」

（ぼやっとするな、近寄ってきておるぞ！）

「へいへい、さつくり行きますか！」

無防備に近寄ってきていた先頭のレッサーアントの頭に、閉じたままの桜華を力いっぱい振り下ろす。

桜華の重みと威力に耐えられなかったレッサーアントの頭は、凄まじい音と共に潰れた。

よかった、牙は残ってる！

（わわわ！汚いではないか！）

「そんなこといってもしょうがないだ、ろっ！」

足に牙を立てようとしていた奴の首を、開いた桜華で切り裂く。

その凄まじい切れ味に何の抵抗もなく首が飛んだ。

あっという間に二匹が倒されたことに、警戒し隊列を変えた蟻達。バラバラに近づいてきていたのを、縦に列を作って足並み揃えてこちら向かってくる。

「ちっ、ジェットストリー アタックか！」

先頭が足を、二段目が腹を、3段目が首を狙って飛び掛ってくる。

それを見た俺は先頭の頭を蹴って飛び、二段目を身体をひねって交わす、そして三段目に向かって開いた桜華を胴体めがけて振り下ろした。

先頭の蟻は首が変な方向に曲がり絶命。3段目の胴体は真っ二つになった。

必殺の陣形が破られると思っていなかったのか、残った蟻は右往左往している。

その隙を見逃すはずなく、牙に気をつけて桜華で叩き潰す。

そんなこんなで、俺の魔物との初戦闘はさっくりと終わった。

牙を回収し終えて、ふう、と一息ついたときに横腹に痛みが走った。何かと思い見てみると、牙がかすったのか、浅い切り傷が出来ていた。

「むう、無傷で勝利とは行かなかったか・・・いてて」

（九十九、大丈夫か？）

「ああ、浅いから大丈夫だ。でも応急処置はしたいな・・・依頼主さんに頼むかな」

（主様！私にお任せくださいっ）

報告と応急処置をしに依頼主の家に向かおうとしていた所に待ったが入った。

「任せてって？」

（私の能力で、持ち主は傷を治すことが出来るんです）

「え、そうなの！？・・・つつあ」

（大丈夫ですか！？）

「ああ、とりあえずやり方を教えてくれ」

大声を出したら傷に響いた。いてて。

（柄頭にある宝石を傷口に当てて、治れ〜って念じるんです）

「ふむふむ、それで？」

（それだけです！）

おおい！簡単すぎるだろう！

（えへへ）

「何を照れてるかわからんが、こうか・・・治れ！」

すると宝石が淡く光り、傷口がみるみる塞がった。

「おお、すげえ・・・傷がなくなった」

（ほうー、それは便利じゃのう）

「どのくらいまで治せるんだ？」

（死んでなければどのくらいまでも治せます！治して見せます！）

「そ、そうか・・・桜華はなんか能力とかあるのか？」

（わらわか？ うーむ・・・この世界に着てから持った能力だと、
持つただけでまほうとやらを無効化できるようになるの）

「は？」

なんだって・・・？

そんなこと言ったらほぼ無敵じゃないか・・・

（手放せば効果は消えるがのう）

ああ、なるほど。

つまり桜華やセラを持ってなかったらプチ強い人間ってことになるわけだな・・・

「もうお前らを絶対離さない」

（まあ、主様ったら）

（う、うむ・・・大事にしてくりやれ？）

依頼を終わらせた俺達はギルドに戻り報酬を受け取った。

子供だから出来ないだろうと思ってた依頼主は半信半疑だったが、魔物の残骸を見て驚いていた。

へん、ざまあみる！

そして時間も丁度いいので、クレアさんが泊まっている甘える子猫

亭に向かった。

中に入ると、食堂でお茶を飲んでいたクレアさんがこちらに気づき、手を振ってくる。

「お待たせしましたか？」

「いいえ、簡単なクエストを終わらせてきて一服してただけよ」

「そうでしたか、よかった」

「お昼は食べた？」

「いえ、まだですよ」

「じゃあここで食べましょうか、奢るわよ」

ひゃっはー！昼代浮いたぜ！

という軽い口調は心の中だけでいい、きちんとお礼をいう。

「ありがとうございます！」

「それじゃ、食べたら早速買い物に行きましょうか」

「はい」

そして談笑しながら昼を済ませ、俺たちは買い物に出発した。

初めに見たときは、所々焼けていたり崩れていたが、村人総出で治したのか、今はそんなところは無くなっている。

団結した人の力に驚き感心しながら、村を散策した。

野宿に必要な保存食や寝袋などの道具は、今買ってもかさばるので出発する日に買おうということになって、とりあえず荷物を入れる袋やバック、旅に耐えられる服などを買いはじめた。

そして今俺はクレアさんの着せ替え人形のようになっていた。

「うーん・・・黒い髪に合う服って言ったらやっぱり黒かしら？」

（主様は元がいいので何でも似合いますよ！）

（わらわの時代とは服装がかけ離れてるのう・・・わらわは助言できそうもないわ）

「あー、何でもいいんですけど・・・」

「それはダメよ、何事も形から入らないと！」

（そうです！主様にぴったりの服を選ぶまでここを出ません！）

（どうせわらわは古い女じゃよ・・・）

桜華がいじけてる！

（そんなことないさ、桜華には小さい頃からいつも助けてもらってるし、感謝してもしきれないよ）

（そうかや・・・？）

（ああ、これからも助けてくれ）

(うむっ、わらわに任せておけっ)

(むー・・・イチャイチャしないでください！)

セラに怒られました。

気を取り直して、自分でもいいのがないか探してみることにした。

「ふー、こんなものかな？」

「そうね、これだけあれば大丈夫でしょう」

あれからしばらく見て周り、5着ほど選んだ。

黒い動物の皮をなめした、上から被るタイプのローブと黒と白の長袖のシャツ、それと黒いジャケットのような上着。下は丈夫な皮で出来たパンツだ。靴はスニーカーが一番動きやすいので買わなかった。

それと荷物を入れる袋を合わせてしめて260ゴールド

他には皮の胸当てを、プレゼントだといってクレアさんが買ってくれた。

「さて、買い物はこんなものかしら？」

「うーん、そうですね・・・何処かに古い道具や物を扱ってる所はありませんか？」

「古道具屋のことね、確かこの辺りに・・・あった、あそこよ」

そういつて、外にまで壺やら木で出来たタンスなどを置いてある店に入っていった。

中に入ると、商品が乱雑に置かれていてカウンターには片メガネを掛けたおじいさんが座っていた。

挨拶をし、商品を見て回っていると、奥が光ったような気がした。

「ん、なんだ・・・？」

（主様、奥から聖なる気を感じます）

（うむ、セラと同じようじゃが・・・少し違うの）

「行ってみるか」

奥に出ると、指輪や腕輪等のアクセサリが置いてあった。

その中で目を引いたのは金縁に緑色の宝石がついているネックレスだった。

（主様、そのネックレスから気を感じます。私達と同じでしょうか？）

「んー、それは分からないが・・・値段は200ゴールド、やけに安いな」

「ああ、それかね」

後ろから声をかけられ振り向くと、店のおじいさんだった。
びつくりしたあ。

「それは意匠はいいんじゃないが、なぜか売れなくてのう・・・お前さんが買ってくれないかね」

「そうですね・・・じゃあ買います」

カウンターにもって行き、お金を払う。

「何かいいのあった？」

「あ、クレアさん。これです」

買ったばかりのネックレスをクレアさんに見せる。

「へえ・・・そんないい物があったのね」

まるで鑑定人のごとく見ているクレアさんに小声で話す。

「恐らく、セラ達と同じものだと思います」

「そうなの？」

「ええ、だから顕現させたいんですけど・・・」

見ていたものを俺に返し、クレアさんは提案してきた。

「ここで顕現は出来ないでしょうから・・・そうね、私の部屋でしましょう」

「は、はい」

そうして甘える子猫亭に戻った俺達は部屋に入る。
女性の部屋に入るのって、何かドキドキするよね！

クレアさんは買ったものを端に置き、お茶を用意している。
あまりじろじろ見ちゃいけないと思い、お茶が来るまで買ったネックレスを眺めていた。

「おまたせ、早速だけど顕現して見せてくれないかしら？」

「あ、わかりました」

お茶をずずっと一口飲み、目を閉じて集中する。

「顕現せよ」

言葉と共に、ネックレスから緑色の光が溢れた。
桜華やセラのときとは違って、あまり眩しくはなかった。

「はうゝ、おはようございますですゝ・・・」

光が引き現れたのは、約30cmくらいの小人だった。

「え、えーと、おはよう」

「はいー・・・はい？」

寝ぼけながら目をごしごし擦っていたが、俺の声を聞き一瞬止まってこちらを向いた。

サイズは小さいが、緑色の髪と眼をしていて、耳が少し長く尖っている。服は薄緑色のワンピースみたいなのを着ている。小動物みたいでめちゃくちゃ可愛い。

「か、可愛いわね・・・」

（可愛いです・・・）

（癒されるのう）

クレアさん達もそう思ってたみたいだ。

「はわわわ、ここはどこですか？そして何で姿が見えるのですか？」

パタパタと慌てながら聞いてくる。

「このネックレスを古道具屋で買ったんだ」

そういつて、パタパタしている小人に見せる。

「ああ、そこの中で寝てたのですよ？」

「そ、そうなのか・・・えっと、君は妖精・・・？」

「ちがうのです！精霊なのですよっ！」

妖精といったことに「立腹だったのか、プリプリと怒りながら訂正してくる。可愛すぎる。」

「寝ていたのに、何でここにいるのですか？」

「あ、ああ、俺が起こしたんだ」

「はわー・・・そうでしたか・・・どうやって？」

「こう力を籠めて、顕現せよって」

「はわっ、も、もしかして語り手様なのですか!？」

「う、うん」

「し、失礼しましたのですー！」

俺が語り手と聞いてさらにパタパタと慌て始めた。なにこの可愛さ・・・鼻血が。

「あー・・・と、俺そういう畏まったの苦手だから普通にしてくれ」

でもーといってくる精霊を説得し、なんとか普通の口調に戻した。そして今までのことを話始めた。

「はわー・・・語り手様であるツクモさんに見初められるなんて友達に自慢できるのです」

「見初めって・・・そういえば、名前は？」

「名前ですか？ありませんですよー」

「え？ないの？」

セラとかはあるから、普通はついてる物だと思ったけど・・・
そう考えてると、クレアさんが説明してくれる。

「精霊と呼ばれるものは、基本的に名前がついていないもののよ」

「そうなの？」

「そうなのですよー」

「だから、持ち主であるツクモ君がつけてあげたらいいわ」

ふむ、名前か・・・ネツクレスに寝ていたからー、ネツクレス・・・
クレス・・・クレスなんてどうだろう？

「クレスってどう？」

（安直だのう）

（安直ですねえ）

「安直だわ」

うるさいよ！

ネーミングセンスないんだよ！猫にタマ、犬にポチは基本だろう！

「わーい、今日からクレスはクレスなのです」

ほら、喜んでるじゃん！

「まあ、本人が喜んでるならいいのだけど・・・」

「とりあえず、今日からよろしくな。クレス！」

「はいです〜！よろしくなのですっ！」

クレスは元気に返事をし、俺の頭の上にポテッと乗ってきた。

その後はクレアさんの部屋で談笑し、夕方頃にバートさん宅へ戻っていった。

第9話（後書き）

クレス可愛いよクレス、クレアさんと名前似てますが、クレアさんはサブキャラなのでよし！としてこの名前にしました。安直っとうな！

そして大分前に言っていた、シエラとミレルのことですが、レギュラー化にはしない方向で行きます。

なぜかというと、色々とキャラがかぶ「ナニヲスルハナセー」！

では、質問や感想、矛盾や間違えなどがあつたらメッセージをお願いします！

第10話（前書き）

どうもー！

祝10話達成でございます！でも何もしませんけどねw

もし何かしてくれというなら、メッセージをばお願いします）・
（

前回にくらべると、今回は短めです・・・申し訳ありません（・・
）

いいところで区切らないと、永遠と書き続けてしまうので切らせて
頂きました。

あいかわらずのへっぽこ小説ですが、ごらんください！

第10話

あの買い物からしばらくのときが経った。

クレアさんに旅の注意点などを教えてもらいつつ、順調にクエストをこなしていき、そして今日俺はランクEからDに無事昇格した。何度か危ない場面もあったけどな。

「ランクCまでは3000ポイントとなっております。がんばってくださいね」

EからDは500でDからCは3000か・・・大分違うんだなあ。他にはどれくらいいるか聞いてみるか。

「すみません、CからSSまでのランクアップに必要なポイントって教えてもらうことができますか？」

「かしこまりました。DからCは先ほど言いました通り3000ポイント、CからBは10000ポイント、BからAは50000ポイント、AからSは100000ポイント、SからSSまでは20000ポイントとなっております」

ひえー、最高ランクまでかなり掛かるなあ・・・

（主様なら大丈夫ですよ！）

（わらわ達が居れば楽勝じゃろう）

（そーなのです、クレスもがんばるですよー！）

果てしない数に驚いていた俺を落ち込めると勘違いしたのか、励ましてくれる3人。

（ありがと、頼りにしてるぞ）

（うむっ）

今のところ金は4500ゴールド溜まっている。

クレアさんはもう旅に出ても大丈夫だと言っているが、目標の5000ゴールドまで貯めようと思っている。あつて困るわけじゃないからな。

しかし金がかさばるな・・・銀行というのはないのだろうか？

そう思い、ギルドのお姉さんに聞いてみることにした。

「お金を預けるところってありますか？」

「はい、当ギルドでお預かり致します」

ギルドってこんなことも出来るのか。

「じゃあお願いします」

「かしこまりました、では預けたい額のゴールドとギルドブレスレットをお出しくださいませ」

4500枚のうち、4000枚を出す。

これで持っているお金は500ゴールドと大分すっきりした。

それでも十分重たいんだけど、小銭のほうが何かといいだろう。

そして金を預けた俺は、残りの額を稼ぐためにクエストを見始める。

「んー…どれもぱつとしないな」

「あら、何を探してるの？」

「あ、クレアさん」

いいクエストがないか探していると、クエストを受けに来たのか、後ろからクレアさんが話しかけてきた。

「何かいいクエストがないか探してまして」

「ふーん、ランクD見てるけどランクあがったの？」

「ついさっきDになりましたよ」

「おめでとう、でもこれから長いのよ」

「そうみたいですな」

はははと苦笑しながら答える。ランクCまではまだ良いとして、ランクBからがとて大変だ。

「それで、目標金額までもう少しなのかしら？」

「ええ、あと500ゴールドで5000ゴールドになるんですよ」

「じゃあこれを一緒に受けない？」

そういつて差し出してきたのは、ランクDの緊急クエストだった。

「えーと・・・緊急・畑に出たソルジャーアクト6匹の討伐1000ポイント一人600ゴールド。早急に討伐して欲しいので二人以上のパーティのみ」

「ツクモ君と私で十分だと思うから、一緒にどう？」

「んー、じゃあお願いします」

しかし畑って・・・またあの畑か？

クエストを受け、目的地に来た俺は予想通りの結果に苦笑した。
またこの畑かよ！

「すみません、ギルドから来ました」

クレアさんがノックし、中から人が出てくる。
案の定、このあいだのおっさんだった。

「来たか・・・ん、お前は」

「どうも、ランク上がったのでまた来ました。蟻に好かれる畑なんですな」

「そ、それだけ栄養のある野菜を作ってるってことなんだよ！」

そんなやり取りをしつつ、依頼のことを聞いてみた。

今回もまた山のほうからやってくるらしい。そんな中クレアさんが難しい顔をしている。

「どうかしたんですか？」

「ええ、話を聞く限りだと、レッサーアントも出たのよね？」

「はい、俺が討伐したんですけど」

「もしかすると、アントの巣が山に出来ているかもしれないわ」

クレアさんがそういった瞬間、外から

「アントの群れが出たぞー！」

と外から叫ぶ声が聞こえてきた。

右から来たレッサーアントをセラで袈裟懸けに切り裂き、左から来たソルジャーアントを桜華で叩きつぶす。
そして前からきた奴の顎を蹴って距離を取る。

「ちくしょう！きりがねえ！」

「やっぱり巢があつた、みたい、ねっ！」

クレアさんも剣を抜き応戦する。しかし数が多すぎる・・・

「桜華、セラ、悪いが一緒に戦ってくれ！」

（うむ、わかった）

（こんなありんこ、一瞬で片付けちゃいましょう！）

その声を聞き、両手に持っていた二人を顕現する。
光が放たれひるむアント達。その隙に顕現した桜華とセラは次々と蹴散らしていく。

徐々に数を減らしていくが、まだ50匹は居るだろう。

武器がなくなった俺を狙ってくるが、こっちに來てから上がった身体能力と、クレスの能力で僅かに筋力等が上昇する効果のおかげで、難なく素手で叩き潰す。

「これではきりがないの・・・仕方あるまい。皆下がっておれ！」

何を思ったか、桜華は俺達の前に出る。

「桜華、どうした？」

「ふふ、わらわもひっさつわざとやらを試してみようと思つての」

そついいながら、両手に持った鉄扇を開き構える。
すると、鉄扇に桃色のオーラが纏い始めた。

「往くぞ・・・乱れ散る桜を受けてみるがよい！舞い狂え！桜花乱舞！！」

鉄扇を振るうと、纏っていたオーラが桜の花びらの形となり、あたり一面に舞い散る。

数千、数万と広がっていった桜の花びら達は一斉にアント達へ襲い掛かる！

花びらに当たった瞬間、鋭い刃で切られたみたいに切り裂かれる。それが数えきれないほど襲い掛かるので、花びらが通った後には砂のようにさらさらになったアント達しか残されていなかった。

「ふむ、こんなものじゃのう」

アント達が全滅したのを確認して、パチンと鉄扇を閉じる桜華。
空中を舞っていた桜の花びらは音と共に全て消えた。

「ふふ、どうじゃ九十九。すごいであらう！」

目の前まで歩いてきて、えっへんと胸を張る桜華。
正直目のやり場に困ります。

「あ、ああ。しかしどこであんな技を見につけたんだ？」

「なにやらこつちに来てから色々と力があがったのう」

「それは恐らく主様の力のおかげですね」

「そうなのか、でも俺にはあんまり能力プラスされてないけど・・・
いえ、なんでもありません。」

「これで巢ができていることが確定したわね・・・ギルドに報告に
戻りましょう」

「でも、またすぐに沸いてくるじゃないですか・・・？」

「確かにその確率は高いけど・・・」

「報告してる間に畑を荒らされてたら、ここの畑のおっさんが自殺
しちゃいますよ」

あの感じならやりかねないしな！

「でも・・・それならどうするの？」

「桜華とセラがいるから、大丈夫でしょう」

「はい、お任せくださいな」

「うむ、蟻共を蹴散らすなんて雑作もないわ」

こいつらが本気でしたら、山ごと消えそうな気がするのと言わない

でござい……

「そう……それなら巢へ行ってみましょうか」

「了解しました！」

「うむっ！」

「ええ、お任せください！」

頼もしい返事だ、俺も何か武器もったらいんだけど、持ったら持ったで浮気だーっていわれそうなんだよな……

「行く前に、保険として依頼主にギルドへ連絡してもらいましょう」

そんなことを考えていると、クレアさんが提案してくる。

しかし、応援が来たときに、桜華達のことを説明するのがめんどくさい上に、もしかすると語り手だとばれてしまうかもしれないと思い、待ったをかける。

「あー、桜華達のことがばれたら大変だから、俺達だけでやりません？」

ややこしいことになるのは嫌なんだ！

「それもそうね……じゃあ見回りと言う事にしましょうか」

「はい、それじゃあ行きましょう」

依頼主に見回りと伝え、俺達は今回の騒ぎの原因であるアントの巢

へ向かった。

その頃のクレスかというと・・・

（どーせクレスは役に立たないのですよーだ・・・）

ネックレスの中でいじけていたのであった。

第10話（後書き）

はい、ということで。次はボス戦です！

クレスは戦う能力がないので、ネックレスの中でお留守番ですw
しかし、身体能力を上げるという効果があるので、地味に役に立つ
んですよ？本当ですよ？

では、質問や感想などがありましたら、よろしくお願いします！

第11話（前書き）

どうもー！

ついにやってきました、初ボス戦。

結果はどうなったかはこの後すぐ！（番組風に）

ではどござー

第11話

アントの巣まで急ぐ俺達4人。

その道中にもアント達がわんさか居たのでそれを倒しながら進む。

「これ、は！ギルドで応援よんだほうが！よかったですね、っと！」

「そうね！こんな、に！多いとは思わなかったわ！」

言葉が途切れ途切れなのは、アント達が襲い掛かってくるためだ。
しかし桜華とセラは涼しい顔をしてどんどん倒していく。この化け物め！

「何か失礼なことを考えているかや？」

「ええ、邪mana気配を感じました」

ひいつ！

二人は群がるアント達を蹴散らしながらもこちらにジトーとした目を送ってくる。

「ナンデモナイデスヨ！」

「貴方達、余裕過ぎないかしら・・・」

そんなやり取りをしていると、巣だろうか、洞窟が見えてきた。

「クレアさん、あの洞窟って、ああ！うっとうしい！アントの巣ですか？」

「ええ、そうよ。クイーンアントは土の中じゃなくて、山に洞窟を作ってそこを巣にするわ」

「なるほど、それじゃもうーがんばりますか！」

アントを蹴り飛ばし、殴り飛ばしながら進んでいく。

巢の前にきたら、10匹のソルジャーアントとソルジャーアントより一回り大きく白いアントが居た。

「ガードアントね・・・さしずめ門番といったところかしら」

「あれがガードアントか・・・かなりでかいな」

ここでギルド魔物図鑑で見たアント達の大きさを見てみよう。

まずレッサーアントはランクEで大型犬くらいの赤い蟻、ソルジャーアントはそれを一回り大きくした青い蟻でランクD、ガードアントはさらに一回り大きくした白い蟻でランクC、クイーンアントはガードアントの二倍はあるらしい黒い蟻で二つ上のランクAだ。以上、九十九の魔物講座でした。

つとふざけてる場合じゃなかった。

今までバラバラに襲ってきていたアント達が、まるで軍のように陣形を敷き待ち構えている。

ガードアントを中心として前列に4匹、左右に3匹ずつのどちらかというと防御主体の陣形だ。

蟻のクセに頭いいじゃないか！

「ふっふっふ、それで門を守っているつもりか・・・？」

不敵に笑う俺を警戒して、アント達は一步後退する。

「そんなもので俺を止められるわけがない！・・・では先生方、よろしくお願いします！」

「まあ・・・わかっておったがのう」

その言葉に桜華は呆れ

「ふっふっふ、お主も悪よのう！」

セラは若干違ったノリをしていた。

「わらわが周りの雑魚を貰うとしよう」

「じゃああの白いありんこ頂きますね」

まるでスイーツを分け合うような会話をしながら、二人はすごい速さでアント達に走りよった。

警戒していたとはいえ、あまりの速さに対応できず、前列の4匹はいとも簡単に倒された。

横列にいた6匹はすぐに食い止めようと殺到するが桜華によって止められ、セラはその隙にガードアントに襲い掛かる。

ガードアントは向かってきたセラに対応するために、後ろに引き、牙で剣を受け止めようとする。

「ふふ、その心意気や好し・・・だが！」

剣と牙がぶつかり合う。

「我が剣に断てぬものなし・・・なんちゃって」

まるで牙など無かったかのように真つ二つになり、ガードアントは絶命する。

一方桜華はというと

「ほれほれ、はようこっちに来ぬか」

近づいてきたソルジャーアントを殺さないように吹き飛ばし、また近づいてきたやつを吹き飛ばしと遊んでいた。
ドSだったのか！

「桜華さん、終わりましたよ」

「おお、存外早かったのう」

ガードアントを倒しえ終えたセラは、ソルジャーアントをいじめていた桜華に声をかける。

「どれ、これで終いじゃ！」

素早くソルジャーアントに近づき、両手に持った鉄扇で叩き潰し、切り裂く。

6匹いたソルジャーアントは一瞬でその命を失った。

「ふむ、あつけないのう・・・」

「そうですね、クイーンアントさんが楽しませてくれることに期待しましょう」

お前らが規格外なんだよ！と思いながら巣の中へ入っていった。

「案外広いんだな・・・っと、しかし横穴がありすぎてどこが本線かわからないな！」

巣の中はとても広かった。縦は4メートルほどで、横は大人4人が両手を広げて歩けるくらいに。

「本線はこの広い道よ。でも、いくらなんでも広すぎるわ・・・」

アントの巣は、クイーンアントの大きさによって変わる。

それはクイーンアントが通り抜けられるくらい広くすることだ。

この巨大な道があるということは、巣の主であるクイーンアントもこれほど巨大というわけだ。

どこの怪獣だよ！と心の中で突っ込みつつ、俺達は順調に巣の中を進んでいく。

もちろん敵がいらないわけではない。

横穴や前方からアント達が襲い掛かってくるのだ。

俺とクレアさんはレッサーアント、ソルジャーアントを相手にし、桜華とセラはガードアントを相手にする。

理由はガードアントがランクCで、クレアさんはランクDなのと、俺はいくら補正やクレスの効果で身体能力があがってるとはいえ、素手で一つ上のランクを相手に出来るほど強くないからだ。

（やっぱり、これ終わったら武器買ったほうがいいな・・・）

（ツクモさん、浮気は良くないですよー！）

浮気じゃないわ！

襲い掛かってくる敵を蹴散らしながら進むと、前方からガードアントの群れがこちらに向かってきた。

後ろには大きな穴が見えていた。そろそろ終点か？

こちらに向かってきた10匹は居たであろうガードアント達を、桜華とセラは難なく屠り、俺達は大穴に入った。

そこに待ち構えていたのは

「ギシャアアアアッ！！」

大きさは穴の通りで、王冠のような頭殻、巨大な目、何もかも噛み砕いてしまいそうな顎に鋭い二本の牙。

6本ある脚は全て平らに踏み潰してしまいそうに巨大で、尻尾には長いサーベルのような刃がついている。

ランクAのクイーンアントだが、本来は2〜3メートルくらいで、尻尾に刃などはついていない。

亜種と呼ばれるものなのかわからないが、つまり何が言いたいのかというと

「ランクS、ね・・・」

「ははは・・・俺の163000ポイント上の敵か・・・」

何か俺、こっちに来てから不幸な目にばかりあってるような気がする。

「桜華、セラ、いけるか？」

「相手にとって不足なしじゃ」

「久しぶりに楽しめそうな相手ですね」

しかし二人はやる気まんまんのようだったので、俺とクレアさんは後ろを警戒しつつ、大穴の入り口まで下がった。

二人はそれぞれの得物を構え、クイーンアントに攻撃を仕掛ける。

それを見たクイーンアントは、煩わしいいうように、尻尾を振るかぶり、巨大な刃を二人に向けて横薙ぎに振るう。

その攻撃を桜華は飛んでかわし、セラは剣で受け止める。

まるで重たい鉄と鉄がぶつかったような音が鳴り響いた。

「つく！思いのほか重たい一撃です、ねっ！」

ズザザと衝撃で後ずさったが、受け止めきったセラは尻尾を上弾く。

その隙に桜華は、クイーンアントの頭めがけて鉄扇を振り降ろす！

攻撃を察知していたクイーンアントは、蟻達を木っ端微塵に叩き潰してきた一撃を物ともせず、その巨大な牙で鉄扇を受け止めた。

クイーンアントはそのまま頭を振り、攻撃を受け止められ空中で固まっていた桜華を吹き飛ばす。

「っと、やりおるの」

空中でバランスを建て直し、地面に着地する桜華。
そこにクイーンアントの巨大な脚が迫ってくる。

「おっと、危ないのう！」

桜華は迫り来る脚の横をすり抜けつつ、開いた鉄扇を叩きつける。
しかし、その一撃はクイーンアントの堅殻に弾かれてしまう。クイーンアントの巨体を支えているその脚の甲殻は想像以上に硬いものだった。

セラも隙をみて、比較的柔いはずの間接部を狙って剣を振るうのだが、やはり弾かれる。

クイーンアントはちまちまと攻撃を当ててくる二人に苛立ってか、尻尾をめちゃくちゃに振り回す。

しかしその攻撃は二人に当たることはなく、その後も一進一退の攻防が続いていた。

「仕方ありませんね

はぁあッ！」

空気が震えるくらいの気合と共に、セラは美しく輝く剣に神気を纏わせ、脚に斬りかかった。

「ギシャアアッ!？」

クイーンアントは、自分の甲殻が破られると思っていたのだから、易々と切り裂かれた痛みに大きく仰け反った。

「なるほどの!」

それを見た桜華も二つの鉄扇に桜色のオーラを籠めて尻尾の刃に叩きつける!

凄まじい衝撃音と共に叩きつけられた右の鉄扇は、クイーンアントの刃半分ほどまで打ち砕いた。

「一回では無理か・・・ならばもう一つ!」

半分ほどで止まっていた右の鉄扇に重なるように左の鉄扇で叩く! 両方の衝撃で、クイーンアントの刃はまるで大きいガラスが割られたような音と共に砕けた。

「ミシャアアア!？」

あまりの痛みに怯みながらも、自分がアント達の女王である証の刃を砕かれ、怒り狂ったクイーンアントは桜華を噛み砕き、食らおうと噛み付いてくる。
しかし

「よそ見しちゃ、いけませんよ！」

「ピシャアアッ!？」

桜華に集中していた隙を突き、セラが再び脚を斬りつけ、注意を逸らす。

一方が攻撃し注意を向け、もう一方がその隙に攻撃を仕掛けるといった連携攻撃に、クイーンアントは為す術もなく攻撃を受け続けた。

「まったく、しぶといのう」

「ですが、存分に楽しめましたね」

一方的な攻撃を受けていたクイーンアントは、6本あった脚は3本が切り裂かれ、1本がもう大地を踏み締めることが出来ないほどズタズタになっており、王冠のような頭殻は碎かれ、尻尾の刃は粉々になり、牙も一本失っているという、満身創痍になっていた。

「そろそろ止めと往くかのう・・・桜の中で溺死しろ　舞い狂え!桜花乱舞ッ!！」

「我が振るうは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝き!ジャッジメントオオ・セイヴァアアアッ!！」

瞬間、アントの巢は凄まじい光に塗りつぶされていった。

「ふうー、一時はどうなるかと思ったけど、なんとかなったなあ」

「そうね、それもこれも全てツクモ君と守護者の二人のおかげね」

巣から帰ってきた俺達は依頼主に報告にいった。

依頼主はボロボロになった俺たちを見て驚いていたが、森で残りのアント達を殲滅していたと伝えると、報酬を100ゴールド増やしてくれた。ラッキー

（むー！クレスもがんばったのですよー！！）

「ははは、クレスも頑張ったと言って上げて下さい・・・プリプリ怒ってますので」

「ふふ、ごめんね。クレスちゃんもご主人様をよく支えてたわね」

（えっへん、わかればいいですよ）

可愛いやつめ！

「さて、俺はそろそろ帰ります」

「そう、旅は明日出るの？」

「ええ、もうお金も溜まりましたので」

今日のクエストで、目標5000ゴールドを達成したのだ。正確には5100ゴールドだけだな。

「寂しくなるわね・・・」

「ははは、また会えますよ!」

「そうね、明日は私も見送りするわ。いつ頃出るの?」

そうだ、それを考えてなかったな。

「んー・・・昼過ぎですかね?」

「わかったわ、それじゃまた明日」

「はい、おやすみなさい」

そうしてクレアさんと別れ、俺はバートさん宅へと帰っていったのだった。

第11話（後書き）

はい、如何でしたでしょうか？

・・・ですよねー、迫力が足りないですよねー（・・・）

私にもっと文才あればいいのですが、残念ながらあまりありません。

これからをもっと精進いたします><

そして皆様にアンケートというか、聞きたいんですが。

男キャラって出したほうがいいと思います？

設定資料には一応一人作ってあるんですが、もし「居る！」っていう方が多いならそのまま出しますし、「女の子に決まってるだろ馬鹿者め！」って方が多ければ修正しますが、どっちにしましょう？

では感想などお待ちしております！

第12話（前書き）

どうもー！

なななんと、この小説が累計50000アクセス、ユニーク5000人突破しました！

まさかこんなに行くとは思っていなかったので、緊張しております！

皆様の期待を裏切らないように精進していきますので、叱咤激励をお願いしますー！

第12話

フレッセント村を出て3日が経った。

今はフレッセント村から東へ行った所にあるカミールという町に向かっている。

カミール町。

サザールランド王国の東にある比較的大きな町で、フレッセント村から4日程いったところにある。

人口は約15000人ほどで、フレッセント村と王都ザナログリフとの山の間にある盆地に作られていて、山の恵みの特産物にしている。ここで取れる山菜はとても美味しいと評判らしいので少し楽しみだ。

しかし山に囲まれていることもあってか、魔物の被害が絶えないらしく、その為の冒険者も多いので治安に若干の不安があるようだ。

ちなみにフレッセント村の規模は、人口8000人ほどの小さな村で、遺跡があること以外は普通の村らしい。

旅をすることに決めたのは、俺をここに連れてきた鏡が「この世界を救ってください」と言ったことが気になったからだ。

しかしどうやって世界を救うのか分からない今、とりあえず情報を集めるために、東にあるサーザンド王国の王都ザナログリフに向かうことにしたのだ。

このサーザンド王国は信仰心の篤い国で有名らしく、語り手に関する情報も豊富にあるのではないかとバートさんに相談したときに言っていた。

それにしてもフレッセント村を旅立つときは大変だった。

シエラちゃんとミレルちゃんが着いていきたいと駄々をこねたからだ。俺やバートさん夫婦が何を言っても聞かなかったのだが、クレアさんが旅をすることの大変さを2割増しで伝えて、なんとか事なきを得た。

・・・シエラちゃんの殺気があれば魔物が近づいて来ないかもと考えたのは秘密だぞ！

「ふー、旅をするっていうのは大変なんだな」

（そうじゃのう。わらわ達が居た世界とはかけ離れてるからのう）

（私も寝ていただけなので、旅のことは全くわかりませんでした・・・）

（クレスもなのです）

前の世界のような道路ではなく、街道といっても王国まで続く道の草や木などを取り除き、土を均しただけの道だ。道路を歩きなれた俺としては、結構辛い。

「しかし、湧き水がこんなに美味しいとは思わなかったな」

今居る場所は、カミール町に続く道の途中を少し外れたところにある川いる。水筒の水がなくなったのと、身体や髪を洗いたかったからだ。

もちろん裸になってざぶーん！っていうわけではなく、布を濡らして身体を拭いたり、シャンプーみたいな洗剤をつけて髪をじゃぶじゃぶ洗っただけなんだけどな。裸になることを桜華達に期待されていたが・・・

「もう大分日も暮れてきたし、今日はここで夜を明かすか」

旅をした中でわかったことがある。

それは夜の森を歩き回ることの危険性だ。

初日は疲れてなかったこともあって、夜になっても町を目指して歩いていた。

しかし大体の魔物は夜行性らしく、襲撃が恐ろしく増えたのだ。まじで怖かった。

でもお陰で動物系の魔物を殺すことに違和感が無くなったのは良かったと思う。

その襲撃の教訓を生かして、次の日からは夜にはちゃんと休むようにしている。

夜番一人と火を起せばあまり近づいてこないしな。

「さてさてお前ら、食料調達の時間だ」

身に着けていた桜華達を顕現させる。

だいぶ慣れてきたので、手に持って集中しなくても顕現できるようになったんだ。まあ、魔物のゲリラ的襲撃のおかげで覚えたんだけどな・・・

「じゃあ、俺とセラで上流に魚釣りに行くから、桜華とクレスは何物とか取ってくれ」

「むう、わらわは九十九と一緒にいい」

「桜華さんは昨日一緒だったではないですか、ここは私に譲ってくださいます!」

「うう、仕方ないのう・・・往くぞ、クレス」

「はいなのです！ツクモさん、セラさん、お気をつけてなのです」

分担を決めた俺達は早速森に入っていく。

なんか桜華、こっちに来てからやけに素直に甘えてくるようになった・・・向こうに居たときなんて、典型的なツンデレだったのに。そんなことを考えていると、上流の開けた場所が見えてきた。

「今日は何匹釣れるかな」と

「ふふ、たくさん釣れるといいですね」

俺は道具屋で買った高かった釣りセットをうきうきしながら出す。向こうではあまりにも釣れなくてつまらなかったが、こっちではまさに入れ食いといっていいほど釣れるのだ。水が綺麗だからか？

これからのことを想像して空を見上げながら鼻歌混じりに上流に向かう。

すると騒がしい音がして、何だと思い前を見ると

少女がでかいイノシシのような魔物と追いかっこしていた。

「たーすーけーてー！」

こちらに気づいた少女は、一目散に向かってくる。
もちろん後ろのイノシシも向かってくる。

「ちょおおおお！？」

思わず釣竿を放り投げ、少女を受け止め横に避ける。
そのとき「バキッ」という音が聞こえた。

イノシシが通りぬけた跡を恐る恐る見ると、そこにはMY釣竿が無残にも砕け散っていた。

「つ、釣竿おおおおおお！」

その時、俺の中の何かがブチンと切れた音がした。

「フフ・・・フフフ・・・貴様・・・生かしては還さぬ」

抱えていた少女をポイとセラに投げ渡し、村で買ったバグナウを両手に構える。

バートさんやクレアさんに、自分の武器がないとあまりにも危険だと言われたので買ったものだ。

「シャアアアアアッ！！」

某全身火傷の剣客のような奇声を上げながら、未だ方向転換をしているイノシシに突っ込む。

その無防備な横腹にバグナウを思いきり突きたてる。突然の衝撃に踏鞴を踏むイノシシ。だが俺のターンは終了してないぜ！

「オラオラオラオラオラオラアアアアッ！！」

連打連打連打！

イノシシはものすごい攻撃に悲鳴を上げながらどんどん後ろへ押されていく。

「ムダムダムダムダムダアアアアッ！！」

必死に抵抗しようとするイノシシにそんな隙を与えず、ひたすら拳を連打する。

身体中に返り血を浴びたが、そんなものは気にしない！

肉を食い破り、骨を砕き、牙をへし折る。

もはや立つ事も限界なのか、イノシシはふらふらし始めた。

そのチャンスを逃すはずもなく、イノシシに容赦なく攻撃を仕掛ける。

「これは俺の分！」

顎に向けて右フックを放ち

「これは少女の分！」

今度は左フック

「そしてこれはああああ、釣竿の分だあああああー!!」

最後の一撃とばかりに額に向けて渾身の右ストレートを放つ！

ゴキヤと骨が碎ける凄まじい音がして、イノシシは声を上げることなく大地に沈んだ。

「ああ・・・俺の、俺の愛しい釣竿よ・・・」

イノシシをSATUGAIしたあと、俺はフラフラと釣竿に歩み寄った。

「なんとこの姿になってしまったんだ・・・くそお・・・くそおおっ!!」

イノシシの返り血で真っ赤に染まったままだったが、愛していた釣竿の残骸を胸に抱き、空に向けて魂の慟哭をあげる。

「あ、あの・・・?」

「ああん!？」

「ひいッ!？すいませんでしたー!!」

あまりの悲しみに咽び泣いていた俺に、少女が声をかけてきた。
しかし、愛しいMY釣竿を失った俺は気が立っていて思わず喧嘩腰
になってしまった。

「主様、この子が怖がってますよ」

そんな様子の俺に若干引きながらセラがいう。

「ああ、ごめん・・・あまりにショックな出来事に気が動転してい
ただ」

「ひ、ひえ・・・全然大丈夫でしゅっ!」

あまり大丈夫に見えないが、本人がそういつてるので気にしないこ
とにした。

「俺はツクモ・ヨシハラ、こっちはセラフィムだ。んで、どうして
あのクソ野郎に追いかけられてただんだ？」

少女は、ありったけの感情を籠めたクソ野郎にびくってなったが、
すぐに気を取り直して、おずおずと答えた。

「あ、あたしはアイナ・キャンベルです・・・あの、ギルドのクエ
ストで・・・失敗してしまって・・・」

「ほう？」

「ひいひい！？」

「主様！」

また怖がってしまった。普通に返事をしただけなんだが・・・なん
で？

「まあ、それで？」

「に、逃げ回ってたら、貴方達が見えて・・・それで・・・」

「助けを求めたと？」

「は、はいい！」

なるほどな、確かによく見ると少女の腰には短剣が刺さっていた。
背丈は頭の天辺が俺の胸の辺りで、ブラウンのショートカットだ。
同じく茶色のくりくりとした瞳が不安そうに見上げてくる。

「そうか、まあ今日はもう遅いから・・・セラ、この子を連れて
戻っててくれ」

「主様は・・・？」

「俺はこのまだ胸の中に残る狂おしいほどの怒りを静めてから戻る」

「わ、わかりました・・・行きましょう、アイナちゃん」

「は、はい・・・」

来た道を引き返していくセラとアイナを見送った俺は、ゆっくりと森の中を歩く。

次の獲物を探すために・・・

その日の森は夜遅くまで、魔物の断末魔が止むことはなかった。

第12話（後書き）

九十九君が壊れました。

今宵限りですけど、殺意の波動に目覚めてしまいました！

なぜここまで怒ったかといいますと、ゲームなんていうのはなく、日中や休憩のときの暇つぶしは釣りしかなかったのです。

そして前の世界ではあまり釣れなく、待ち時間も長かったのであまりやらなかったのですが、こっちの世界では入れ食い状態だったので、釣りの楽しさに目覚めてしまったからというわけです！

普通に釣れると楽しいんですよ？

やっとなことない人は、一度体験してみるといいかもしれませんw

では、感想などお待ちしております！

第13話（前書き）

どうもー！

最近パソコンの調子が悪いみたいで・・・もしかすると壊れるかもです（´；；；´）

もし急に更新が止まったら、パソコンがご臨終になったと思うてくださると助かります・・・

では気を取り直して、13話をどうぞー！

第13話

俺達はイノシシを倒した上流近くで、魔物と戦っている。

「っしやああ！」

後ろから飛び掛ってきたサーベルウルフを回し蹴りで吹き飛ばす。
凄いい勢いで吹っ飛んでいったサーベルウルフは、近くにあった木にぶつかり事切れた。

「はっ！」

少し離れた場所では、アイナがセラに見守られながら2匹のワンハンドクラブを相手していた。

素早い動きでクラブ達を翻弄しながら少しずつダメージを与えている。

「アイナ、身体を持ち生きている物は、総じて間接が弱点です。そこを狙いましょう」

「はいっ！やあっ！」

セラのアドバイスを受け、素早く後ろに回りこみ、クラブの脚を狙う。

振るわれた短剣は理想的な起動を描き、狙い通り脚を間接ごと切断する。

「たああっ！」

脚を切断されバランスを崩したクラブの目を狙い、止めの一撃を深々と打ち込んだ。

その調子でもう1匹のクラブを倒し、アイナは一息つく。

なぜこんなことになっているかというところ、昨日の夜まで遡らなければならぬ

八つ当たりという名の食料調達を終えた俺は途中で汚れや血を落とし、別れた川まで戻った。

「ただいまーっと、魚じゃなくて肉を持ってきた」

「主様、おかえりなさいませ」

「お、おかえりなさい！」

戻った俺を待ち構えていたのは、微笑むセラと力チコチに固まったアイナという少女だった。

そういえば、セラと一緒に戻らせたっけ……

「おお、戻ってきたか」

「おかえりなのです」

桜華達も戻っていて、川で果物や山菜を洗っていたようだ。今日は野菜スープでも作ろうかね。

「んじゃ、飯にするか。アイナだっけ？お前も食べるだろ？」

「ひゃい！いただきますふ！」

カミカミだな！

なぜそんなに緊張しているかわからないが、とりあえず今は料理をしよう。

「うし、んじゃ料理するか」

小さめのナイフを取り出し、野菜を切る。

セラは肉の解体をし、桜華は果物の皮をむき、クレスは俺の頭の上で足をパタパタさせている。働け！

「あ、あの！あたしは何をすればいいんでしょうかつ」

「ん？んー・・・じゃあ申し訳ないけど、その川でこの鍋に水を汲んできてくれ」

その好意をありがたく受け取り、アイナに鍋を渡す。

「わ、わかりましたっ！」

相変わらずカチコチと鍋を受け取ったアイナは、カチコチと川へ向かっていった。

面白い動きだなと考えながら、後ろで肉の解体を終えたセラに声をかける。

「なあセラ、ずっとあの感じなのか？」

「いえ、主様が帰ってくるまでは談笑しておりましたよ？」

ふむ、やっぱり俺が原因なのか・・・なぜだ？

「それは主様が修羅の如くイノシシを倒したからだと思いますよ」

そう苦笑しながらセラは言う。修羅ってなんだよ。

「ふむ、どうしたものかね。短い間といっても町まであと1日くらいあるしなあ・・・」

「師匠！水を汲んできましたっ！」

「おう、ありがと・・・師匠？」

師匠ってなんだ？

「あああ！し、失礼しました！」

「え、えーと？」

突然のことに俺は戸惑う。

「あ、あのっ・・・あたしの、あたしの師匠になってくださいっ！」

そんな俺に、ものすごい勢いでおじぎをしながら言ってくる。
しかし、水の入った鍋を持ったまましたのでバシャアと水をこぼしてしまった。

「あわわっ！す、すいません！」

「い、いや、とりあえず落ち着いて」

「ま、また汲んできます！」

ピューツとまた水を汲みに行ってしまった。
なんだかそそっかしいな。

「ふふ、初々しくて可愛いではないか」

「うーむ、しかしなあ。まあ飯のときにでも詳しく聞いてみるか」

一通り準備を俺達は、アイナが水を汲んでくるまで待つことにした。

グツグツと煮えるスープを啜る。
うん、んまい！（テーレッツテレー！）

「味はどうだ？」

「美味しいのー、さすがは九十九だ」

「さすがです、主様」

「皆さんは食べていいのです……」

桜華達には概ね好評のようだ。そしてクレスは精霊だから食べれないらしい。

フーフーと冷ましながら食べているアイナにも聞いてみる。

「アイナ、味はどうだ？」

「はい！美味しいです、師匠！」

「ふむ、その師匠の理由を聞いていいか？」

「あ、はい」

アイナは器を膝の上に置き、話し始めた。

「ふむ、孤児院の為に冒険者になったのか」

アイナは、町の孤児院出身で、その孤児院の子達を養うために15歳になった半年前から、比較的稼ぎやすい冒険者をしているらしい。しかし、戦い方があまりわからない事もあって、弱い魔物にも苦戦してしまつて未だにランクE。

そして、上流に居るランクEのワンハンドクラブを倒しに来た所、ランクCであるビッグホーンボアが水を飲んできるところに遭遇し、

追いかけていたところを俺があつという間に倒したので戦い方を教えて欲しい！ということみたいだ。

「そうなんです・・・でもあたし弱くて・・・だから、お願いします！あたしの師匠になってください！」

土下座までしそうな勢いで、お願いしてくるアイナ。
うーん、困ったな・・・

「でも使う武器はアイナは短剣だろう？俺は格闘だからなあ」

「そんな・・・」

ダメかもしれない感じた、アイナは俯いてしまう。

「それでは私が教えましょうか？」

「え？」

セラの提案を聞き、アイナは顔を上げる。

「そうか、セラが教えてあげればいいんだな」

「え、でも・・・？」

こちらを向き大丈夫なのかと、目で語ってくる。
そんなアイナに苦笑しつつ答える。

「大丈夫だ、セラは俺の１００倍は強いぞ」

「ええっ!？」

「それに剣を使うからな、短剣のこともわかるだろ？」

「はい、剣の扱いならば。ただ、一番得意なのはこの剣のみですけどね」

セラはそう言いながら、自分の剣をぼんぽんと叩く。

「そういつわけだ、だからセラに教えてもらうといいよ」

「わかりました、セラさん、よろしくお願いします!」

「はい、よろしくお願いします」

そんなこんなで師匠云々の話は終わった。

「むう、わらわ達はどうすればいいのじゃ？」

「なのですよー!」

そうだ、桜華達のことをすっかり忘れていた!

しかしそのことを言えば更にいじけてしまうことが手に取るようにわかるので、慌てて取り繕う。

「桜華達は俺を見ていてくれないか？」

「ッ!?!、いきなりそんなことを言われると恥ずかしいないか・・
」

「はうー、照れちゃうのです」

「そういう意味じゃなくてね!？」

ほら、セラが睨んでるじゃないか！

「まだ戦い方に不安があるから見てほしいんだよ」

「なんじゃ、そういうことかや」

残念そうに言う桜華。なにを期待してたんだ！

そして雑談しながらスープを食べ終わり、後片付けをして、俺達は寝ることにした。

ちなみに今日の夜番はセラになった。

そして夜が明け、冒頭に戻る。

戦闘が終わり、町へ出発し、しばらくの時間が経った。

「ふー、町まで後どれくらいだ？」

「後少しで着きますよ、師匠」

実際に教えてるのはセラなのに、未だ師匠と呼んでくるアイナ。
なぜだ・・・

「なあ、その師匠というのはやめないか？」

「いえ！教えてくれるのはセラさんでも、師匠は師匠です！」

どんな理屈だ！

「まあまあ、いいじゃないですか」

「そうだぞ、師弟関係というのも悪くなくろう」

うーむ・・・そんなんでいいのか？と考えていると、アイナが涙目
になりながら言ってくる。

「でも、どうしても止めてくれというならやめます・・・」

「だー！師匠って呼んでいいから泣きそうな顔するな！」

その重圧に耐え切れなかった俺は、了承してしまっ。

するとアイナは花が咲いたような笑顔になり、お礼を言ってくる。

「ありがとうございます！」

「いや、えーと・・・もういいです・・・」

女って怖いね！

「師匠、見えてきましたよ！」

「お、そうか。じゃあもう一頑張りしますか、ね！」

ガサガサと藪を掻き分けて、ロングネイルモンキーが襲い掛かってきた。

それを気配で察知していた俺は、その長い爪をかわし、顔面に拳を叩きつける。

その一撃で、ロングネイルモンキーは飛び掛ってきた藪の中に吹っ飛んでいき、ドスンという衝撃音が聞こえてきた。

「さすが師匠です！」

「ははは・・・」

実はセラから目配せがあつたなんていえない・・・！

その後は特に襲撃もなく、無事にカミール町に着いたのだった。

第13話（後書き）

はい、ということで、可愛い弟子が増えました。

といつても、この町だけのサブキャラですけどねw

話の展開が遅くて申し訳ないです・・・ノロノロと進んで行きますが、これからも頑張りますので応援をよろしくお願いしますw

感想などなど、お待ちしておりますーす！

第14話（前書き）

どうもー！

この小説のお気に入り人数が100人を超えました！

登録してくださった方、ありがとうございますっw

こんな駄文を応援してくれているなんて、感謝のしようもございませんっ><

精一杯がんばっていきますので、これからも応援のほど、よろしく
お願いします！

では、第14話、はじまりはじまりー！

第14話

カミール町に着いた俺達は、まず最初にアイナの道案内で宿屋に向かった。

案内された宿は市場に程近い3階建てで、個室と大部屋があるらしい。あまり汚れてなかったので、最近建てられたばかりなのだろう。幸い大部屋が開いていたので、そこを借りることにした。1泊100ゴールドだったので、とりあえず3日分予約する。

従業員に案内された部屋は3階で、ベッドが3つに大きなテーブルが真ん中に置かれ、座椅子らしきものが4つほど置いてある。窓からは町並みがよく見えた。近くにある市場は中々賑わっているようだ。

荷物を置き、これからのことを話し合う。

「とりあえずはアイナのクエスト完了報告をするとして、その後はどうする?」

「そうじゃのう、わらわ達は九十九について行けばいいだけなんじやが・・・」

桜華はそう言いながら、ちらっとアイナを見る。
なるほど、そういうことか。

（セラ、アイナに俺が語り手だということを教えても大丈夫か?）

（邪mana気は感じませんから、大丈夫だと思いますけど・・・）

（思いますけど？）

（この子のことですから、ぽろっと零してしまうかもしれませんね）

この短期間にセラのアイナへの印象は決まったみたいだ。つまりドジっ娘と。

（じゃあ秘密にしておいたほうがいいな。皆も気をつけてくれ）

アイナには少し申し訳ないが、ここで騒ぎになるくらいなら黙ってたほうがいいだろう。

ちなみにクレスのことはこういう物だと教えている。信じてくれるかわからなかったが、素直な子なのですんなりと信じてくれた。高い壺とか買わされそうで不安だな・・・

「じゃあ、とりあえず俺とアイナだけでギルドにいつてみるよ」

「あら、なぜですか？」

「んー、ちょっとな。後で市場に連れて行ってやるから待つてくれ」

「ふむ、そういうのなら待つとしようかの」

納得してくれたみたいだ。

なぜ連れて行きたくないかというと、バートさんがギルドには荒くれ者が多いと言っていたことがあったからだ。

もちろん桜華達がそんなやつらに遅れをとるはずもないし、そいつらがどんな目に遭うか簡単に想像できる。

まあ、要は乱闘騒ぎで目立ちたくないっていうのと、絡んでくると

思われる輩と必要以上に関わりたくないってことだ。

「よし、それじゃあアイナ、案内してくれ」

「はい、師匠！」

そうして、アイナに案内されながらカミール町のギルドへと向かった。

「なるほど、バートさんが言ってたこともわかるわけだ・・・」

案内され、ギルドの中に入ると、昼間だというのに酒臭かった。

そして俺を値踏みする視線と共に、隣にいるアイナにもいやらしい視線を送るものがたくさんいた。

このロリコン共め！

アイナには女性の受付のところに行かせて、俺はギルドの中を見渡す。

フレッセント村のギルドとあまり大差はないらしく、ランク別のクエストボードとかはあちらと同じだ。

あるとすれば、ギルドの中にいる人の数だろう。

酒場には酒を飲んでるものや、馬鹿騒ぎしてるもの等が多い。

そして女性にはいやらしい視線を送るという、セラが居たら纏めて神罰というなの駆除をしそうだ。・・・つれてこなくて良かった！

「師匠、どうしたんですか？」

「あー、なんか騒がしいなと思ってな」

報告が終わったアイナがキョロキョロと見渡している俺にそう聞いてくる。

「ここはいつもそんな感じですよ、魔物から守ってくれるのは嬉しいんですけど、あまり長く居たくはありません」

それに何かいやらしい視線も感じますし・・・と少し怒ったように言うアイナ。

おい、ロリコン共、視線がばれてるぞ。

「まあ、行くか」

「そうですね」

そう言っ出てようとする俺達の前に、ハゲ散かした大男が立ちはだかった。

「おうおう、待ちな。おめえ、見たところ新顔だな？」

うわー、このテンプレな展開、絶対来ると思ったよ・・・。

「そうだけど、何かようか？」

げんなりしながら答える。

「へへ、先輩に対して何かしら挨拶つてのがあるんじゃないのか？」
「そうだそうだー！」と周りから声が聞こえてくる。

「何が言いたいんだ？」

「金だよ金、少し置いてけや。その嬢ちゃんでもいいけどな！」
ガハハと下品に笑う男に、アイナは脅えて俺の後ろに隠れる。ちよつと嬉しいのは秘密だ。

「はっ、誰がてめえなんかに金を払うかよ。アイナはもつての他だ、失せろ」

「あんだとう・・・？俺を誰だと思ってる。ランクCのゾンゲ様だ！」

明らかに雑魚っぽいんだが・・・

「ゾンゲだかロンゲだか知らねえが、邪魔だからそこを退け」

「てめえ、言わせておけば！」

別に挑発したつもりは無かったが、殴りかかってくる大男。

でかい身体の割りに意外と早いパンチを打ってくる。さすがにランクCって事だけはあるみたいだ。
だが

「な、なにに！？」

俺はその一撃を易々と受け止めていた。

「なんだ、ランクCでこんなもんかよ」

「て、てめえ！放せ！」

掴まれている拳を離そうと必死に引っ張るハゲ。

そんなハゲを無視して、受付のお姉さんに声をかける。

「なあ、どれくらいだったらやつてもいいんだ？」

その質問を理解したのか、受付のお姉さんは、にこやかに笑いながら答える。

「殺さなければ、如何様にも」

「りょーかい」

その声を聞いた俺は、掴んでいた手に徐々に力を籠める。

途端に、ハゲの拳がミシミシと音を上げ始めた。

「いで、いただだ！ちくしょう、放しやがれッ！」

痛みに耐え切れなくなったハゲは、空いてる手でまた殴りかかってくる。

「無駄だよ」

「ぎゃあああ！」

同じように、拳を受け止め、力を籠め始める。
そして

「ぐぎゃあああ!？」

バキッと、両手の拳の骨が割れる音がして、男が叫び声をあげる。

「うるせえな、黙って寝てろ！」

軽く飛び、ハゲの延髄にハイキックを打つ。

「ゴヒュッ」と空気が抜けるような声と共に吹き飛ばされたハゲは、壁にぶち当たり、動かなくなった。

それを見ていたギルド内に居た者たちはシーンと静まりかえる。

「おら、アイナ行くぞ」

「は、はい！」

それらを見送って、俺とアイナは宿に戻った。

宿に戻り、町へ買い物だ！というときにふと気づく。

「なあ、お前らってその鎧とかしかないのか？」

桜華達はいつも同じ服や鎧を着ているのだ。

もちろん臭いとかそういうのではない。それは武器に戻り、また顕現すると何故か汚れなどは落ちていくからだ。

しかし、女の子と買い物に行くのに、相手が戦闘服姿だとかもつたいない気がする！ということでダメ元で聞いてみたわけだ。

「わらわはこのままじゃのう」

まあ、桜華は着物だしな。

「私は普通の服もありますよ？」

おお、そうなのか！

「せっかくの買い物なんだし、堅苦しいのはやめようぜ！」

どんな服を見せてくれるのか、ワクワクしながら言う。

あれ？でもいつ買ったんだ？そう思っていると、セラは目を閉じた。

「では失礼して・・・武装解除！」

そういうと、セラの周りに光が集まった。

そして光が消えると普段着姿のセラが現れた。

上は仕立てのいい、フリルの着いた白いカットソー。下は黒い膝丈

のタックススカートを着ている。
靴は花のコサージュをあしらった赤いパンプスのようなものを履いている。

一言で表すと、貴族のお嬢さんって感じの服装で、セラにとてもよく似合っている。

「ふふ、主様、どうですか？」

「あ、ああ、よく似合ってるよ」

その場でぐるりと回り、スカートの端を摘みながら聞いてくるセラにドキッしながら答える。

「むうー・・・」

（むうー・・・なのです）

桜華とクレスから感じる視線を無視して、町に出かけることにした。

色んなところを見て周り、もう夜になろうとする時間になった。

そして俺達は、古道具屋に来ていた。ちなみにアイナはもう孤児院に帰っていった。

ここに来る途中には、色々なことがあった。

セラはナンパされたり、桜華は迷子になったり、クレスはネックレスから飛び出してきそうになったり、未然に防いだがスリにあったりと大変だった・・・

セラなんて、強引に連れて行こうとする奴を笑顔で殴り飛ばしてたからな。あれは超怖かった。

そんなこんなで店を見て回ったが、めばしいものが無かった。

しかし、こんな大きな町にクレスみたいなのが無いのはおかしいと思う、俺は店主に聞いてみることにした。

「店主、この町には何と言うか、いわく付きみたいのとか、宝とかってないのか？」

「なんだあんた、そういうのが望みか・・・それなら北側にあるスラムに行ってみな、闇市が開かれてると思うよ」

「闇市・・・そんなものがあるのか」

まあ、盗賊とかいるくらいだからあっても当然か。

「ただ、無事で帰ってこれるかどうかは知らないよ」

「ふむ、合法ではないのか？」

「当たり前だ、いつも憲兵が追っかけまわしてるけど、なかなか潰れないのさ・・・ワシら商人にとっては邪魔者以外のなんでもない

よ
「

ほーほー、なるほどなるほど。

「なら、潰してしまっても構わないんだな？」

俺はそういうと、ニヤリと笑った。

第14話（後書き）

ということで、怪しい終わり方にしてみましたw

次は何と、仲間が増えますよ！

誰が増えるかはお楽しみということでw

では感想などなど、お待ちしております！

第15話（前書き）

どうもー！

パソコンがやばいです、フリーズやらいきなり画面が真っ暗になるやらと、危険信号放ちまくりです。誰か助けて！

そんなことがありつつも、何とか15話を書きました。
今回は一度やってみたかった闇市！ファンタジーっていったらこれは外せませんよね！

ということで、第15話、はじまりはじまりー

第15話

「なんか、如何にもって感じだな」

古道具屋を後にした俺達は、その足で北側にある闇市に来ていた。セラはその間に完全武装になっている。

「そうですね、いたる所から邪な気を感じます」

「それに何人かわらわ達の後をつけてきておるしの」

まあ、綺麗処が二人も居ればなあ。

でも天地がひっくり返ろうが、絶対に桜華達が攫われることはないけどな。

「さて・・・道具屋のおっちゃんは貴重なお宝はオークションで売買されるとか言ってたな」

「ふむ、ではそこに向かうとするかの」

「ああ、でもその前に・・・クレス、お前の仲間はどこにいるか？」

なんでも、近くに精霊が居れば気配を感じ取れるらしいので、ネックレスの中に入ってるクレスに聞いてみた。

（うーん、ここには居ないみたいなのです。ここの雰囲気は精霊には毒なのですよ）

「そうなのか、ってクレスは大丈夫なのか？」

（はい、ツクモさんが居るので平気なんですっ！）

よかった・・・まあ、元気じゃないクレスなんて想像できないけどな。

ま、気を取り直して

「オークションに行こうぜ！」

「この宝石はただの宝石ではございません！なんと風の魔法を封じ込めてあり、風よと念じるだけで・・・ほら、この通り魔法が使えるのです！」

緑色の宝石を持った司会が、丸太に向かって宝石をかざした。

すると、宝石が薄く発光し、そこから風の刃が飛んで行き、丸太を真っ二つにした。

「ほー、そんな便利な物があるのか」

「ふふ、でもあの魔力量では、あと5回くらい撃ったら効果は切れてしまいますけどね」

わーお、あまり使い勝手は良くないんだな。

しかしそれを知らない商人らしき人達は、無限に魔法が撃てると思っただのか、挙って値段を上げ始めた。

「1万ゴールドが出ました！ほかにはありませんか？・・・では風の宝玉は1万ゴールドで卸させてもらいます！」

ふーむ、俺達の仲間は居ないのかねえ。

「では、次で最後とさせて貰います。最後の品はこちらです！」

豪奢な布に包まった2本の何か、あれはたぶん剣かな？

司会は、もったいぶりながらその布を取り払った。

布の中から現れたのは、美しく輝く紅と蒼の二振りの剣が夕暮れに煌いていた。

その姿は激しく燃える炎と静かに流れる波のようだった。

紅い剣は刃渡り50cm程、そして切れ味を鋭くするためか、軽く反り返っていた。柄頭には真つ赤な宝石がはめ込まれている。

対して蒼い剣は、波を連想させるような曲線を描き、その刀身は分厚い。恐らく防御主体なのだろうか。紅い剣と同じく、柄頭には真つ青な宝石がはめ込まれている。

「主様・・・」

「うん、わかってる。あれはお前たちと同じだな」

なぜかと言われると、そう感じたとしか答えられないが、あれは間違いないセラ達と同じだ。

さて、どうやって助け出すかね・・・

「こちらの双剣はかの有名なサーザンド王国の英雄、『要塞』の二つ名を持つギルフォードが使っていたとされています!」

その名を聞くと辺りに居た人達がざわめき始めた。なんだ？

「彼の死後、この剣は遺族が保管していたのですが、私どもの手の者が長い月日を掛けて、ようやく盗み出した一品です!」

ほー、それならばこっちが盗み返しても文句はないわけだ・・・もつとも盗むじゃなくて強奪の間違いだけだな。

「ではこちらの品は5万ゴールドから始めさせて頂きます!」

その声を皮切りに、周りからは次々と買い手の声が響く。そんな中、俺は双剣に声を掛けてみることにした。

（おーい、その双剣おきてるか?）

（ツ!? な、なに? 誰よ! ?）

（だ、誰ですか! ?）

お、通じた通じた。ってなんだ、双子か？

（んーと、これ言ってるかわるか・・・? 神の語り手って奴だ）

（（え、ええっ! ?））

さすが双子、リアクションが同じだな。

（まあそれで、お前ら盗まれたんだって？）

（え、ええ・・・ギルが死んでから、使い手が居なくて眠ってたんだけど・・・）

（僕達が異変に気づいて起きたら、もうこんなところに連れてこられてて・・・）

（なるほどなー）

まあ、セラにしてもクレスにしても寝てたしなー・・・使われないと暇なんだな。

（まあ、それで単刀直入に聞くけど、助けてほしいか？）

（べ、別にあんたなんかの力を借りなくても・・・！）

（姉さん！・・・語り手様、申し訳ありませんが、助けていただけませんか？）

弟のほうが素直だな。

まあ、何にしてもやることは一つだ。

「よし、成功した。桜華は俺と一緒に、セラは予定通り頼む」

「わかったぞ、彼奴らがどんな顔をするのか楽しみじゃのう」

「ふふ、そうですね。では主様、ご武運を」

俺達は頷き合つて、オークションを見つめる。

「50万！50万ゴールドが出ました！ほかにございませんか！」

「60万ゴールド！」

俺は手を上げ、そういった。

それを聞いた司会は興奮したように煽り立てる。

「60万ゴールド！ほかに、ほかにございませんか！？」

「ろ、65万！」

50万を出した商人が焦つたように値段をあげてくる。

それを見た俺はニヤリと笑い

「80万！」

そう言い放つた。

値段を聞いた商人は、苦々しくこちらをにらみ付けると、これ以上の値段は無理なのか諦めたように俯いた。

「80万！80万より上はございませんか！？・・・無いようなので、こちらの品は80万ゴールドで卸させていただきます！」

さて、それでは行きますかね。

「それでは壇上にお上がりください！」

金貨80枚を持ってきていると思わせるために、一袋を懐に入れる

ように持ち壇上に上がる。

実際は銅貨80枚だけだな。

「では、お金をこちらに……」

「悪いけど……代金は拳つてことにしといてくれや!」

言葉と共に、司会の男のでっぴりと太った腹に思い切り拳を叩き込む。

まさか攻撃をしてくるとは思っていなかった司会は、その一撃で地面を転がりながら吹っ飛んでいく。

あの腹のせいか、ばよんばよん跳ねてたぞ……!

それを見た護衛らしき棍棒を構えたマッチョな二人組みが取り押さえようとこちらに向かってくる。

「桜華、一人頼んだ!」

「おうよ!」

こちらに来た一人の横薙ぎの一撃を屈んで避ける。

そしてがら空きの膝に、水平蹴りを入れて膝がつくんの要領でバランスを崩す。

「っらあ!」

バランスを崩し、膝をついたマッチョの顎に膝蹴りをかまし、意識を刈り取る。

「ゴヒュブツ!?!」

吸い込まれるようにして決まった一撃に、マツチヨは面白い声をあげて、仰向けに倒れた。

桜華のほうを見てみると、あっという間に護衛を倒していて、増援の相手を楽しそうにしていた。

「っと、こうしてる場合じゃなかったな」

増援は桜華に任せて、俺は双剣を手にとった。

「セラ、合図だ！」

会場で様子を見守っていたセラは、その声を受けて剣を抜き放ち、神気を籠める。

セラの周りは驚き、蜘蛛の子を散らしたように逃げていった。

「はッ！」

十分すぎるほどの神気を籠めたセラは、空に向かって神気を開放する。

莫大な光が雲を貫かんと、天に向かって伸びていった。

「おっしやぁ！派手にいくぜー！」

俺は持っていた双剣をバグナウを刺していた特殊ベルトに刺し、混乱している護衛に踊りかかった。

憲兵達が突入し、闇市は一気に騒然となった。

そしてしばらくの時間が経ち、闇市の首謀者達や、裏で加担していた大商人達を取り押さえ、カミール町の闇市は事実上潰えたことになる。

「ツクモ殿、我々への協力、心より感謝致しますぞ」

「いやいや、結果的にこうしたほうがいいと思っただけです」

闇ギルドを潰した立役者として、俺は憲兵長から感謝の言葉を送られていた。

なんでもこの闇ギルドは、盗品の売買だけではなく、人身売買や暗殺等といった後ろ暗いことまでしていたという。潰して良かった。

「では我々はこれにて失礼致します！」

そう言つて、捕まえた首謀者達を連れてゾロゾロと帰っていった。長年苦しめてきたと言つてただけあって、憲兵達は皆晴れやかな顔をしていた。

「さて、それじゃ後はお前らを家に帰すだけだな」

（本当にありがとうございます、語り手様）

（ふん、特別に感謝してあげるわ！）

「あー、はいはい。んで、家はどこにあるんだ？」

そっば向きながらそう言ってくる紅いほうの剣を無視して聞く。
失礼ね！って言っていたが聞こえない振りをしておく。だってうる
さいし……

（僕達の使い手だった人の家は、王都ザナログリフにありますけど・
・・）

「ふむ、そのザナログリフには丁度行くつもりだったんだ」

（本当ですか！？）

「ああ、ついでだから届けてやるよ」

（ありがとうございます！）

おうおう、いいってことよ！

（わ、私は別に届けてほしいなんて……）

（姉さん！ちゃんとお礼言って！）

（う、うう……あ、ありがと……これでいいんでしょ！）

「はいはい、シンデレシンデレ」

（シンデレってなによ！）

文句をいつてくる紅いほうを無視して、蒼いほうに声を掛ける。

「そういえば、お前らの名前ってなんだ？」

（僕の名前はアレスです。姉さんは）

（アグニよ）

「ふむ、アグニとアレスだな」

俺はうんうんと頷いて、桜華達を呼ぶ。

「おい、次の目的地が決まったぞー！」

それを聞いた二人はとことことこっちに向かってきた。

「次はどこにいくのかや？」

「ザナログリフにこいつらを返しにいくんだ」

それを聞いたセラは驚いたように言う。

「返してしまうのですか？」

「ああ、主人の家に返したほうがいいだろう。な、二人とも！」

（あの、僕達はこのまま語り手様の旅についていききたいです！）

これは予想外の返事だな。

「俺は構わないけど、アグニはいいのか？」

（あ、あたしは・・・あんたがどうしてもって言うなら、ついてってあげてもいいわ！）

「典型的だなー・・・まあ、二人がいいならそれでいいか。これからよろしくな、二人とも」

（はい！）

（ふんっ！）

こうして、俺達の次の目的地が決まり、二人の新たな仲間が増えたのだった・・・

「主様に何て口の聞き方・・・神罰が必要ですね・・・フッフ」

（ひいッ!?!?）

第15話（後書き）

ということでしたー！

男がほしいという声が大きかったので、今回はアドバイスを頂きま
した双剣を出してみました！

Honさんのイメージ通りかわかりませんが、私にはこれが精一
杯でしたw

では、感想などなど、お待ちしております！

第16話（前書き）

どうもー！

パソコンの不調な理由がわかりましたっ、これで一安心ですw

そして、矛盾を教えてくださいました方がいますので、その方の指摘通りに修正していきたいと思っています。

ほかにもいっぱいあると思うので、もし見つけたら、ちゃんとかけやコノヤロー！と言ってくれますと嬉しいですよ！

では、第16話、はじまりはじまりー！

第16話

新たな仲間を加えた俺達は、すぐには出発せずにアイナの修行を手伝っていた。

それに宿も3日分で予約してるし、なにより金を稼がないとだめだしな！

「やあっ！」

「今のはいい攻撃です、その感じを忘れずにもう一匹やってみてください」

「はいっ！たあーっ！」

セラの付きっ切りの修行のおかげで、アイナは無事ランクDにあがっていた。

今はランクDのサーベルウルフの群れを討伐に来ている。

「初めの頃と動きがちがうなあ、っと」

（ちょっとツクモ！真面目にやりなさいよ！）

「はいはい、悪かったね！」

死角から飛び掛ってきたサーベルウルフを横に避けると同時に、アグニで斬り付ける。

凄まじい切れ味でサーベルウルフは胴体から真っ二つになった。

「ほーれ、犬っころ。どうしたどうした」

桜華には群れのボスを抑えてもらっているのだが、持ち前のサドが発動して遊び倒している。

クレスは危険が無いために木の上で日光浴・・・自由すぎるう！

（ツクモ兄さん、来ます！）

「あいよつと！」

仲間をやられた怒りで突っ込んできたサーベルウルフを、アレスで防ぎ、弾く。

やはり想像した通り、アグニが攻撃、アレスが防御という双剣みただな。

「こつちに来たのはこいつで最後だったみたいだな」

俺に向かってきた奴はあらかじめ片付けたので、アイナのほうを確認してみる。

3匹に囲まれているものの、一步も退かずに奮闘している。

危ないところはセラが影からけん制しているので、大丈夫みたいだ。

「はっ！」

囲みが一瞬崩れた瞬間を逃さず、目の前の一匹の首を狙い、真っ直ぐに切りかかる。

「やけに素直な攻撃だな・・・止められるぞ？」

やはり、戦闘慣れしていたサーベルウルフは、首を引いて自慢の長い牙で攻撃を受け止める。

そして、受け止めた短剣を弾き、反撃としたが

「かかった！」

隠し持っていた、もう一本の短剣で、サーベルウルフの首を深々と貫く。

なるほど、初撃は陽動だったのか！

その攻撃を見て、飛び掛ろうとしていた後の二匹は警戒を強めた。そして今度は二匹が連動して攻撃をしかける。

「わ、わわっ！？」

二匹のコンビネーションに翻弄されながらも、攻撃はしっかりと避けていく。

なかなか攻撃の当たらないことに焦れた一匹が飛び出し、爪で攻撃してくる。

「っ！」

上段からのひっかかり攻撃を片手で受け止める、若干押し込まれバランスを崩しながらも、もう一方でサーベルウルフの腹を切り裂く。そして裂かれた腹から大量の血を噴出しながら、絶命していった。

一息つく暇も与えないとばかりに、残ったサーベルウルフは横から飛び掛ってきた。

バランスが崩れていたアイナはそれに対応できないでいた。

もらった、と思っていたサーベルウルフは横からの光に飲まれ、何が起こったかもわからないまま消滅していった。

「最後の詰めが甘かったですね、アイナ」

「はい、すいません・・・」

剣を鞘に収め、アイナに声をかけるセラ。

俺がなぜ安心して見ていたかというところ、セラが居たからだ。他力本願じゃないぞ！

「まだボスが残ってるけど、アイナにはまだ無理そうだな」

「うう・・・すいません」

落ち込んでるアイナの頭をぽんぽんと叩き、桜華に声を掛ける。

「桜華ー、そいつは俺がやるよ！」

「うむ、わかった」

殺気を群れのボスに向ける。

このまま桜華と戦っていても勝てないとわかっていた群れのボスは、桜華に警戒しながらも、標的をこちらに変えた。

桜華が攻撃してこないとわかると、俺に突撃をしかけてくる。

「それじゃ、行きますかね！」

相手の牙による初撃を、アレスで受け止め流す。

流したときの隙を見逃さず、アグニで足を狙い、切りかかる。

しかし、群れのボスは身体を捻り攻撃をかわし、着地と同時に今度

は爪による攻撃をしかけてきた。

縦横斜めといった縦横無尽の攻撃を、かわし、受け止め、受け流す。

そのボスとの攻防の最中に、俺は二人に声をかけていた。

（なあ、お前らってなにか能力あるのか？）

（僕達の能力は、僕達のような双剣の使い方がわかるようになるという能力です）

（はあー、だからお前らを普通以上に使えてるわけだ）

（そうよ、だから感謝しなさいよね！）

（ワー、アグニサンアリガトウゴザイマスー）

（なんで棒読みなのよっ！）

つと、そんなことしてる場合じゃなかった。

「グルオオッ！」

爪と剣がぶつかり合った反動で、互いに距離をとる。

両者とも姿勢を低くし、いつでも飛び出せるように構えた。

「これで決めようぜエエ！」

「ガオオオッ！」

弾丸のように飛び出し、突撃する。

俺とサーベルウルフの間に双剣と爪と牙が入り乱れ、ぶつかり合う。

「おらああッ！」

「グルオオオッ!？」

牙を弾かれた時の一瞬の隙を見逃さず、俺は一気に攻勢に出た。

紅と蒼の斬線が目にも留まらぬ速さで切り裂き、叩きつけ、突き刺し、断ち切る。

「これで止めだああッ！」

アグニとアレスを交差させ、振りぬく

「ガッ!？」

サーベルウルフの首が宙を舞い、あたり一面に血の花が咲き誇った。

アイナはこの光景に見とれていた。そして同時に心に誓った。

「私も、いつかあの高みに」

と・・・

戦いを終えた俺達は川で汚れを落としてから町に戻り、ギルドに報告をしにいった。

ギルドに入ったときに騒がしかったのが一気に静まり返ったけど、なんでだ？

報告が終わった後、アイナがお別れパーティーをしようと言い出し、宿に帰る途中に買い物をして、俺達の大部屋でジュースとおつまみというささやかなパーティが始まった。

この世界には未成年というものはなく、いつでも酒を飲んでよかったのだが、アイナは飲んだことないし俺は飲むつもりはなかった。しかし、買出しの中で桜華がこっそりと買っていて、俺達が気づかぬ間に飲み物に混入させたという事件があった。

そして酒を飲んだ皆はどうなったかというところ・・・

「でひゅからねー、私はこー思うわけねすよ！あるりさま、聞いてひゅか！？」

「あー、はい。聞いてます・・・」

「じじょー！いがないでくださいーっ！」

「ごめんね？もう決まったことだからね？」

「んふふふ、九十九・・・もっとちこうよれ・・・んふふ」

「いやいや桜華さん、なんで脱ぎだすんですかね？」

「アハハハハー！世界が回ってまひゆのれすー！」

「クレスさん、人の頭をばしばし叩かないでくれませんか？」

「でっひゅからー！聞いれまひゅかー！？」

「あ、はい。それはとても高尚な考えで・・・」

「じじょー！！」

「だからもう決まって・・・」

「んふふ・・・つくもお」

「服をきて・・・」

「アハハハハ！」

「頭を叩k・・・いいかげんにしろやあああああ！！！」

（た、大変ね・・・）

（かくぶる）

「さて、俺達はもう行くな」

「はい・・・」

夜が明けて、俺達は予定通りに町を出発することにした。
あの後なにがあったかは、ご想像にお任せします

「まあ、そんなに落ち込むなって。お前は十分強くなったんだ」

「・・・」

アイナは何かを言おうとしたが、風が大きく吹いてよく聞こえなかった。

「ごめん、なんだって？」

「・・・えっと、旅の無事をお祈りしておきますねっていったんです！」

「そうか、ありがとな！」

「はいっ！」

なんだ、やっぱりアイナはいい子だな！

「それじゃ、また機会があったらよるから。またな！」

「はい、また会いましょう！そのときには師匠もびつくりするくらい、強くなってますからね！」

「ははは、期待してるよ」

俺達はアイナに手を振りながら、王都ザナロクリフに続く街道を歩き始めた。

「今度会ったら、本当にびつくりさせちゃうんだから・・・」

後にアイナは双剣を使い始め、ランクSSまで上り詰めた。
そしてギルフォードの再来と謡われ、『双剣姫』という二つ名までついた英雄になったのはまた別の話である。

第16話（後書き）

はい、そういうわけで16話をお送りしました！

アイナはサブキャラなので、旅にはついてきませんw
後々出すつもりですけどねw

では、感想などなど、お待ちしております！

第17話（前書き）

どうもー！

やりましたっ、10万アクセス、見てくれた人が1万人を超えましてっ！

嬉しいです、本当に嬉しいです！

まさかこんなに行くとは思いませんでしたw

これを励みに、更に精進して行きたいと思っています！

第17話

アイナの見送りを受け、サザーランド王国の王都に向かい始めた。カミール町から王都ザナログリフまで街道を4日ばかり歩くと着くらしい。

「馬車か何かあればもっと早くいけるんだけどなあ」

「ふむ、こうして歩くのも中々悪くないと思うぞ」

ぼやきながら歩く俺に、右に並んでいた桜華は木々を眺めながら言う。

でも科学の力に慣れてるから、歩くのって結構だるいんだよね・・・

「桜華さんの言うとおりです、こうして外を自分の足で歩いて、主様と一緒に旅をできることは私達にとって、とても幸せなんですよ」

「

俺と桜華の一步後ろを鼻歌を歌いながら歩いていたセラも乗ってくる。

「うーむ、そう言われると悪い気はしなくなっ」

「ツクモさんは単純なのですね」

「なんだとー？俺の頭から降りるか？」

俺がそう言つと、「いやなのです」と頭の上で日向ぼっこをしていたクレスがしがみ付く。

痛いから髪を引つ張るな！

（随分と仲がいいのね・・・）

「なんだ、仲間に入りたいのか？」

（な、何でそうなるのよ！？）

「何かうらやましそうな声だったからな」

（そんなことないわよ！）

（姉さん！・・・すいません、姉さんは素直じゃなくて。本当は仲間に入れてほしいんですよ）

ほー、やっぱりか。ツンデレだもんな！

（アレス！なんで言うのよ！？）

って自分でばらしてるし！

そういえば、こいつらも顕現させてみないとな。

「お前ら、顕現してみるか？」

（はい、お願いします！）

（わ、私は別に　　）

「そーらいくぞー、顕現！」

もはや当たり前となつてゐる光が俺を包み込む。
そして光が引いていくと、二人の姿g

「ブゴフツ!？」

「人の話をきけえええ!」

ではなく、光の速さで飛んできた拳だった。

「い、いてえ・・・」

「だ、大丈夫ですか!？姉さん、謝つて!」

「こいつが人の話を聞かないから悪いのよ!」

なんだその理屈は!

そう叫ぼうと、アグニのほうを向くと・・・

「フフフ・・・主様を殴り飛ばすとは」

「いい度胸じゃのう?」

二匹の鬼がいた。

「ひいつ！？す、すみませんでした！」

「私達ではなく、主様に謝りなさい！」

おお・・・二人からないはずの角と牙が見える・・・！

二人にしかられたアグニは、俺に寄ってきて少し涙目になりながら謝ってきた。

「う、ごめんなさい・・・」

「うん、可愛いから許す」

「なっ！？」

あ、すっかり言葉に出してしまった。

「い、いいいきなりそんなこと言われても困るっていうかそりゃあ嬉しいけどもっとムードを考えてほしいっていうかそのあの

」

「わー、暴走したけど、大丈夫なのか？」

「え、ええと・・・初めてのことなので僕もわかりません」

アレスは困ったように苦笑する。

ここで二人の姿をよく見てみる。

アグニは肩までのオレンジの髪をサイドテールにっていて、眼は少

しオレンジ掛かった赤で、性格を現すように少し釣りあがっている。身長は俺の肩くらいで、顔は可愛いというよりか、綺麗といったほうがいいだろう。つまり美少女。

服はオレンジの太ももまでのチュニツクに黒いスパッツを履いていて、靴は動きやすさ重視の短めのブーツ。

その上に炎の模様が入った紅い胴鎧、ガントレット、レギンスを着している。

腰の鞘には、自分と同じ色の双剣が刺さっている。

対してアレスはスカイブルーのショートヘアーで、眼は少し垂れ目で、色は水を思わせるような青色。

身長はアグニとあまり変わらなく、160あればいい方と言ったところだ。お姉さまに好かれそうな感じの美少年だな。

服は白いロングシャツに青いジャケットを着ていて、下は黒いジーンズのような物。靴はアグニと同じ短めのブーツを履いている。

姉と同じく、服の上に波の模様が入った蒼い胴鎧、ガントレット、レギンスを装着して、腰には蒼い双剣が刺さっている。

じろじろ見ていたのがばれたのか、アグニは真っ赤な顔をしてキツと睨み付けてくる。

怖い怖い。

「で、顕現してみた感じはどうだ？」

「自然を自分の手で感じれるなんてすごいです！」

「そう、ね・・・悪くないわ」

まったく逆のこといってるぞ、この双子。

「それじゃ、旅の続きといきますかね！」

そうして俺達は、目標の王都への道を歩き始める。

王都までは後4日、これから何があるのか少し楽しみだ。

王都ザナログリフより遙か西へ行った所に、ある薄暗い洞窟があった。

しかし洞窟は、普通の洞窟ではない。

この世界を創ったとされる神と真逆の存在である、破壊神を奉っていた遺跡だった。

遺跡周辺の村々で、昔から冒険者達の間で語り継がれる、この遺跡の噂があった。

暗い遺跡の奥深くに、一振りの赤い、血のように赤い剣がある。

この剣を持つと、絶大なる力を手に入れることができる。

しかし、この剣は人を選ぶ。

もし自分を持つに相応しくない者が手をかけると、たちまち全身の血を吸い尽くして殺してしまう。

と、いう噂だ。

そして、その噂を確かめようと、ある冒険者達が遺跡に入っていた。

「薄気味悪いところだな」

リーダーらしき男が言った。

「まったくだ、本当にあるのかねえ・・・ここに」

ヒゲの生えた小柄な男が言った。

「この周辺の村々にいる冒険者達に聞いたんだ、間違いないだろう」

見上げないと顔が見れないほど大きな男が言った。

「で、でも止められたわよね・・・絶対に行くなって・・・」

神官のような服を着た女が言った・・・。

彼らは、冒険者の間ではそこそ有名なパーティでメンバー全員はA、本来はカミール町周辺でクエストをこなして来た。

しかし、この噂を聞きつけて、自分達こそはと思いやってきたのだ。

冒険者達は、順調に奥へ奥へと進んでいった。

小柄な男が罨を察知し、迫りくる魔物はリーダーと大男が息の合った連携で蹴散らし、行軍の疲れや傷は女が癒す。まさにバランスの取れたパーティと言えるだろう。

そして彼らは、最深部にある、剣の元へたどり着いた。

「なんて美しい剣だ・・・」

「これは想像もできないくらいなお宝だぜ・・・」

「これを、これを俺の手に・・・」

「綺麗・・・」

そこにあつた剣が放つ妖しい美しさに、4人は魅了され、フラフラと近づいていった。

（だめっ！来ちゃだめだよっ！）

剣は叫ぶ、しかし4人には聞こえない。

手を伸ばし一步一步フラフラと近づく、まるでB級ホラーのゾンビのように。

（お願い！来ないで！ダメEEEEEEEEツ！！）

いくら叫んでも、聞こえることはない。

そして冒険者達が剣に触れた瞬間

周囲は赤く、ただ赤く染まった

4人の人間だつたものが崩れ落ちる。

その一拍後、闇の中から黒い悪魔の羽を持った者が現れた。その者は、崩れた物を見て、心底愉快だという様に嗤う。

「フフ、フフフフ・・・やはり、人間が悶え苦しむ姿は素晴らしいな・・・」

（・・・なんで・・・なんでこんなことするの・・・？）

「なんで・・・？」

剣のほうを向き、嬉しそうに、最高だと言わんばかりに大声で嗤い始める。

「フフ、フハハハハハハッ！？なんで？なんでとな！ハハハハッ！」

ピタッ笑い声を止め、聞くものを恐怖の底へ落としそうな声が響く。

「それが、私にとっての、魔族にとっての最高の娯楽であり、力の源なのだよ！」

そして再び嗤う。

「今度はどんなやつが来るか、楽しみに待っているでしょう・・・フハハハッ」

魔族と名乗った者は嗤いながら、闇の中へ消えていった。

（誰か・・・誰か、助けて・・・）

自分が浴びた真つ赤な血が、まるで涙のように流れていった・・・。

第17話（後書き）

はい、フラグが発生しましたよー！

このフラグを回収するのはもう少し後になると思いますけどw
そしてボス的な物も出てきました！

さてさて、これからどうなることが楽しみにしてくださいなっ！

では感想などなど、お待ちしております！

第18話（前書き）

ひー！何とか間に合いましたー！

・・・間に合いましたよね？

第18話

「いやぁーははは、こんな美しいお嬢さん達と一緒に旅をしているなんて羨ましいなあ」

カミール町から王都ザナログリフに向かうこと、4日が経った。

このペースで歩くと、今の時間からすると、予定では今日の昼過ぎには着くはずだ。

隣で愉快そうに笑っている人は、行商人をしている青年だ。名前はハックというらしい。

なぜ一緒に歩いているかというところ、さっき魔物に襲われているところを助けたからだ。

「それにしても危ういところだったよー、ツクモ君達が居なかったら、俺はきつと魔物の腹の中にいただろうねえ。はははは」

元からこういうのか、魔物に襲われてハイになってるのか、桜華達をみて興奮しているのかわからないが、なんかやたらとテンション高いな、この人。

「え、えーと、護衛の冒険者は雇わなかったんですか？」

「それがね、聞いてくれよ！」

「ずずい、と身を乗り出して言う。顔近いつて！」

「ランクDの冒険者を雇ったんだけどさー、突然魔物の数に驚いて、

依頼主である俺を置いて逃げたんだ！」

「・・・えー」

なんじゃそりゃ。

確かに命あつての物種なのはわかるけど、依頼主くらい守れよ！

「最近冒険者の質が落ちてきているのと、魔物がどうにも活性化してるみたいなんだよ」

「ふむ、魔物の活性化って具体的には？」

「本来は出てこない場所に出てきたりだとか、普段は人をあんまり襲わない魔物が人を襲うようになったとか・・・極めつけは数自体がどんどん増えてるらしいんだ」

ふーむ、鏡が言ってた世界の危機ってこれに関係してるのか？

「でもまあ、世の中がどうであろうと、俺達商人は結局物を売るだけなんだけどな！ハハハ」

「なんと遅しい・・・他に何か知ってることってあります？例えば噂ですか」

俺が聞くと、ハックさんはあごに手を添えて「うーむ」と考え始めた。

「そういえば、なんだか語り手が現れたーって大陸全土で噂になってるみたいだな」

それを聞いた俺達はビシツと固まった。

なんだ・・・・俺が語り手ってことはばらさないようにしてるし、バートさん達が噂を広めるような人じゃないはず・・・・

「ま、まあ、語り手様が・・・・それは本当ですか？」

いち早く硬直から立ち直ったセラが、作り笑い全開でハックさんに聞く。

セラみたいな美人に話しかけられて嬉しいのか、ハックさんは若干だらしなない笑みを浮かべて答える。

「ああ、なんでも隣の大陸の聖アルサルム教国の神官達がどんどんこつちに向かってきてるらしいんだ。向こうのことは良く知らないんだが、なんか神気を感じ取れる装置みたいなのがあって、それを感じ取ったとか何とか・・・・」

うーん、これはまずいな・・・・バートさんに聞いた所だと、狂信者の集団らしいし。

とりあえず、俺が語り手ということは確実に信頼できる人にしか教えないようにしよう。

俺が念話で桜華達に伝えたと、みんなから了承をもらった。

しかしクレス辺りがポロつと口に出しそうだな・・・・王都に居る間はネックレスで寝ててもらおうかね。

（いーやーなーのーでーすー！）

（でもなあ、っていうかそもそも精霊が気軽に人前に出ちゃだめだろー！）

（うーうー!!）

かわい・・・じゃなくて、ここは心を鬼にしなければ！

（うーうーうー！）

鬼に・・・

（うー！うー！うー！）

（わ、わかった。宿の部屋なら出ていいから、な！）

（むう、それと遊んでください・・・）

（わ、わかったよ・・・）

わーい、とクレスはネックレスの中で喜ぶ。

決して可愛さに負けたんじゃない、可哀想と思ったからだ。うん。

・・・お前ら、ジト目でみるんじゃないねえ！

その後、桜華達にジト目で見られながら、俺とハックさんは他愛もない会話をしながら王都を目指した。

「いやあー、助かったよ!」

「いえいえ、じゃあ俺達は宿を取るんで」

「うん、俺はしばらくここで商売をするから、何かあったら気軽に訪ねてくれ!」

王都についた俺達は、市場の前でハックさんと別れた。

ちなみに王都の中へは、門番に軽いボディチェックされただけで入れた。それで大丈夫なのか？

それにしてもさすが王都というだけのことはあって、人の数が半端じゃない。

カミール町でもすごいと思ったが、ここはレベルが違うな。

どこを見ても人人人、何かのお祭りですか？って聞きたいくらいに人であふれてる。

まあ、前の世界の住んでたところは、片田舎でのどかだったからなあ・・・

「ま、とりあえず宿を取るか」

「はい、それにしても歩くって意外と疲れるのね」

「もー、姉さんだらしないよ?」

首をぐるぐる回しながら言うアグニに、アレスは苦笑する。
それを見た俺は、何か引つかかるものを感じた。

「はて、何かを忘れてるような・・・？」

立ち止まり、考えている俺に気がついた桜華が不思議そうに声をかけてくる。

「九十九、どうかしたのかや？」

「うーん、何かひっかかるんだよなー・・・」

「ふむ、まあ宿に行ってからゆっくり考えればよからう」

「それもそうだなー、んじゃ行きますかー！」

後で思い出すだろうと思い、俺は考えるのをやめ、先に行ってるセラ達を追いかけた。

「んー！久しぶりのベッドですね！」

「そうだなあ、野宿は地面に寝袋だったからなあ」

夕食を終えた俺とアレスは、ベッドの上でくつろいでいる。

女性陣はと言うと、隣の部屋でくつろいでると思う。

さすがに人数が増えてきたので大部屋でも収容できず、男と女で部屋わけしたのだ。桜華達は案の定駄々を捏ねたが黙殺した。

「あー、ふかふかだー・・・」

「ふかふかですねー・・・っと、剣を外さないですね」

アレスは俺のようにベッドに寝そべろうとして、腰に挿している双剣に気づき、近くにあったテーブルに置いた。

その置かれた双剣を見て、俺は忘れていたことを思い出した。

「あー！ー！？」

「ひゃうっ！？」

いきなり大声を上げた俺に、アレスは悲鳴を上げながらビクツとした。

「可愛い・・・じゃなくて！肝心なこと忘れてた！！」

「な、なんですか・・・？」

「アレスとアグニの里帰りだよ！」

「あ・・・」

王都に来て、一番最初にしようと思っていた里帰りのことをすっかり忘れていた俺達であった。

第18話（後書き）

ちよつと不完全燃焼で申し訳ありません・・・

最近話の構成がうまくできなくて・・・フラグ回収はもう少しあとになる予定になってるけど、早めようかな（´・・・´）

では感想などなど、お待ちしております！

第19話（前書き）

どうもー！

ぼちぼちがんばっていきますよ！

そして前書きで書くことがなくなってきたような・・・！

では第19話はじまりはじまりー

第19話

「諸君らに集まってもらったのは他でもない・・・」

夜も更け、辺りが静まる頃、ある宿屋の一室に重々しく響く声。

声を発した人物は、テーブルに両肘を着け、顔の前で手を組んでいる
別名、碇ゲン ウスタイル

「主様、一体どうしたんですか？」

「我々は重大なことを忘れていた」

「重大なこと？」

「そうなのだよ、アグニ隊員」

組んでいた手を外して、眼鏡をクイツとあげる動作をしながらピシッ
とアグニを指差す。
もちろん眼鏡はかけていない。

「阿呆なことしておらんで、さっさと説明せんか」

「アデッ！」

桜華に頭を軽く叩かれた。

「それで重大なことってなんなのですか？」

「ああ、実は・・・」

「『『『実は？』』』」

「アグニとアレスの里帰りを忘れていた！」

俺達一行はアグニとアレスの元所持者の家へ向かっている。
え？あの後何があったって？・・・記憶が、ないんだ・・・思い出
そうとする身体が震え・・・ふる・・・がくがくふるふる。

「これ九十九、早く往くぞ」

「はっ、俺は一体・・・」

まあ、そんなこんなで双子の家に向かっているわけである。

（その道を右よ）

「へいへい」

ちなみに、顕現していると誰かわからないと思うので、二人には元の
姿に戻ってもらっている。

しかし、流石王都というだけのことはあって、とても広い。

簡単に説明をすると、このザナログリフには王都としての象徴であるサザーランド城と、唯一の神であるアルフェルを信仰しているために、聖アルフェル教会サザーランド支部がある。

王都の人口規模は約30万人程。

立地は、城含めて崖の上に立っており、城の後ろは深い谷で、飛行魔法を使わないと登れないようになっていているらしい。もちろん対策として、対魔法結界が張ってある。

城の正面はなだらかな傾斜で、街の区画が、崖全体を囲う城壁によって分かれている。

わかり易く説明すると、城 城壁 貴族街・教会 城壁 平民街・市場 城壁・門という風になっている。

そしてこのザナログリフは難攻不落の城塞都市として有名ならしい。

城の色は白で白亜城と言っても過言じゃない。

んで今は、貴族街に來ています。周りの家はでかいのばかりだわ・

しかも若干趣味が悪い。

そう思いながら、石畳でしっかりと舗装された道をテクテク歩く。

（この道を抜けたら・・・ありました、あの赤い屋根の家です！）

「意外と小さいんだな」

周りの家と比べたら・・・というか、普通の家のサイズなのだ。

なんというか、他の家に比べたら貧相っていうか・・・造りは頑丈そうだけでも。

（ギルフォードがあんまり豪華なの好きじゃなかったのよ）

「そうなんか、まあ俺もいざ家を作るってなったら、あんまりゴテゴテしたのは作りたくないけどな」

さっきなんて金ぴかの家があったぞ。見てるだけで目が痛くなった。

「んじゃ、まあ行きますか」

「うむ」

コンコンと、ノックをして出てくるのを待つ。

少ししてから、ガチャツと扉が開き、人が出てきた。

「どちらさまでるか？」

出てきたのは、20歳くらいのお姉さんだった。

ダークブラウンの髪をポニーテールにしている、のほほんとした顔立ちをしている。

「えーと、この双剣を・・・」

「その剣は ハアッ！」

「どわあああっ!？」

お姉さんは俺の腰に挿さっているアグニとアレスを見た瞬間、険しい顔つきになり、俺の顔面めがけてハイキックを放ってきた。

「あ、危なかった・・・ちょっと、おちついモノオオウ!？」

「ちょこまかと！その双剣を返してもらいます！」

誰か、このお姉さんを止めてくれ！

「これこれ、少し落ち着かんか」

「なっ！？」

祈りが通じたのか、桜華がお姉さんの拳を軽々と止めていた。

「つまり、あなた達はこの双剣を闇ギルドから取り戻してくれたということ？」

「はい、それもあるんですけど・・・」

言葉を濁す俺に、お姉さんが右に小首を傾げた。可愛い・・・
って二人とも睨むな！
その前に聞いておこう。

（二人とも、このお姉さんは信用していいのか？）

（大丈夫だと思いますよ）

（うん、ギルの孫だからね。イーラは）

そっなのか、じゃあ俺が語り手ってばらしても大丈夫だな。

「とりあえず、こいつらから直接話を聞いてもらったほうが早いかな」

「??」

今度は左に小首を傾げる。ね、狙ってるのか・・・！

「顕現つと」

あたりが一瞬光り、中から二人が現れる。

「え？ええ？」

まあ、初めての人に取ったらびっくりするよな。

「えっと、この姿じゃ初めまして・・・アグニよ」

「えーと、アレスです・・・」

「え、えええええっ!？」

静かな貴族街にお姉さんの驚きの悲鳴が響き渡った。

「か、語り手様とは露知らず、大変ご無礼を致しました・・・」

「い、いやいや、気にしないでください！」

俺の正体を聞き、ずーんと沈んでいるお姉さん。
名前はイーラ・ライナスと言っらしい。

「それでね、イーラ。私達こいつについて行こうと思っんだ」

「勝手なことだと思いますけど・・・」

「うーん・・・そうね、私が持っても使えないし、お爺ちゃんも
語り手様に使ってもらったほうが喜ぶと思っわ」

そう言い、イーラさんは柔らかに微笑む。

「それじゃあ・・・」

「ええ、いつてらっしゃい。語り手様、二人のことよろしくお願
いします」

「はい、お任せください。もう賊なんか指一本触れさせませんよ！

「ふふ、お任せします」

俺の言葉を聞いて、嬉しそうに微笑む。

その笑顔に癒されていると、後頭部に鋭い衝撃が走った。

「デレデレしてるんじゃないわよ！」

「いてえっ！」

「ね、姉さん！」

「あらあら」

な、なんで叩かれたんだ！？

（自業自得、なのですよ）

えー、っていうか、桜華達も何で頷いているんだ！

「ツクモ様はこれからどうするのですか？」

「しばらくここを拠点にして、ギルドのランクをあげようかなって考えてます」

いつまでもランクDじゃ物足りないし、何より金がなくなってきたからな！。

「そうなんですか、私にも手伝えることがあつたら何でも言つて下さいね」

「ありがとうございます」

でもあんまり甘えないようにしないとな。
つと、忘れてた・・・

「イーラさん、俺が語り手つて秘密でお願いしますね」

「何か事情があるのですか？」

「事情つてほどでもないんですけど、権力とか興味ないのと、自由がなくなるのが嫌なので」

イーラさんは納得したように、ぽんつと手を叩いた。
いちいち表現が可愛すぎるぞ、この人。

「わかりました、口外はしません！」

むん、となぜか力瘤を作り、気合を入れるイーラさん。
一抹の不安を覚えるのはなぜだろう・・・？

「と、とりあえず今日は戻りますね」

「はいー、また来てくださいね」

イーラさんの家を出たときには、日が一番上まで昇っていた。

「うーん、まだ時間あるし、とりあえずギルドに行くか！」

「そうじゃのう、討伐の仕事があればいいんじゃないが」

そうだなー……ん、ギルドに登録してない人に手伝ってもらって出来るのか……？

「桜華達もギルドに登録したほうがいいのか……？」

とりあえず聞いてみたほうが早いと思い、俺達はギルドに向かった。

「申し訳ありませんが、規定に反しているためできません」
「ですよー」

うーむ、やっぱり全員登録したほうがいいな。
後ろに待ってる皆に、伝えようと振り返ると……

「へへへ、姉ちゃん達、ちょっと酌してくれねえか？」

わー、またでたー。

下品な顔をした5人の男たちが、桜華達を囲んでいた。

「そうそう、なんだったら違うこともしてほしいけどな!」

ガハハハと下品な笑い声が酒場のあちらこちらから聞こえた。

「下郎が、近寄るでない・・・身体が腐るわ」

「おーおー、言うねえ。じゃあこっちの姉ちゃんは」

男はそう言いながら、いやらしい笑みを浮かべながらセラの肩に手を置こうとした。

「気安く触れないください、私に触れていいのは主様だけです」

セラは手が触れる前に払いのけた。

「ってえ、主様あ？あの受付に居る小僧のことか？」

「へへ、おい小僧。女達借りるぜ？っていつでも返さねえけどな!」

何か勝手に決めてるし。

「あの、助けないでよろしいのですか？」

「あー、あいつらなら大丈夫ですよ。俺より100倍強いですから」

心配そうに声をかけてきた受付の人に、満面の笑みで答える。

事実だしな！

「嬢ちゃん、俺達のとこへ来いよ！」

今度はアグニに手を出そうとして・・・

「姉さんに薄汚い手で触ろうとしないでくれませんか？」

アレスが腕をつかんで止めていた。

「なんだてめえは！」

「姉さんに触れていい異性は、僕とツクモ兄さんだけです」

おー、何か俺も含まれてるけど、美しい姉弟愛だな。

「そして、僕に触れていいのも、姉さんとツクモ兄さんだけです！」

「おおい！？それ何か違うだろ！？」

受付のお姉さんがなんかキラキラした目で見てきてるじゃないか！

「ちつ、じゃあ力ぞくで頂くゝブベラッ！？」

アレスを殴ろうとしていた男が、すごい勢いでギルドの外へ吹っ飛んで行った。

「なんかちよつと引つかかったけど、弟を傷つけようとするなら許さないよ。まあ、あんた等じゃ触れることすら出来ないと思うけどね」

双剣の峰の部分で思い切り吹っ飛ばしたアグニが挑発する。
あいつのことだから、本人は挑発したつもりないんだろっけどね・
・

「なんだと！調子にボファッ!？」

今度はアグニに殴りかかろうとした男が吹っ飛んで行った。

「だから、汚い手で触れるなっていましたよね？」

吹っ飛ばしたアレスはすごい良い笑顔をしていた。

「こ、こいつら！お前ら、やっちま・・・え？」

「お前らって、この人たちのことでしょうか？」

「まったく、暇つぶしにもならなかったわ」

リーダーらしき男が、部下に指示しようと振り返ったら、死体（死
んではないない）の山が出来ていた。
桜華にいたってはゲシゲシ頭を蹴っている。やめなさい。

「え、えっと・・・この小僧！」

「えー、そこで俺か、よっ！」

「ウワラバツ!？」

突っ込んできた男の後ろに回り込んで足払いをし、仰向けに倒れた

ところに、鳩尾に思い切り掌手を食らわした。
何か、やられたやつらの悲鳴が世紀末っぽいな。

「うし、じゃあ皆登録しろよー」

はい、と皆はそこらへんに転がっていた男達を蹴り飛ばしながら
向かってくる。

ちよっとかわいそうな気がする。

「では確認致します、オウカ・ヨシハラ様、セラフィム・ヨシハラ
様、アグニ・ヨシハラ様、アレス・ヨシハラ様でよろしいですね？」

「ちよっとまてええええええ！？」

え、なに、どういうこと！？

「なんで俺の名字を使ってるの！？」

「わらわは九十九の妻じゃからな！」

「右に同じくです！」

「わ、私は別にあんたの妻じゃないけどさでもあんたが望むなら別
に・・・でもまだそういうのは早いっていうk」

「僕はその・・・えへへ」

妻じゃねえだろう！？

特にアレス、お前はなんなんだ！

「ツクモさま」

「なんですか!？」

「羨ましいですわ」

うるせーっ!!

第19話（後書き）

最近アグニをいじるのが楽しいです。

べ、別にツンデレが好きってわけじゃないんだから・・・すみませんでした。

では感想などお待ちしております！

第20話（前書き）

どうもー！

ギルドのことで説明不足なところがあったので、この話で補足しておきました。

たびたび補足しまくって申し訳ありません。

しかし、小説を書くって楽しいですけど、すごく難しいですね・・・

そしてこの小説のお気に入り数が200を超えました！

登録してくれた方、ありがとうございます！これからがんばっていきますので、よろしく願いします！

第20話

王都を拠点にして活動すること一週間。

俺達は順調にギルドのクエストをこなしていき、俺はランクC、他の皆はランクDになった。

そこでひとつ気づいたんだけど、ランクがひとつ上の時、下のランクのパーティーに入ると、金は貰えるけどポイントが半分しか貰えないらしい。

まあ、そんなこんなでクエストを受けるためにギルドへ来ていた。クエストを吟味していると、桜華が隣に立ち聞いてきた。

「九十九や、今日はどうするのじゃ？」

「いつも通り、討伐系のクエストを5つ受けるか」

受付のお姉さんに聞いてみたところ、パーティを組んだ場合、依頼は最高5つまで受けれるみたいだ。

一週間にうち6日は毎日こうしている。

「こここのところ毎日そうしてますけど、何か目的でもあるのですか？」

セラが小首をかしげながら聞いてきた。

「うん、とりあえず皆がランクCになってから旅に出ようと思ってね」

旅をする資金も十分溜まってきたし、なによりずっとここに居るわけにも行かない、この世界を旅したいって気持ちもある。

「ふーん、じゃあもうすぐなわけね」

「でもなんかこう、物足りないです」

まあそうだろう。

だって一人ひとりが一騎当千の力を持つてるからな！

「そこは金のためと思って我慢してくれ」

「はい」

とりあえずクエストをサクッ終わらせてくるか！

「アーマービートル5匹討伐、キラークヤット4匹討伐、狂牛4匹討伐、サーベルウルフ8匹討伐、ギャザー3匹討伐、以上のクエスト達成が確認されました。こちらが報酬となります」

朝からはじめたクエストは、夕方には全て終わった。
全部合わせて1500ゴールド、なかなか稼いだほうだと思う。

「ありがとう。あ、これって課金できる？」

「これは・・・オルガベアの角ですか？」

クエストの途中に襲い掛かってきたオルガベアを振り返りにしたときに、ついにとってきたものだ。

ちなみに倒したのは俺じゃない。俺が相手してたら死んでる自信がある！

「途中で襲ってきて、倒したんだ」

「え、でもツクモ様のパーティは最高でもランクCじゃ・・・」

その疑問はごもつともだ。

だけどこっちにはオルガベアが束になってもひとりで倒せるほどの猛者が4人いるんだ。

クレスは無理だけどな！

「あー、うん。何か倒せた」

そんなことを言うと言わくさいことが起きそうなので、言うわけにもいかない。

金や桜華達目当ての寄生虫がわらわら寄って来そうだし・・・

「そうですか、申し訳ありませんが、クエストを通してない場合ギルドでは引取りを行っておりません」

「そっなんですか」

まあ、ギルドの懷事情もあるんだろうな。

これで買取できるなら冒険者は皆大金持ちになってるだろうし。

「ところでツクモ様」

「はい？」

「チームについてご存知ですか？」

「チーム？」

なんだそりゃ、サッカーでもするのか？

「はい、チームと言いますのは代表であるチームリーダーを決めて、メンバー内でクエストを行うことです」

ふむ、オンラインゲームでよくある、ギルドと同じようなのか。

「もちろんそれだけではなく、チームを結成することで、冒険者ギルドからも得点がついてきます」

「と、いうと？」

「はい、まず依頼者がギルドのクエストが受けれるようになります。こちらは一般の依頼者からとは違い、ポイントも報酬も大きくなっています」

ほー、これなら比較的早くランクアップできるわけだ。

「それと、有名になりますと、指名依頼が入ることがございます。」

こちら普通の依頼とはポイント、報酬ともに大幅に変わってきます。いかが致しますか？」

ふむ・・・別にデメリットもないし、作ったほうがいいか。

「それじゃ、お願いします」

「ありがとうございます。では、こちらの用紙にチーム名をご記入ください」

あー、名前がいるのか・・・

どうしようかと悩んでいると、後ろから桜華が抱き着いてきた。

「九十九、どうしたのかや？」

「ちよつ、いきなり抱きつくな！」

柔らかいものが当たってるんです！

「んふふ、当ててるのじゃ」

「どこでそんな言葉覚えた！」

ていうか、思ったことなんでわかるんだよ。

「それは全て顔に書いているからじゃのう」

「なん・・・だと・・・？」

それじゃ今までのことは全て読まれていたのか・・・！？

「ふふふ、愛いやつ愛いやつ」

微笑みながら頬を指で突いてくる。

「っだー！いいから離れろー！」

これ以上の羞恥プレイに耐えられるか！

「桜華さん、主様に何て羨ま・・・じゃなくて、何てことをしてるんですか！」

その光景を見ていたセラ達がドタドタとやってきた。
今何か不穏な言いかけたぞ。

「ただのすきんしっぷというやつじゃ。それで九十九は何をしていたのかや？」

「ったく・・・チーム名を考えてたんだ」

そう言ったが、チームというのがわからなかったらしく、皆で首を傾げたので手短にチームのことを説明してやった。

「なるほどのう・・・それじゃあ『九十九と桜華の愛の巣』っていうのはどうzy「却下だ」・・・ちえ」

なんだその怪しい名前は！

「では『主様と私』っていうn「ダメだ」・・・しゅん」

二人しかないじゃねえか！

「じ、じゃあ『ラブリーピンク』っていう「何を言ってるんだ」・・・可愛いのに」

なんかいかわしいお店みたいだろ！

（んー、『神の語り手』でいいんじゃないのですか？）

（それなら自分は語り手ってばらしてるようなものだろ。それに教会に目をつけられそうで却下だ）

宗教団体にはなるべく関わらないほうがいいんだ。

「えっと、僕達は武器なので『ウエポンズ』っていうのはどうでしょうか・・・？」

「あー、それいいな。皆はそれでいいか？」

一応確認しておこうと思い、後ろを向く。

「セラよ、わらわが正妻なんじゃからここは譲るべきであるっ？」

「いいえ、そういうわけには行きません！」

「にゃんにゃんパラダイスっていうのも捨てがたいわね・・・」

（うーん、眠いのです・・・）

アレス以外、誰も聞いてないし！

「えっと、『ウエポンス』をお願いします」

「かしこまりました。チームリーダーはツクモ様でよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「ではブレスレットをお貸しください。ありがとうございます、登録いたしますので、少々お待ちください」

勝手に登録したけど、聞いてないみたいだしいいよな。

「一度しっかりと話し合ったほうがいいようじゃな」

「望むところです！」

「いやでも、わんわんカーニバルも・・・」

（・・・ZZZ・・・）

お前らもついいよ！

「とりあえず、今日一日お疲れ様ーのかんぱーい！」

登録が終わり、ギルド酒場の隅を陣取り食事を始める。

ここ一週間、毎日ここに座っているためか、開いていることが多い。

まあ、馬鹿な男達が桜華達に手を出そうとして、ことごとく吹っ飛ばされたせいだと思うけど。
なむなむ。

「ぷはー、仕事の後のジュースはうまい！」

「アゲニ、親父くさいぞ」

「うるさいわね！」

なぜ酒じゃないのかというと、一度ひどい目にあったからだ……。あれ以来、俺は皆に酒を飲ませないように目を光らせている。

「おい、聞いたか？今度は『銀狼』がアレにいつて戻ってこないみたいだぞ……」

「これで何人目だ？」

談笑しながら食事していると、隣の席からそんな声が聞こえてきた。

なんか怪しいな。

「やっぱりあの剣の噂は本当だったんだな」

「ああ、近づかないほうがいいぜ・・・」

ふむ、剣とな？

もうちょっと詳しく聞いてみよう。

「なあ、その二人」

「ん、なんだ？」

「その剣の話、詳しく聞かせてもらえるか？」

俺の予想が正しければ、おそらく桜華達と同じだろうと思う。

「で、でも・・・」

「まあまあ、酒奢るからさ」

「あ、ああ・・・王都から西へ大分行ったところに洞窟があつてな。そこに触れると絶大な力が手に入る剣があるらしいんだ。でも・・・」

ふむ、間違いないみたいだな。

「でも？」

「何でも、剣に相応しくないやつが触れると、血を吸い尽くして殺してしまつて噂があつてな・・・それでここで中堅のチーム『銀狼』が確かめにいったんだが、戻ってきてないんだ」

「なるほどね・・・」

いわくつきつて訳か。

でもおかしいな、血を吸い尽くして殺してしまうっていう話はどうから出たんだ？

「なあ、その血を吸い尽くすって、誰か見たのか？」

「いや、俺達はそのままで知らないんだ」

「詳しく知りたいなら、洞窟の近くに村があるからそこで聞いてみるといいぜ。俺は行くことをお勧めしないけどな・・・」

「そっか、ありがとう。これで酒飲んでくれ」

男達のテーブルの上にくらかのゴールドを置き、自分の席に戻る。男達との話を聞いていたのか、皆が真剣な表情でこちらを見ていた。

「さて、聞いてた通り次の目的地が決まった」

「そっじゃのう」

「すぐに行くんですか？」

「まあ、ランクは後でも上げれるからいいだろう」

金もたっぷりあるしな。

なんだったらまた王都に戻ってくればいいし。

「でも大丈夫なの？血を吸い尽くすって言ってたけど・・・」

「大丈夫だろう、呪い付も扱ったことあるしな」

元の世界で、そういうのに関わったことがある。

持つと人を狂わせる刀と話し合って解決させたのはいい思い出・

・

「そうなんですか・・・それじゃ行く前にイーラさんに挨拶してきてもいいですか？」

「そうだな、じゃあ明日挨拶と道具揃えて、明後日出発するか」

（はいなのです）

よし、次の目的も決まったし、今日はパーツとやるか！

もちろん酒無しでなっ！

第20話（後書き）

やっと前のフラグを回収しに動き出しました。

ただ、遥か西にあるので着くまでに大分時間がかかると思いますw
道中をすっ飛ばすか、ちまちま書いていくか悩めますね・・・どっちがいいでしょう？

では感想などありましたら、よろしくお願いします！

第21話（前書き）

うおおおお！

ルパン見てたら間に合わなかったー！！！！すいませんー！！！！><

少し遅れましたが、何とか更新です！

そして今回は厨二病展開となっております、ご注意くださいw

第21話

血を吸う剣の噂を聞いた俺達は1日目はイーラさんへの挨拶と旅に必要な道具を買い揃え、二日目はその剣がある洞窟の情報と、麓にある村までの情報を集めた。

イーラさんに挨拶したとき、両手を掴まれてものすごい心配してくれた。

俺のほうが少し背が高いので、見上げられる形になったのだが、後ろから睨む女性陣が居なければ、危うく恋に堕ちるところだった。

情報はというと、洞窟の情報は全くと言っていいほど無く、麓にある村のことだけが分かった。

村の名前はアルブ村といい、洞窟がある山以外は平原なので、あまり魔物の被害がないらしい。

距離は王都ザナログリフから徒歩で10日ほど行った所にある。

帝国領に程近く、アルブ村から西へ少し行った所に関所もあるらしい。いつか行こうと思っている。

そして、今は王都から5日程進んだところにある巨大な湖で休憩中。人里から離れてるためか、水がとても綺麗で、見ただけで魚がうようよ泳いでる。

俺のフィッシャーマン魂が唸るぜ！

俺の隣では、釣りに興味あったのか、アグニも一緒にしている。

「ふんふんふーん 入れ食い入れ食いっど・・・13匹目！」

「ちょっと！なんでツクモばかり釣れるのよ！」

だがその差は歴然、俺は今13匹目を釣り上げたが、アグニはちっちゃい魚1匹だけ。

「フッフ、経験がちがうのさっ!」

アグニに向けて親指を立て、言い放つ。

「くううう! 見てなさい、今に大物を釣り上げてやるわ!」

アグニは近場で釣っているのは埒が明かれないと思ったのか、糸をかなり長めに調節する。

そして自分が釣り上げた小さい魚を餌にして、遠くへ思いっきり投げた。

「いいのかい? せっかく釣り上げた魚がダメになるぜ?」

「うるさいわねっ、っていうかその話方は何よ!」

「これはな・・・余裕の表れってやつさ!」

「きいいいいっ!」

アグニとそんなやり取りをしている中、他の皆は何をしてるかという・・・

「平和じゃのう」

「平和ですねえ」

「平和なのです」

「・・・放っておいていいんですか？」

澄み渡る青空の下、レジャーシートを地面に引いてお茶を飲んでいた。

「よっしゃあ！50匹目！」

「ううう・・・」

始めたときには真上にあつた太陽は、いつの間にか沈みかかっていて、オレンジ色の光を俺達に照らしてくる。

こんなに釣ってどうするのかって？必要な分以外は逃がしているから大丈夫！

そしてアグニは未だに0匹。

餌に使っていた小魚はいつのまにか逃げ出していたので、しょうがないから俺釣った大きめの魚を餌にしているが、あまりに釣れなくてうな垂れている。

「諦めな、嬢ちゃん。今日は運がなかっただけさ」

「諦めない・・・諦めるもんですか！」

あまりの釣れなさに落ち込みかけていた気を持ち直し、気合と共に竿を投げなおす。

なにもそこまでムキにならなくても・・・

そしてそんな祈りが通じたのか、竿が折れるんじゃないかというくらいに引かれる。

あまりの引きに湖に落ちそうになったアグニを、慌てて後ろから支える。

「ちょ、ちょっと！どこ触ってるのよ！」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろうっ！」

この世界に着てから、力がものすごい上がった俺でも徐々に湖のほうに引きずられている。

どれだけ大物が掛かったんだよ！

「ぐおおお、何だこの引きはー！」

「も、もってかれるうう！」

苦戦をしている俺達の後ろから、セラの慌てた声が聞こえてきた。

「主様！湖からとても邪悪な気配がします！」

「ぬぐぐぐ、今かかっているこいつの事が・・・！？」

二人を引きずるほどの魚が、普通の魚なわけが無い。

「おりゃあああああ！」

ありったけの力を籠めて引つ張り上げる。

これ以上無いと力を籠めたおかげか、釣竿が激しく暴れながらも徐々に上がってきた。

そして水面に映った影は、ものすごい大きさだった。

「ちくしょ、これ以上は・・・セラ！神気をあいつにぶつけてくれ！」

「はいっ！」

剣を抜き放ち、周りの光を吸収しているか如く、剣が白く輝きだす。

「破ッ！」

裂帛した気合と共に、白く輝く光を撃ち放つ！

光は水面に映る影に吸い込まれるように当たり

「グギヤアアアッ！」

衝撃で飛び出して来たのは、馬鹿でかい化け物だった。

「のわあああ！」

「きゃああっ！」

いきなり飛び出してきた為、俺とアグニは仰向けにひっくり返っていた。

当然、後ろから支えていた俺は下敷きになる。

「むぎゅっ」

「ど、どこ触ってるのよ！この変態っ！」

「ウボフッ！」

倒れた拍子に胸を触ってしまい、アグニからの痛烈な拳が飛んできた。

痛いけど、役得役得。

「そ、それよりあいつは一体？」

一撃を受け、空中に飛び出した化け物は、飛行能力があるのか、そのまま俺達をまっすぐと睨みつけていた。

全長は凡そ200メートルくらいで、腹以外の全身を深い紫色の鱗に覆われている。

手のようなものは無く、尻尾には3又に分かれた矛のような棘がついていて、見た目だけで言えば蛇のようだ。

大人三人は丸呑みできるくらい大きい口をしていて、その口から覗く牙は触れただけで切れそうなほど鋭く長い。

頭には緑色の毛のようなものが生えており、額には角、そして金色に輝く眼は3つある。

「ぐっ・・・！」

なんだ？

額についている3つめの眼を見た瞬間に身体が動かなく・・・！

「ふむ、どうやら強力な魔眼のようじゃのう」

「なん・・・だ・・・って・・・？」

くそ、言葉を出すので精一杯だ！

「主様、大丈夫ですか？」

（ああ、何とか・・・でも動くことは無理みたいだ）

念話は何とかできるみたいだな。

どうしたものかと悩んでいると・・・

「う、うぐぐぐ・・・やっと、やっと釣れたと思ったたらあんな化け物なんて・・・！」

（ちょ、ちょっとアグニさん・・・？）

「吹っ飛ばされるし、む、むむ胸触られるし、ツクモに変な術かけるし・・・もーあつたまきたー！！」

化け物に怒ってるのか俺に怒ってるかわかんねえよ！

（ちょ、アレス！アレス！！）

「な、なんでしょうー！」

（あいつを止めるー！）

「無理です！あんな姉さんみたことないです！」

なんかあのまま放置してるとやばい気がするんだよ！

「絶対許さない・・・！」

真紅の双剣を、右を水平にし頭上に構え、左を相手に突きつけるように構える。

その刀身には全てを燃やし尽くすが如く、炎が纏い踊っていた。

「舞えよ獄炎、我が敵を全て燃やし尽くせッ！衝波獄炎斬！！」

こちらを睨んでいる化け物目掛け、右へ左へとステップを踏みつつクルクルと回る。

頭上に構えた剣を袈裟懸けに炎の衝撃波を放ち、その反動を生かし、回転しながら左の剣を振る。

左の剣を振り切ったら、右の剣を振り上げる。

そうして幾重にも生まれ、終わることの無い衝撃波は向かっていく間にも空気を燃やしながら膨張し、すさまじい熱量を伴い化け物に襲い掛かった！

「ガオオオオッ！？」

あまりの速さに反応できなかった化け物は、恐ろしいまでの轟音と共に獄炎に飲まれた。

「やったかしら・・・ッ！？」

濛々と立ち込める煙の中から、風切り音も聞こえないほどの速さで3又の矛がアグニに飛び出してきた。当たる！と思った瞬間、鉄と鉄と勢いよくこすり合わせたような音が鳴り響く。

「油断大敵だよ、姉さん」

アグニと矛の間にはアレスが立っていた。

アレスは両手に持つ肉厚の双剣で挟むように防いでいた矛を、上に逸らすようにして受け流した。

「ありがとう、アレス」

自分を守ってくれた弟に、優しく微笑む。

そして前を向き、自分を襲ってきた敵を睨む。

煙が晴れる。

中から現れたのは、先ほどの攻撃で全身が爛れながらも、未だ健在な化け物だった。

攻撃が当たらなかったのが悔しいのか、唸りながらこちらを睨みつけている。

矛がダメならと、化け物は鎌首をもたげ、凄まじい速さで獲物に喰らいつく！

「つくう！」

「あぶなっ！？」

流石のアレスも、突進は受け流すことが出来ないのか、二人は横に

転がるようにして避ける。

化け物がアグ二達が居たところに接触すると、ズドンッと地震が起きたように地面が揺れ、土ぼこりが舞い上がる。

「アレス、アレをするから時間稼いで！」

「わかった！」

頭から突っ込んだため、土ぼこりでアグ二達の姿を見失っていた化け物の隙をつき、爛れて柔らかくなっていた腹部を、アレスは深々と切り裂いた。

「グオオオオツ！？」

突然の痛みに驚き、のた打ち回る。

自分を傷つけた張本人を見つけると、怒りに任せて尻尾で猛攻をしかける。

アレスは全てかわしながらも、着実にダメージを与えている。

双剣に水を纏わせ、それを圧縮し長い刃を形成する。

「ハアアッ！」

大振りに振られた尻尾を屈んで避け、そこに生まれた一瞬の隙を突いて化け物の顔面まで飛び上がる。

双剣を交差し、缺の要領で首を刈り取る一撃を本能で察知した化け物は、慌てて首を引く。

アレスの一撃は、首は逃したが額についていた長い角を断ち切っていた。

「グギヤオオオッ!？」

「姉さん、今だよ!」

「ありがと、集え神炎、我が剣となりて、我が敵を刺し貫け!レーヴァ・ティンツ!」

アグニの頭上には化け物に負けなくらい大きな炎の剣が出来ていた。

アレスが注意をひきつけている間に、アグニは集中し、双剣に纏わせている炎よりも純度の高い炎を練り上げていたのだ。

そしてアレスが作った最大のチャンスに、アグニは巨大な炎の剣を化け物に向かって射出した。

放たれた剣は、あたり一面を燃やしつくしながら化け物に迫る。恐怖を覚え振り払おうとしたのか、尻尾を剣に叩きつける。

しかし尻尾が触れた瞬間

「グギヤアアアアッ!？」

尻尾全てが灰になった

炎の剣は消えるどころか、ますます勢いを増して迫る。

「ギヤアアアアア

」

化け物の身体を貫通した剣は、燃え上がりながら空に消えた。

そして化け物は、貫かれた姿勢のまま止まり、どこからか吹いたそよ風に灰となって飛ばされていった。

第21話（後書き）

戦闘シーンが難しすぎる・・・。

一応ボス戦なんですけど、あんまりそんな感じしませんよね（´・`）

もっと精進せねば・・・；x；

とりあえず、あんまり出番のなかったツンデレアグニちゃんを活躍させたくてこんな感じにしましたw
キャラが増えると描写が大変ですね・・・クレスなんてまた空気だしw

というわけで、感想などなど、おまちしておりまーす！

第22話（前書き）

どうもー！

オリンピック開催しましたね。

あんまりスポーツとかに興味ないんですけど、日本にはがんばってほしいですw

がんばれ、にっぽん！

第22話

化け物を倒した後、俺を縛っていた魔眼の効果は切れた。といっても、まだあんまり身体を動かせないんだけどな・・・

そして今は夕食・・・なのだが。

「はい、主様。あーん」

「自分で食えるって！」

「ほれ、九十九。口を開けんか」

「人の話聞こうね!？」

「あ、あんたがどうしても言うなら食べさせてあげないこともないわ！」

「誰もそんなこと言ってねえよ！」

どうしてこうなった？

「ツクモさんはモテモテなのです」

「あはは、流石ツクモ兄さん」

そんなことより助けてー!？

「主様、ちゃんと食べないとダメですよ！」

と、前方に村らしき影が見えてきた。

時刻は午後3時くらいと言った所だろうか。

「やっとついたかー」

「ううう、ベッドで眠りたいわ・・・」

「さすがに寝袋だけじゃしんどかったのう」

こんな長距離を旅したことなかったからなあ。

まあ世界を旅すると決めてる以上慣れるしかないんだけど・・・

「それじゃあ急ぎ足で行きますか！」

「今までヘトヘトだったのに、村が見えた瞬間元気になるって不思議だなあ」

「まったくなのです」

「クレスは俺の頭の上にずっと居ただろうよ・・・」

まったく、髪をレバーのようにグイングインしゃがって・・・可愛いやつめ！

急ぎ足で向かうこと約1時間。ようやくアルプ村に到着した。

情報通り、村から少し離れたところに山があるだけで、他は平原に囲まれている。

農地は柵に囲まれており、家は全部木製みたいだ。

「うーん、いかにも村！って感じだなあ」

「フレッセント村と似た感じじゃの、もっともあつちは森に囲まれておったが」

桜華の言うとおり、規模的にも雰囲氣的にもフレッセント村と同じ感じに出来ている。

村っていうのは全部こんな感じなのかね？

「ま、とりあえず宿を確保しようか」

「ベッドー！」

「姉さん・・・」

嬉しそうなアグニに苦笑いしつつ、村の中に入り、宿を探す。中は商店や飲食店が1、2店あるだけで、他は全部住居みたいだ。

「なんか少し寂しいですね・・・」

セラが顎に指をあて、不思議そうに辺りを見渡す。
まったくその通りで、買い物してる人をちらほら見かけるだけで、あまり人通りはない。

そんな中、村の中ほどまで行ったところで、「春の木枯し亭」という宿を見つけた。

「お、あつた。すいませーん！」

「客かい？」

中に入った俺達を対応したのは、少し小太りのおっさんだった。
別に綺麗なお姉さんや可愛い看板娘を期待したわけじゃないぞっ！

「「「じー・・・」」」

「そんな眼で見るな・・・！」

「あはは・・・すみません、部屋は開いてますか？」

「騒がしい客だな。まあ何しに来たか予想はつくけどな・・・部屋は開いてるよ」

騒ぐ俺達を見て呆れながら、そう言ってくるおっさん。
しかし予想はつくってなんだ？

「店主、予想はつくってなんだ？」

「大方、お前らも洞窟の剣目当てだろう？」

「ああ、そうだけど・・・そんなに剣目当てで冒険者が来てるのか？」

まあ、王都ではそこそこ情報が出てたからなあ・・・。
おっさんは声を何とか搾り出したように言う。

「いや、数はそんな多くねえ・・・が」

「ないが？」

もったいぶるおっさんに催促をする。

そして俺の目をちらつと見て、俯き、ため息と共に話した。

「剣を探しに行ったチームやパーティは、未だ誰一人として戻って来てないんだ・・・」

「・・・マジデ？」

噂の剣って、そんなにやばいのか？

「悪いことは言わない、やめておけ」

「むー・・・まあ、行けるだけ行ってみるさ。危なくなったら戻ってくる」

「私達が居れば、危険なことなんてありませんよ！」

セラが胸を張り、自信満々に言う。

なんだろう、すごく頼もしく見える！

それを見たおっさんは深々とため息をつき、言った。

「人がせつかく心配してやってるのに・・・、まあいい。何泊で何部屋つかう？」

「悪いね。とりあえず3泊で二部屋お願い」

「あいよ、じゃあ一部屋で一泊80ゴールドだ」

そこそこ安いんだな。

袋から480ゴールドを取り出して、おっさんに渡す。

「ちょうどだな。部屋は好きな所取っていいぞ」

「なんだ、セルフサービスか」

ちえ、と呟く俺に、おっさんは苦笑いする。
そしてそのままの表情で一言。

「へっ、文句あるならよそにいきな」

俺はそんなおっさんにニカツと笑いながら言う。

「俺達が泊まらなかったら経営厳しいだろ？」

「余計なお世話だ！」

おー、こわいこわい。

とりあえず部屋は隣同士でいいか。

皆に相談しながら階段に向かると、後ろからおっさんが呼び止める。

「おい、お前ら」

「ん？なんだ？」

おっさんは真剣な顔をしながら言った。

「洞窟に関する情報なら、いつもギルドで酒を飲んでるクレオって冒険者に聞くんだ」

「ふむ・・・いきなりどうしたんだ？」

俺が少し戸惑いながら聞くと、おっさんは「へっ」とそっぽを向き答える。

「出来る限りお前らの生存率を上げる為だよ」

「あー・・・素直じゃないな、おっさん」

クスクスと笑いながら言うと、おっさんは怒りでなのか恥ずかしかったのかわからないが、真っ赤になりながら叫んだ。

「うつせえ！わかつたらとっと部屋にいきやがれ！」

「へいへい、じゃあ行くぞー！」

ここまで親切にしてくれたんだから、生きて帰らないとな。

おっさんに夕食は情報集めるついでにギルド酒場で取ると一言いい、俺達はアルブ村のギルドに来ていた。

酒場に居る冒険者は数えるくらいしか居ない。

「じゃあ飯を食う前に、情報集めておくか」

「そうですね、店主が言ってた人は確かクレオさんでしたね」

「ふむ・・・店主が薦めるくらいだからの、ベテランなんじゃろう」

軽く酒場を見渡すと、奥の席に歴戦の冒険者らしい雰囲気をかもし出している男が一人で酒を飲んでいた。

俺は店員にエールを一杯頼む。

それを受け取り、男に近づいた。

「おっす」

「何のようだ？」

いきなり声をかけてきた俺をジロリと睨む。

警戒心が全開のことに苦笑いしつつ、俺はエールを差し出しながら尋ねる。

「アンタがクレオか？」

「そうだが・・・？」

クレオの警戒心が更に増す。

「まあ、そんなに警戒しないでくれ。春の木枯し亭のおっさんから紹介されたんだ」

「・・・お前らも剣を探すのか」

「その通り！」

クレオは、宿のおっさんと同じ深いため息をつく。
そして俺の差し出したエールを受け取り、飲みながら言う。

「悪いことは言わない、やめておけ・・・死ぬぞ」

「生憎と、確かめなきゃならないことがあってな」

そういうと、クレオは真剣な目で俺を見つめてきた。
それを正面から受け返す。

少しの時間が経ち、クレオはさっきよりも深いため息をつく。

「ハア・・・何が聞きたい？」

「洞窟の規模と出てくる魔物、あと注意することかな」

そういうと、クレオは懷から紙を一枚取り出した。

「洞窟の規模や構造はこれを見れば分かる」

「いいのか？」

「かまわん・・・と言っても、構造は中途半端で終わってるけどな」

「それでも助かるさ。他に情報は？」

洞窟の地図を受け取りながら、再度質問する。
すると、クレオは顎に手をやり、少し考える。

「魔物はゾンビやグールと言った不死系だな。まあランクDもあれば余裕だ・・・罾はもう殆ど機能していない」

「なるほど・・・そうすると結構な冒険者が入ったわけだ」

クレオは深く頷く。

「その誰一人として戻ってきていない・・・俺は途中で引き返したから生きているが」

「一人で行ったのか？」

「いや・・・臨時5人で行ったんだが、俺以外は全滅した・・・んだと思う」

なんだか不確定だな。

「思いつて？」

「怪しい雰囲気が出たから引き返そうと提案したんだが、他の4人は拒否してな。俺一人抜けてきたんだ」

なるほどな・・・怪しい雰囲気か・・・

「その怪しい雰囲気って？」

「言葉では現し難い・・・メンバー4人の様子が少しおかしくなっただけと言えない」

「ふむ？」

クレオの様子を見る限り、情報を出し渋ってるわけじゃなさそうだ・
・・。
様子がおかしくなった・・・か。

「もう情報は全て提示したぞ」

「そっか、ありがと。お礼に此処は俺がおごるよ」

「気をつけろよ」

「ああ」

心配してくれるクレオに感謝しつつ、俺は自分の席に戻る。

「大体の情報が分かったぞ」

「そうか、じゃあ作戦を練るとしようかのう」

「じゃあとりあえず注文しますか。店員さん！」

とりあえず注文はアレスとアグニに任せるか。

そして俺はクレオからもらった情報を皆に話した。

「ふむ・・・何か感覚を狂わせるトラップが発動してるんでしょうか？」

セラが鳥の（ような）から揚げを食べながら言う。

「そうかも知れないわね。まああたし達は大丈夫だと思うけど・・・こいつがねえ」

「こら、スプーンで人を指すんじゃない」

トマトの（ような）スープが跳ねるぞ！

「ふあ、はんにひてもひってみふあけれふあはからないじゃほう）
訳：まあ、何にしても行ってみなければわからないじゃろう）」

「桜華、行儀悪い上に、何言ってるか分からないぞ」

「むう、はむはむ」

注意すると、ちょっと拗ねた感じで食べることに集中する。
そんな桜華に苦笑しつつ、俺は皆に言う。

「とりあえず罨は行ってみてからで、んで出発は明日の昼ごろにしよう」

皆がうなづいたのを確認して、俺も料理を食べることに集中した。

そしてこの一件が、世界の異変の第一歩となることを俺達は誰一人と予想していなかった。

第22話（後書き）

やっとフラグ回収に漕ぎ着けました。

ちよっと引つ張りすぎた感が否めませんねw

そしてちよっと怪しい終わり方になりました。

一応これもフラグになるんですね？

まあ、なんとなくわかってしまう方も居ると思いますw

では、感想などなど、お待ちしております！

第23話（前書き）

どうも！。

新型インフルにかかっておりました・・・なぜ今頃（、・、）

そして次から前書きをやめようと思ってます。

ネタがないからじゃないですよ？本当ですよ？

第23話

翌朝、俺達は洞窟の前まで来ていた。
位置はそれほど高いところにはなく、山の中腹あたりにあった。

最初の内は草や木が生い茂って居たのだが、洞窟に近づくにつれどんどん無くなっていった。
終いには、草木の影すら無く、まるで荒野に居るような錯覚を起すほどだ。

「うーん・・・不気味なところだなあ」

洞窟の中は暗く、光の加減によって何も見えない。

クレオの情報によると、中に入ると『何か』によって誘われるように奥へと行くらしい。

「九十九、どうしたのじゃ？」

「あ、いや・・・なんか入り辛いなあ」と

桜華達が居るとしても、やはり不安は拭えない。

「そうだ、結界が何か使えないの？」

アグニは思いついたというように、手をぽんつと叩きセラ達に聞く。
桜華は無言で首を振り、セラは人差し指を顎に当て、少し考えるようにして言った。

「結界・・・というか、神気を纏わせることは出来ますね」

「と、言つと?」

「簡単に言つと、『魔』限定の結界ですね」

顎に当ててた指を、ピツと上に差し少し得意げに胸を張る。

ここで可愛いというと、話が進まなくなるのでとりあえず聞くことに専念する。

「魔、限定ですか?」

「はい、攻撃魔法とかは防げませんが、チャームとかそういう呪術は防げるんです」

なるほど・・・って呪術ってなんだ?

そんな顔をしたのか、セラは俺にニコリと笑って教えてくれた。

「ふふ、呪術というのは、精神面にかける魔法・・・と言った所ですね」

「うーむ・・・中に入ったら誘われるように奥へ行くっていうのは、もしかすると呪術かもしれないと?」

「専門ではないので、なんとも言えませんがね」

セラはそういつて、少し肩を落とした。

そんなセラに俺は苦笑する。

「まあ、やるだけやってみよう。違ったとしても専門じゃないならしょうがないさ」

「そうだのう。このまま躊躇していても始まらぬし、中に入ってみようぞ」

俺と桜華がフォローすると、セラは嬉しそうに微笑んだ。
たまにしょうもないことで争うけど、基本的にこの二人は仲がいいんだよな。

「じゃあセラ、よろしくな。クレスは一応ネックレスの中に入ってくれ」

「はいなのです」

クレスは両手を上げ、元気に返事をしてネックレスの中に戻っていた。

「では、皆さんに神気を纏わせますね」

セラはそういうと、目を閉じ意識を集中させた。

すると、いつも剣に纏わせている神気とは違った暖かな光がセラの身体を包み込んだ。

それだけでは止まらず、更に光が拡大していき、俺達も光に包まれた。

「これで完了です」

「おー、なんか暖かいな」

全身を淡い光が覆っている。

その光はとても優しく、暖かいものだった。

「それじゃあ、出発するか！」

「さーで、何が出るのか楽しみだわ！」

「姉さん、あんまりはしゃがないようにね」

「ここは怖がる振りをして九十九につかまろうかの？」

「桜華さん、聞こえてますよ！」

そんなやりとりをしながら俺達は洞窟の中へ入っていった。

「うおー、気味が悪いな・・・」

洞窟の中はとても暗く、何かが腐った臭いがいたる所から漂ってくる。

天井には鍾乳洞が出来ており、その先から水滴が地面にピチヨピチヨと跳ねていた。

「主様、身体に何か変化ありましたか？」

「いや、今のところは大丈夫だな」

そう答えると、セラ安心したように微笑んだ。

セラの頭を撫でながら、俺は注意深く辺りを見渡す。ふにゃーって声が聞こえたが気のせいだろう。

「とりあえずこのまま進んでみるか・・・」

「そうじゃのう、戦闘はわらわ達に任せておけばよいぞ?」

「その時は任せるさ」

少し心配そうに聞いてくる桜華に微笑みながら頷く。

「罨は僕と姉さんが探しますね」

「しょうがないから探してあげるわっ」

「ああ、頼りにしてるぞ」

二人は照れながらも頷いた。

デコボコした地面を、慎重に進んでいく。しばらく進むと、少し大きな部屋に出た。

左右には進む道がある。

「戦闘した後があるな・・・」

「そうじゃな、見たところ魔物の骸しかないようじゃが」

部屋のあちらこちらに魔物らしき死体が落ちている。

おそらくこの洞窟を根城にしていたサーベルウルフだろうか、ほぼ原型をとどめていないので詳しいことは分らない。

「ここまで破壊する必要はあるのでしょうか？」

「恐らく、クレオが言っていた『何か』のせいじゃないか？」

人間の欲求というのはとても恐ろしい物だ。

何か手がかりとかがないか周囲を調べると、複数人の足跡が右の道へ続いていた。

「足跡があるから、こっちなのかな？」

「地図にも書いてあるから間違いないな」

アグニとアレスを先頭に、セラ、俺、殿に桜華という順で歩き出す。途中に畏らしきものがあつたが、前から来ていた冒険者が解除したのか、発動はしなかった。

「っ！ 主様、この洞窟の奥からとても邪悪な気配がします」

地図からすると大体真ん中辺りまで来たところだろうか。

セラが何かを察知して、真剣な顔で伝えてきた。

「ん？ あの化け物よりもか？」

セラは神妙な顔つきで頷く。

「そうか・・・とりあえず、このまま警戒して進むしかないだろ」

今更戻るのは考えられない。

これ以上犠牲者を出さないため、とか高尚なものではないが、やり掛けたことを中途半端に終わらせたくないだけだ。
もちろん、危なくなったら逃げるけどな。

「このまま進むとまた大きい部屋に出る、そこで少し休憩しようか」

「じゃあ僕と姉さんで先行するね」

「ちょ、アレス！待ちなさいよ！」

アレスはそう言うと、少しスピードを上げて先に進んだ。
その後をアグニが慌てて追う。

「まあ、あの二人なら大丈夫だろう」

「元気なのはいいことじゃのう」

このときの俺と桜華は、子供を見守る親みたいな雰囲気だったという。セラ談。

「フッフ、また人間たちがお前を求めてやってきたぞ」

暗い暗い洞窟の奥、怪しい声が響く。

（どうして・・・ボクに世界を征する力なんて無いのに・・・）

暗い暗い洞窟の奥、悲しげな声が響く。

「フフフハハハ！まだ気づかないのか、この噂は私が流したってことに！」

暗い暗い洞窟の奥、楽しげな声が響く。

（もう・・・もうやめてよ！）

暗い暗い洞窟の奥、嘆きの声が響く。

「やめられないなあ・・・私の力と楽しみのために」

暗い暗い洞窟の奥、嘲りの声が響く。

（誰か・・・助けて・・・）

暗い暗い洞窟の奥、絶望の声が響いた。

「そろそろ出発するか」

時間でいうと、約15分くらい休憩をしていた。

夜までには村に戻りたいから、あんまり時間を掛けては居られない。

「ツクモ、道が3つあるけど、どっちなの？」

「うーんと、地図だと左の道だな。でも次の部屋からの道は書かれてないなあ」

クレオが途中までと言っていたのは、このことだったみたいだ。となると、手探りで行くしかないということか。

悩んでいると、セラが俺の肩にそっと手を置き、言った。

「大丈夫ですよ。魔の気配が強くなっているので、それを辿れば間違いはありません」

「そうなのか？」

確かにセラは、魔物とかの気配をよく察知していた。

ある程度近づいてからじゃないと分らないと思っていたが・・・
今回の敵はそれだけ凶悪なのか？

「道がわかるなら進もうぞ。どんな敵が出てくるのか楽しみじゃのう」

桜華はそう言いながら肩をぐるぐると回す。

このところ強い敵と戦ってなかったから、欲求不満なのかもしれない。

「ハハ、じゃあ早く行かないとな」

「うむっ！」

そして俺達は、洞窟の最深部に向かって出発した。

第23話（後書き）

いきなりですが、アレスの口調を変えてみました。
なぜかというと、セラと被ってやり難いからです！（バーン）

そして、まだインフルを引きずっているので、更新は少し遅れます。
一週間以内には更新出来たらいいな。

第24話

暗くジメジメした遺跡内を慎重に進む。

畏は前の冒険者達が大体突破していったようなので、数えるほどしかなかった。

「っと、オリヤアッ！」

小さい横穴から飛び掛つてきた魔物を殴り飛ばす。

魔物は居なくなるということはないのか、奥に進むにつれてどんどん増えてきていた。

「主様、もう少しで最深部だと思われます」

バグナウの血を拭いていると、後ろからセラが神妙な面持ちで声をかけてきた。

いつも微笑んでいるセラがこんな顔をしているのは珍しいと思い、どれほどの物が聞いてみる。

「そうか、それほど魔の気配が濃いのか？」

「ええ、初めのうちはどんな者かわかりませんでした、ここに来て確信しました」

セラが俺の目をまっすぐ見つめる。

「この奥に居るのは、恐らく悪魔です。それも、並ではない程の」

うわぁ・・・王道な所がついに出てきたかぁ・・・

「ほー、悪魔・・・の、鬼とどれ程違うのか見定めてやろうではないか」

「ん、桜華って鬼と戦ったことあるのか？」

そう聞くと、桜華は怪しく笑って

「ふふふ、乙女の秘密じゃ」

なんとも素っ頓狂なことを言った。

「よし、この部屋にもトラップはないね！」

「姉さん、こっちにもなかったよ」

例の如く、アグニとアレスを先に行かせて、罠がないか調べてもらった。

「お疲れさん、まだ道が続きそうか？」

「ううん、恐らくあの道を行けば最深部だと思うわ」

アグニが指を挿す方向を見ると、地下へ続くような階段があった。

「そっか、二人とも、ここまで調べてくれてありがとうな」

そういつて二人の頭をぼんぼんなでなとしてあげると・・・

「な、ななななっ・・・・・・・・！」

「あうあうあう・・・」

二人とも真っ赤になって固まってしまった・・・愛いやつめ。

「よし、じゃあ準備を整えて行くぞ」

「九十九、九十九。悪魔はわらわがやるぞ？」

気合を入れて、出発しようとしたところで、桜華がいきなりそう切り出した。

「ん？皆でやればいいんじゃないか？」

「そうですね、桜華さん。相手は悪魔、全員で行った方が安全です」

普段は自信満々のセラだが、今度の相手は悪魔とあってか、慎重に事を進めようとしている。

「むう、最近強い敵と戦ってなかったからのう・・・九十九、ダメかや？」

桜華は目を潤ませ、首をコテンと傾げながら上目遣いで俺に聞いてくる。

「ハハハ、そんなことないぞー！　パパに任せなさい！」

後ろから絶対零度の視線を感じるのは、この際気のせいということにしておこう。

地下へ続く階段を慎重に降りると、壁全体が仄かに光っている大部屋に出た。

「ふむ、これが・・・」

大部屋の中央にある、RPGなどでよくある台座に刺さっている剣を見る。

その剣は半分近く埋まっているが、刃は赤黒くフランベルジュのように波打っていてとても長く、鏑は黒色の片翼の形をしていた。更には刀身全体に、黒いオーラのような物を纏っている。

そして光があるせいで、見たくもない物まであった。

「うげえ・・・どうやら血を吸うっていうのは本当らしいな」

剣の周りには、黒く干乾びた人だった物が無数に転がっていた。防具や武器があるところから、この遺跡に入って行方不明になった冒険者達だろう。

「魔物とかで死体には慣れたつもりだったけど、流石に人間の死体は辛いな・・・」

「主様、大丈夫ですか・・・？」

セラのほうを向くと、皆が心配そうな顔をしていた。それをみた俺は心配してくれる嬉しさに「心配ないよ」と軽く笑って見せた。

「しかし綺麗な剣だな。怪しい美しさっていうか、心を魅了されるっていうか・・・」

そんなことを考えていると、セラが真剣な顔をして囁く。

「お気をつけください、姿は見えませんが、確実に居ます」

桜華達もその気配を感じているのか、得物に手をかけて、辺りを警戒している。

「潜んでいるのか？」

「はい、何のつもりかはわかりませんが・・・」

湖にいた化け物以上のやつか・・・俺じゃ瞬殺だな。

「とりあえず、あの剣を回収しないとな・・・」

そうしなければ始まらないだろう。

一応警戒しながら、ゆっくりと剣に近づいていく。
すると・・・

（ダメ、来ちゃダメッ！）

これがあの剣の意思なのか、幼い少女の声が頭に響いてきた。

（ふむ、どうやら剣の意思自体に害は無さそうだな）

そう思うと、自然に歩調を速くなり、一気に近づいてしまった。

（ダメ、ダメだってば！ボクに触れると死んじゃ
（

必死に遠ざけようとする剣の柄に手を掛ける。

「死なないんだけどな」

（え？）

「な、なんだと！？」

触れても死なないことが分かった瞬間、俺達以外の声が響き渡った。

「そこかつ！」

いつのまにか練り上げていたのか、声のした方向に白く輝くセラの神気が迫る。

「又ウツ・・・！」

声の主は、瞬時に黒いオーラのような障壁を作りだした。

白い光と黒い塊がぶつかり合った瞬間、ものすごい光と衝撃が発生し

「うおっまぶしっ！　ってうわぁあっ！？」

柄をしっかりと握っていた俺は、その衝撃で剣ごと壁に吹き飛ばされた。

「いててて・・・おい剣、無事か？」

剣を見ると、140cmはあるだろうか、大剣といっても過言ではない長さで、そして何よりも重い。力が上がっている今ですら、米10キロを持ったときの重さくらいだ。

そう思っていると、剣がおずおずと話しかけてきた。

（う、うん・・・お兄さんこそ大丈夫？）

「おうつ、俺は頑丈だからな！」

心配そうに聞いてきた剣に、にやりと笑いながらそう言つと、安心したのかクスリと笑ってくれた。

しかし、そんなほのぼのした空気をぶち壊す声が煙の中から聞こえてきた。

「チッ、私の闇の術式を突破するやつが居るとはな・・・」

中から現れたのは、紫色の身体に、赤い瞳、長い2本の角と鋭い牙。極めつけはゴツゴツと筋張った、真っ黒な翼。

「当然です、私の主様なんですから！」

それは理由になってないだろうと思いつつも、とりあえず頷いておいた。

「貴様、もしかたまわしきアルフェルの使いか……！」

「ふふ、正解です。賞品は……魂まで消滅して差し上げますね？」

セラは言うやいなや、再び凄まじい神気を剣に籠め始めた。

そして今にも放たれようとした、その瞬間……！

スパアンと小気味いい音が、セラの頭から聞こえてきた。

「い、いったああ……桜華さん、何をするんですか！」

「あれはわらわがやると言っただろうに！」

セラのほうを見ると、一体どこから取り出したのか、桜華がハリセンでセラの頭を叩いていた。

俺はそれを見た瞬間恐れた、たった一瞬の出来事でシリアスな展開が一気にギャグになるのか……と。

「ですから、その場のノリというものがあるでしょう！ 大体桜華さんはいつもそうです！ 私が主様と二人きりにならないように、いつもいつもいつも邪魔をし」

「ノリなどしらんわっ！ それに、元々九十九はわらわだけの物じやったのに、後から来て何を偉そうにベラベラと！ 九十九がお主と出会えたのは単なる偶然じゃ！ お主こそ」

えー、この喧嘩、ただ今10分くらい経過しています。

ていうか、もはや喧嘩の論点が修正不可能なところまで来ています・・・（泣）

（お兄さん、いつも大変なんだね・・・）

「流石の私も、これには同情するぞ・・・」

幼女と敵（しかも悪魔）にまで慰められた！？

「まあ、せつかくのチャンスだ。有難く頂いておくとする・・・かッ！」

悪魔はそういうと、ギャーギャー言い争っている二人目掛けて、両手から黒い波動を放った。

「「邪魔をするなッ！」」

「え、ちょ・・・ゴフォッ!？」

凄まじい怒りと共に、二人から莫大な量の神気と桜が放たれた。

悪魔の放った波動が、輝く神気と舞い散る桜に飲み込まれ、ついでに悪魔まで飲み込んだ。

悪魔はそのまま壁まで吹き飛ばされ、ズゴオと恐ろしい音共にめり込んだ。

そして瓦礫の中から現れると、一言。

「危なかった・・・ギャクパートじゃなかったら死んでいた」

アンタも案外ノリがいいな!

「フフフ、やはり今日の主役はわらわという事じゃな!」

ジャンケンの結果、桜華に軍配が上がったようだ。

負けたセラは隅っこでいじけている・・・後で何か買ってあげよう。

「どうやら、決まったようだな」

結果が決まるまで、律儀に待っていてくれた悪魔は、ようやく出番かというように首をコキリコキリとならしながら前に出てきた。

「うむ、待たせたのう・・・思う存分暴れようぞ！」

「そう来なくてはなあッ！」

悪魔は両手に黒いオーラで出来た剣を作り、桜華は腰に挿していた二対の鉄扇を引き抜く。

駆け出すのは、ほぼ同時だった。

瞬間　重い鉄と鉄がぶつかり合った音が部屋全体に響く。

その音は一度では終わらず、二度、三度、四度、と続く。そして五度目の音が響くと、両者は大きく距離をとった。

「フッフ、お主、案外やりおるのう」

「フハハ、貴様こそな！」

二人の間にあつた台座は影も形もなくなり、地面を踏み砕くほどぶつかりあつたのか、穴がいくつも開いていた。

「少し本気を出そうかのう」

桜華は、両手に持っている鉄扇に桜色のオーラを籠める。

「ならば、私もそうするでしょう」

悪魔は、両手に作り出した剣に更に黒いオーラを纏わせた。

両者はジリジリと間合いを詰める。

そして、もう2メートルも無くなったところで、踏み出す

「疾ッ！」

「ヌンッ！」

それぞれの得物がぶつかり合った瞬間、遺跡が震える程の衝撃が辺り全体に走った。

第24話（後書き）

どうもー。

自分も不調でPCも不調という中、何とか投稿することが出来ました。

クオリティは全く無いんですけどね・・・）・・・）

次はなるべく早く投稿・・・できたらいいなあ

第25話（前書き）

ここに来るまでに、数え切れないほどのフリーズがありました・・・。

そしてPC自体つかないこともしばしば。

こんな状態な私でも、応援してくれると血の涙を流して喜びます（
・・・）

満足にネットも見れないんだよおおおおウワアアアアン
！！

第25話

悪魔の剣と桜華の鉄扇がぶつかり合うたび、部屋が崩れ落ちるんじゃないかというほどの、凄まじい衝撃波が押し寄せてくる。

すでに、二人の間に在った障害物は全て消滅していた。

その障害物とは、血を吸う魔剣があった台座に、血を吸われた冒険者の骸達のことだ。

戦っている桜華を抜かした俺達は、巻き込まれないように入り口付近で固まっている。

近くに居たら消し炭になること間違いないからな！

「ふうむ・・・埒が明かんのう」

「クツ・・・それはこちらの台詞だッ！」

そう呟く桜華に、悪魔は叫びながら左右に持っている剣で斬りかかった。

「無駄じゃ、無駄ッ！」

しかし、初めから来ることがわかっていたように、2対の鉄扇で斬撃を受け流す。

だが、受け流された衝撃波がこちらに迫る

「危ないなあ、もう」

前に、アレスの作った結界によって弾かれた。

「アレス、今俺はお前が天使に見えるよ・・・」

「そんなあ、えへへ・・・」

なぜか照れてるアレスを放っておいて、目の前の戦いに集中することにする。

「チイツ、ここまで出来るとはな」

「フッフ、女を舐めたらいかんぞ？」

悪魔は焦っていた。

初めから出来る相手だと感じていたが、ここまでとは思わなかったからだ。

悪魔は人間の血や魂等を力にすることが出来る。

魔剣に血を吸わせ、その血を魔力に変換して、自分の力とする。この計画を始めてから、上級悪魔でも上位の力を手に入れたはずなのに、目の前のおかしな格好をした女は自分と渡り合っている。

どんなに力を籠めた一撃も、風が木の葉をくすぐるように流されてしまう。

「又ウンッ！」

「おっと、怖い怖い」

普通の人間なら、原型も残らないような一撃を桜華は楽しげに口元を歪めながら、軽く受け流す。

「今度はこちらから・・・破ッ！疾ッ！」

「又グッ、グオッ！？」

受け流した隙を突かれて、桃色のオーラを纏った鈍器が迫り来る。直ぐに闇の魔術で作った剣を引き戻し、連撃を弾く。

「むう、惜しかったのう」

まったく悔しそうでもなく、むしろ笑いながらそんな事を言う女が、無性に腹が立つ。

何なのだ、一体何なのだ、この女は！

怒りに任せ、剣に纏わせていた闇のオーラを更に増加させる。

「死ねえッ！」

纏わせたオーラを相手に放ち、それを目くらましにして、直ぐ後ろを追いかける。

（オーラは確実に防がれるだろう。しかし、その後ろに居る私の追

撃は防ぎ切れまい！)

案の定、放ったオーラはかき消された。
もらった

「爪が甘いわッ！」

瞬間、悪魔の身体は壁にめり込んでいた。

「ふむ、やり過ぎたかのう？」

まあ、こんな物で死なないじやろうが・・・と、桜華は呟いた。

一瞬、一瞬だった。

悪魔が部屋全体を包みこむ程のオーラを、桜華に向けて放った。

それを見た桜華は、桜色のオーラを纏わせていた片方の鉄扇を開き、回転するように屈んだ。

たったそれだけで、全てを飲み込むような闇のオーラを消し飛ばし、その後ろから奇襲しようとしていた悪魔の腹に、回転の勢いを利用した、もう一方の鉄扇を凄まじい勢いで叩きつけた。

闇のオーラの後の追撃を読めない、もしくは読んでいたとしても、ほぼ全力で放ったオーラを完全にかき消すことは出来ない。

そう思っていたのだろうか・・・そんな予想を一步踏み越えた結果が悪魔を待っていた。

「グ・・・グホッ、おのれ・・・オノレエッ！」

「フフ、やはり生きていたか。そうでなくてはのう」

崩れた壁の中から、全身傷だらけの悪魔が出てくる。

怒っているのか、目が血走り、恐ろしい牙をむき出しにしている。

「キサマ、今の一撃・・・オレを殺せたはずだッ！　なぜ手加減をスルッ！」

「ふふつ、簡単に死なれたら、九十九に良い所を見せれないではないか！」

そう言つて、胸を張る桜華。

「グガ・・・ガアアアアッ!？」

そんな言葉に完全に怒った悪魔は、全身から身の毛も弥立つほどのオーラを迸らせながら桜華に襲い掛かった。

上、下、右、左、怒りに任せて桜華を切り裂こうと、縦横無尽に剣を振り回す。

大雑把ながらも、それでも反撃の隙を与えないほどの速さで振るわれる剣に、桜華はただ防ぐことしか出来ない。

かと思われたのだが・・・

（九十九、アレスに結界を最大まで強化するように言うておくれ）

（え？ あ、わ、わかった）

桜華からの突然の念話に驚きながらも、指示にしたがう。

「アレス、桜華が結界を最大まで強化して欲しいらしい」

「はい、わかりました・・・ハアッ！」

アレスは目を閉じて意識を集中し、気合と共に地面に手をつけた。すると、今まで無色だった結界が、海を思わせるような青色に変わった。

「ふう・・・出来ましたよ、ツクモ兄さん」

「そっか、ありがとう。綺麗な色だな」

ぽむぽむと頭をなでる。

「むッ！」

「むう・・・」

（むう）

何か2人と1振りから恨めしい視線を感じるけど、ここは無視しておこう。

「シネエツ！シネエエツ！！」

「むっ！はっ！」

何故だ、何故当たらないッ！

力を蓄えタノに、あの方に次ぐホドの力を入れたノニッ！

怒りと焦りに支配され、目の前の女を切り裂くことしか考えられない。

だから気づけなかった。

目の前の女が企んでいることを、畏にかかった獲物を見た獵師の如き笑みを。

「グルアアアッ！」

砕け散れと、怒りを籠めた大振りの一撃。

「ぬうッ！」

避け切れなかったのか、女は2つの鈍器を交差して受け止めた。それでも衝撃を抑え切れなかったみたいで、大きく後ろに吹き飛び、

片膝をつき、身体を支えるように鈍器を地面に突き立てた。

チャンスだ。

そう思い、勢いを殺さずに、また先ほどと同じような攻撃を繰り返す。

今度は斜め前に飛んで避ける。

ダメージは抜け切れてないみたいで、また膝をついている。

追いかける。

また同じように避けられた。

そんなことが、この後3回ほど続いた。

片膝をついていた女が、ダメージを受けていたはずの女が、なんとも無いように立ち上がった。

そのときになって、悪魔はようやく気づいた。

これまでの動きは全て演技、何かの法則によって動いていた、と。

「気づいたようじゃの、だがもう遅いわッ！」

「気づいたようじゃの、だがもう遅いわッ！」

桜華は2対の鉄扇に大量に桜色のオーラを纏わせ、地面に突き刺した。

すると、その場所からオーラが地面を走る。

その場所は、桜華が悪魔に吹き飛ばされて片膝について鉄扇を刺していたところだ。

ポイントにつくと、次のポイントへ。

そして全て繋がった頃には五芒星の形が出来上がっていた。

「グガアアツ、身体が動かヌ!?」

「フフ、我が奥儀・・・その身に受けて散れツ！ 桜花星結印ツ！
」

五芒星が立体的に浮かび上がり、星の形をした柱が悪魔を中心に封じ込めた。

しかしそれだけでは終わらず、浮かび上がった星は桜の花びらを舞い散らせながらクルクルと回転する。

「グガガガツ、ガツ、ガギヤアアアアツ!?」

悪魔の断末魔と共に、封じ込めていた五芒星と舞っていた花びらは、桜色の光の残滓を残してはじける様に消えていった。

第25話（後書き）

前書きで取り乱してすいませんでした。

何とか、悪魔編完結ですw

無駄に引つ張ったり、次話を早くあげなかったりして、大変お待たせしましたが何とか終わらせることができました。

もちろんこれで終わりじゃないんですけどねw

これからも頑張っていきますので、どうぞ末永くよろしく願います！

第26話

綺麗な桜色の光が、まるで雪のように部屋一面に待っている。悪魔を一瞬にして倒した技だが、俺はそれを美しいと思った。

（わあ、綺麗〜！）

「ええ、本当に・・・」

そう思っ居たのは俺だけじゃないらしい。

後ろを見ると、皆がうつとりとした様子で、その光景を見ていた。

「あ、今結界を消しますね」

「ああ、頼む」

アレスがはつとした様子で、慌てて目の前の結界を消した。結界の向こうから桜華が歩いてきたのが見えたからだ。

いつもの不敵な笑みを浮かべ、歩いてくる桜華に労いの言葉をかける。

「桜華、お疲れ様！」

「うむ、久々に大技を使ったが、さすがに疲れたのう」

苦笑しながらも少し疲れた様子で、肩をトントン叩いている。後で肩でも揉んでやろうかな？

と、思いながら桜華を見てみると、どんどん俺に迫ってきている。

「え、ちょ、桜華？」

「さて、ご褒美ご褒美」

ないから！そういうのないからっ！

俺の心の叫びを聞き取ったのか、セラが慌てて俺を守るように立ちふさがった。

「ダメです、桜華さん！ そんな羨ましい・・・もとい、破廉恥なことは許しません！」

「なんじゃと！ あんなに頑張ったんだから褒美くらい良いではないかっ！」

「あーあ、また始まったわよ？」

ギャーギャー言い争っている二人に、呆れた様子で止めなくていいのかと聞いてくるアグニ。

今回ばかりは助かったので、放っておくことにした。

決して巻き込まれたくないし面倒だとか思っていないことを、ここに記述しておく。本当だ。

それよりも今は、このでかい剣のことが重要だ。
とりあえず名前から聞いていこう。

「君、名前はなんていうんだ？」

（ボク？ボクは悪魔さんにブラッディウィングって呼ばれてたよ！）

何だその禍々しい名前は。

「そ、そうか・・・それじゃ長いからな、愛称を考えるよ」

（はーいっ！）

ブラッディウィング・・・ウィン・・・違うな、もっと可愛い感じがいい・・・ブラッディ・・・ラディ・・・これだ！

「よし、今日から君はラディだ！」

（ラディ・・・うん、ラディでいいよ！ ありがとう、お兄ちゃん！）

お兄ちゃん。

それは男を惑わせる甘美な響き。

お兄ちゃん。

それは男を狂わせる魔性の響き。

おにいちゃん「落ち着けっ！」ころんぼっ！？

「はっ、俺は一体・・・？」

「何か危ない感じでトリップしてたわよ・・・」

危なかった、もう少しで俺は戻れない領域に踏み込むところだったのか。

「気を取り直して、ラディ」

（なあに、お兄ちゃん？）

「もっとお兄ちゃんとよんでく」 「ギロリ」 ヒッツ！ スイマセンッ
！」

アグニが双剣に手を掛けながら、恐ろしい形相でこちらを睨みつける。

危うく視線だけでちびりそうになった。

「え、えつと・・・顕現ってわかる？」

（顕現？ うーん・・・あ、何か頭の中に浮かんできたよ！）

オーライオーライ。

これまでの経験で、顕現できる物と、出来ない物があることがわかった。

基本的に古くなり、強い意志を持つ物が出来るみたいだ。

現に俺の使用している武器、バグナウは新品で買ったので意志自体存在しない。

それと、古くなったと言っても出来ない物もある。

そこらへんの基準はわからないけどな。

「よし、お兄ちゃん顕現しちゃうぞー！」

（わーい）

「姉さん、ツクモ兄さんがおかしいよ？」

「元から変態だと思ってたけど、ここまでとは思わなかったわ・・・」

「

うるさいよ！

通路から部屋に入り、とりあえず中央まで行く。

たどり着くと、両手で落とさないようにしっかりと構える。
ズシリと重みが伝わってくるが、持てないほどではないので続行する。

「よし、久々の・・・顕現せよッ！」

皆の時と同じ、懐かしくも強烈な光が部屋中を照らし出す。
そして光が晴れると、そこには・・・

「お、おおー！　わーい、自由に動けるよー！」

ごつく刺々しい鎧を纏った小さな女の子がはしゃいでいた。

その姿に、俺は驚愕した。

髪は黒に近い紫色で肩口までのセミロングで、もみ上げをクルツとふた巻きほどカールにしている。瞳の色は血のような赤。身長は俺

の胸辺りまでしかない。

容姿はまさに美少女然としていて、全国のお兄ちゃんを虜に出来るほど可愛い。

自分の髪と同じ色をした、首から下を覆うフルプレート。背中には身の丈とほぼ同じ長さの大剣。

しかし、俺はそれだけに驚愕していた訳ではない。

「い、妹属性でボクっ娘、極めつけは鎧っ娘だと・・・!? 馬鹿な、連邦のモビルスーツ「いい加減にしなさい、この馬鹿ッ!」がんだむっ!?!」

「あはは・・・姉さん、それ以上やるとツクモ兄さんが死んじゃうよ・・・?」

ゴホッ・・・いいパンチだぜ・・・。

「お兄ちゃん、大丈夫?」

「な、なんとかね・・・まあ、今日からよろしくな、ラディ!」

「うんっ、よろしくねっ!」

嬉しそうな笑顔を浮かべ、俺に勢い良く抱きついてきた。トゲトゲの鎧のまま。

「ちょ、まっイデデデッ!?!」

「あっ、お兄ちゃんごめんね・・・?」

ラディはすぐに身を離し、俺を傷つけたことを気に病んでか、涙目になりながら見上げてきた。

「ゴフウツ、だ、大丈夫さっ!」

「でも鼻血出てるよ・・・?」

「こ、これはあれだ、うん、鼻血が突然出ちゃう病なんだ!」

涙目が可愛すぎるから出たなんて、とてもいえない!

しかし素直なラディは嘘まみれな言葉を信じて、俺の袖をきゅっと掴み、心配そうに見上げながら言った。

「そうなんだ・・・お兄ちゃん、ボクに出来ることがあつたら言つてね?」

「ホブウウツ!?!」

「きゃーっ!?!」

もう俺に・・・悔いは・・・な・・・い・・・ガクツ。

「ラディ、恐ろしい子っ!」

「姉さん、ハンカチかみ締めて何言ってるの・・・?」

しばらくして復活した俺は、とりあえずあんな騒ぎにも気づかず喧嘩している二人を止めることにした。ラディのこと紹介しないだめだしな。

アグニとアレスは、俺が血を失っているときに自己紹介を済ませたみたいだ。

「桜華、セラ、ご褒美なら今度あげるから取り合えずこっちおいで」

「うむっ！」

「はいっ！」

その一言だけで、二人は喧嘩を止めて目を輝かせながらこっちにやってきた。

若干後悔してるのは秘密です。

「あら、その子は？」

ようやくラディの存在に気づいたのか、セラと桜華はラディを見ている。

そんなラディは恥ずかしいのか、俺の後ろに隠れてしまった。

「ほら、ラディ、挨拶して」

「う、うん・・・ブラッディウィングじゃなくて、ラディって言います、今日からよろしくお願いしますっ！」

「桜華じゃ、そんな固くなくてもよいぞ」

「セラフィムです。セラって呼んでね？」

二人の優しい気遣いに、ラディは満面の笑みを浮かべた。

「うんっ、桜華さん、セラお姉ちゃん、よろしくねっ！」

「うむっ」

「はうん」

よしよし、これで皆仲良く・・・はうん？

変な声を出したセラのほうを見ると、顔を真っ赤にしてクネクネしていた。

そして我に帰ると、ラディの肩をがっしり掴んで聞いた。

「ラ、ラディちゃん・・・今なんて？」

「え？　よろしくね？」

「その前」

「セ、セラお姉ちゃん・・・？」

「お、おね、お姉ちゃん・・・ハアアンツ、なんて可愛いのかしら！？　天使？　天使なのね！？」

「あうあうあうあー！？」

セラはその言葉を聞いた瞬間、ガバツとラディに抱きつきクルクルと回り始めた。

ちなみに棘は刺さっているのだが、痛覚はどっかに行ってしまったらしい。

「そうか、セラよ。君も紳士・・・いや、淑女だったんだな！」

「うふふふ、ラディちゃん！ 今度はお姉さまって呼んでみて！？」

「あうあー！ 目が回るー！？」

涙を流しながらウンウンとうなづいている俺と、ネジが一本外れたセラは気づかなかった。

後ろから赤鬼が、ゴキゴキと指を鳴らしながら近づいて来ていることに。

そのとき気づいていれば、あんな悲劇は生まれなかっただろう 完
どっちにしる生まれます。

第26話（後書き）

どうもー！

若干2名、変態が居ましたが気にしないでくださいね！

さてさて、今回から魔の大剣ブラッディウィングこと、ラディが仲間になりましたがどうだったでしょうか？

また女かよ！って思った方も居ると思いますが、次仲間になるのは男ですので、その手にもった石を置いてくださいお願いします投げないでいじめないで！

さて次の話ですが、キャラ紹介を計画しています。
九十九つてどんなやつ？って指摘があつたのでw

話が進まず、がっかりするかも知れませんがご了承ください（・
・、）

今更なキャラ紹介（前書き）

タイトル通りに今更なキャラ紹介です。

本編で作者の能力不足のため語れなかった、世界や宗教のこと等も盛り込んでおります。

今更なキャラ紹介

異世界ファルム

【概要】

九十九が救う為に呼ばれた世界。現在何者かの手によって魔物の被害が多い。

武神アルフェル

【概要】

ファルムの絶対にして唯一の神。武神の名のとおり、戦いの神でもある。

聖書では幾つもの武器を自在に操ったと言われている。

破壊神ゼラフェル

【概要】

ファルムに生まれた破壊神、アルフェルとの戦いに負け滅びた。

アルフェルの鏡

【概要】

ファルムが危機に瀕したとき、別世界から語り手と呼ばれるアルフエルの使徒を呼ぶための鏡。何の説明もしないで九十九を送りだし、その事に気づいてすぐく後悔するほどのドジっこ。

神の語り手

【概要】

アルフェルの使徒とされている。古くなり知らないうちに意思を持ったり、語り手のために作られた武器を顕現することができる。

語り手自身は特に強くない。世界移動の際に身体能力が向上すると、文字が読める、言葉が話せる・わかる。

吉原 九十九

【性別】

男

【年齢】

18歳

【身長と体重】

178cm 65kg

【職業】

主人公・神の語り手

【使用武器】

バグナウ・桜華達

【性格】

めんどくさがり屋だが、一度やると決めたことはしっかりやり通す。そして意外と面倒見が良い。

【概要】

黒い短髪で目つきが少し悪い。生まれながらにして古くなった物と話したり動かしたり出来るという能力を持ち、その力のせいで幼少期はいじめられて過ごした。

しかし、家族はそんな九十九を気味悪がったりせず、そして物達にもよくしてもらった九十九はグレずに育った。

そしていじめを克服するために取った九十九の方法は、強くなること。

それは武術を習うとかではなく筋トレと喧嘩の経験によるものなので、あまり強くない。

桜華で腕力を鍛えている。

【神の語り手】

前述の通り、古くなって意思を持つようになった物の声を聞き、操ることが出来る。

【異世界移動による身体能力倍化】

異世界移動によって得た主人公補正。

桜華

【性別】

女

【愛称】

桜華

【鉄扇の長さとう重さ】

50 c m 10 k g

【擬人化の身長と体重】

160 c m 53 k g

【スリーサイズ】

B 83 W 58 H 85

【武器系統】

鉄扇

【特殊能力】

攻撃魔法を無効化する

【使用武器】

鉄扇を二つ両手に構える。

【九十九の呼び方】

九十九

【一人称】
わらわ

【性格】
九十九と同じめんどくさがり屋、そして九十九に依存しているところがあつて、甘えん坊。
セラとはいつも九十九を取り合っている。口調は旧日本風

【概要】
古くなり意思を持った鉄扇。生まれは安土桃山時代。どんな武将が使っていたか不明。どんな手法で作られたか分からないが黒の鉄扇で扇を開くと桜の花の模様が刻まれている。
時代が過ぎ、骨董品店で九十九の父親に買われたところを九十九の能力で目覚めた。

腰までの黒い長髪で切れ長で少したれ目、右目に泣きボクロがある。服装は黒い着物で、袖口や裾に桜の模様が入っている。普段着にも戦闘着にも使っている。
寝るときは黒い着物を脱いで、桜色の肌着をきている。

【桜花乱舞】
両手に持ったオーラを纏った鉄扇を開き舞うことで、妖力の籠った桜の花びらを目標に向かって大量に発生させる。
花びらに当たった敵を切り刻んだり、花びらを全方位に広げること
も可能。範囲は視覚内のみ。

【桜花星結印】
地面に五芒星を描くことにより、魔物や悪魔等といった者を封印、

消滅させることが出来る。
使い所が難しく、普段はトラップ的な要素として使用する。
効果は桜花乱舞より高い。

聖剣セラフィム

【性別】

女

【愛称】

セラ

【剣の長さと重さ】

90 c m 0 k g

【擬人化の身長と体重】

163 c m 55 k g

【スリーサイズ】

B 85 W 60 H 86

【武器系統】

聖剣

【特殊能力】

持ち主に重さを感じさせない。柄頭の宝石には治癒効果がある。

【使用武器】

聖剣

【九十九の呼び方】

主様

【一人称】

私^{わたくし}

【性格】

普段は真面目でお淑やかだが、九十九のことになるとやきもち焼き。弱気を助け、強気を挫く。

桜華といつも九十九を取り合っている。口調はお嬢様風

【概要】

神の語り手のために作られた聖剣。フレッセント遺跡で眠っていたところ九十九が発見。

本来なら語り手が降臨したときに目覚め、遠くからでも語り手に意思を伝えるのだが、あまりに長く放置されたので分からなかった。語り手以外が触れようとすると電撃が走り、決して触れることが出来ない。

刃にはこの世界の古い文字が刻まれており、薄く光っている。

鍔には大きな蒼い宝石がはめ込まれており、その両側には羽の模様が施されている。

柄頭には、鍔と同じ宝石がはめ込まれている。

腰までの銀髪を髪先で青いリボンで束ねている。眼は綺麗な蒼色。戦闘時は、白い膝丈のワンピース。銀で出来た古い文字が刻まれた胸当て、サポーター、ガントレット、ブーツ。

腰はコルセットとベルトが一緒になつてゐる物をつけている。

普段着は白いフリルカットソー。下は黒の膝より少し上のタックススカート。

靴は花のコサージュがついた赤いパンプス

寝るときはレースがふんだんに使われた白いネグリジェ。エロくはない。

【流星の煌き】

神気を剣に纏わせ、それを放つことで相手を切り刻む。

【断罪の剣ジャッジメント・セイヴァー】

剣に清浄なる煌く神気を纏わせ、相手に放つ。魔物等に絶大な威力を発揮するが、生身の人間が受けても余程のことがない限り消滅する。

詠唱（我が振るうは断罪の剣、我が放つは戒めの光、聖なる輝き、ジャッジメント・セイヴァー）

祝福のネックレス

【性別】

女

【愛称】

クレス

【精霊の体長】

30cm

【道具系統】

ネックレス

【特殊能力】

身に付けている者の身体能力を僅かに上昇させる。

【使用武器】

なし

【九十九の呼び方】

ツクモさん

【一人称】

クレス

【性格】

天真爛漫でいつもにこにこしている。九十九の頭の上がお気に入り。九十九のことは好きだが、他の皆ほどではない。口調は「」なので「」を語尾につける

【概要】

魔力を持ったアクセサリー職人が手がけた作品。フレッセント村にある古道具屋に売られてた所を九十九に買われる。

古くなったところに精霊が宿った。擬人化は出来ないが、中の精霊を呼び出すことが出来る。

精霊が出てくるだけなので、アイテムは首にかかったまま。特に何かできるわけではない。

金縁に緑色の宝石がはめ込まれている。首に引っ掛けるタイプ。

髪と眼は緑色。耳がとがっている。服は薄緑色のワンピース。
マスコットキャラだが、最近出番がなくネックレスの中でふて腐れ
ている。

双剣アグニ

【性別】

女

【愛称】

アグニ

【双剣の長さと重さ】

50 c m 5 k g

【擬人化の身長と体重】

158 c m 46 k g

【スリーサイズ】

B 78 W 55 H 80

【武器系統】

双剣

【特殊能力】

手に持ったとき、歴代の双剣使いの動きがわかるようになる。

【使用武器】

紅い双剣

【九十九の呼び方】
ツクモ

【一人称】

あたし

【性格】

所謂ツンデレ。素直になれない女の子で根はとても優しい良い子。ただし九十九の事になると色々暴走したりする。

見えないところで九十九の事で桜華、セラと争っている。

【概要】

伝説の英雄が使っていた双剣。

英雄の死後に所在不明になり、闇市に出ていた所を九十九に回収される。闇市は壊滅。

アグニは紅く、斬ることを主体としているために、刀身は薄く、反り返っている。柄頭にはオレンジの宝石がついている。

肩までのオレンジの髪をサイドテールにしている。目は赤い。

戦闘時は炎の模様が入った紅い胴鎧、ガントレット、レギンスを普段着の上につけている。

普段着はオレンジの太ももまでのチュニツクに黒いスパッツ。靴は短めのブーツ。

【衝波獄炎斬】

双剣に炎を纏わせ、踊るようにステップを踏み、纏わせた炎の衝撃波を相手に撃ち出す。

詠唱（舞えよ獄炎、我が敵を全て燃やし尽くせ、衝波獄炎斬）

【レーヴァ・ティン】

頭上に全てを灰にする高純度の炎で出来た巨大な剣を形成し、相手に射出する。

詠唱（集え神炎、我が剣となりて、我が敵を刺し貫け、レーヴァ・ティン）

双剣アレス

【性別】

男の娘（女の子のような男の子）

【愛称】

アレス

【双剣の長さと重さ】

40cm 8kg

【擬人化の身長と体重】

160cm 48kg

【武器系統】

双剣

【特殊能力】

手に持ったとき、歴代の双剣使いの動きがわかるようになる。

【使用武器】

蒼い双剣

【九十九の呼び方】

ツクモ兄さん

【一人称】

僕

【性格】

姉と違って素直な弟。九十九に突っ掛かる姉を止める苦労人。兄のような九十九を頼りたいと思うお年頃。

【概要】

伝説の英雄が使っていた双剣。
英雄の死後に所在不明になり、闇市に出ていた所を九十九に回収される。闇市は壊滅。
アレスは蒼く、防御主体のために、刀身は分厚く、受け流すために波打っている。柄頭には水色の宝石がついている。

スカイブルーのショートヘア。目は青い。

戦闘時は波の模様が入った蒼い胴鎧、ガントレット、レギンスを普段着の上につけている。

普段着は白いロングシャツに青いジャケット、下は黒いジーンズ。靴は短めのブーツ。

攻撃技は現時点で使用していないので、後回し。

魔剣ブラッディウィング

【性別】

女

【愛称】

ラディ

【大剣の長さとう重さ】

140cm・40kg

【擬人化の身長と体重】

145cm 40kg

【スリーサイズ】

70・50・72

【武器系統】

魔剣・大剣

【特殊能力】

呪いや毒など状態異常を受けない

【使用武器】

魔剣・大剣

【九十九の呼び方】

お兄ちゃん

【一人称】

ボク

【性格】

無邪気で甘えん坊。九十九にべったりとくっ付いており、片時も離れようとしない。

普段は笑顔だが、戦闘になると無表情で敵を殺す。

セラと相性が悪そうだが、その見た目と言動、容姿なのでパーティ内では特にセラに可愛がられている。

口調は元気な妹風

【概要】

遺跡の内部で上級魔族に力を蓄えるための道具として使われていたが、桜華が倒して回収した。

強力な魔族と人間の血を合わせ、魔界の名工が作ったとされていて、普通の人間や魔物が触れようとしたら、身体中の血を吸い尽くされる。

刃は赤黒く、フランベルジュのように波打っていて、黒いオーラを纏っている。鐔は黒く片翼の形をしている。

黒に近い紫色で肩口までのセミロング。眼は血のような赤。

戦闘時は、髪と同じ色のフルプレート。両方の肩には、翼の形をした肩当をして、ガントレットには赤い宝石が埋め込まれている。

背中に収めるベルトがついており、そこに剣を収めている。

普段着は淡い紫色のレース使いブラウスに、黒の膝丈までのショートパンツに同じく黒のハイニーソックス。靴は赤いヒールスニーカー。

寝るときはネコのパジャマ。

攻撃技は現時点で使用していないので、後回し。

ドルーガリフ大陸

【概要】

サザーランド王国とミッシュガルド帝国が半分ずつ治めている。戦争はない。

地図上の大きさはアフリカ大陸くらい

サザーランド王国

【概要】

九十九が降り立った異世界の神である、絶対唯一の武神アルフェルを奉っている。

降臨した語り手は、アルフェルの使徒とされ、王より地位が上とされている。

国旗は天使の羽の前に赤い剣と青い盾がクロスしている。

王都ザナログリフ

【概要】

サザーランド城と聖アルフェル教会本部がある。規模は30万人程。崖の上に立つており、城の後ろは深い谷で、魔法を使わないと登れない。そして対魔法結界が張ってある。

正面はなだらかな傾斜で、街の区画が、崖を城ごと囲う城壁によって分かれている。

城 城壁 貴族街・教会 城壁 平民街・市場 城壁・門となっている。

難攻不落の名城。色は白い。

【人物】

イーラ・ライナス

【性別】女 【年齢】21歳

英雄ギルフォードの孫娘。普段は天然でおっとりしているが、腕っ節は強く、ランクCになっている。

両親は他界していて、ギルに育てられた。

フレッセント村

【概要】

九十九が降り立った場所の近くにある村。のどかな農村と語り手のために作られた遺跡がある。

規模は500人くらいで、遺跡目当ての学者くらいしか来ない。

ギルドもあるが、カミール町に行く冒険者がために来るくらいで、まったく栄えていない。

よって、盗賊に襲われたときにはクレアしか居らず、クレアはギルドを守っていた・・・ということにしてください（汗）

【人物】

シエラ

【性別】女 【年齢】17歳

ミレルの姉。両親は他界しており、母親の弟だった自警団団長のバートが面倒を見ている。

九十九に助けられたときに一目惚れをし、どうにか気を引こうと思ったが結局ダメだった可哀想な子。

ミレル

【性別】女 【年齢】14歳

シエラの妹。九十九に対する感情は兄＞異性止まり。

バート

【性別】男 【年齢】38歳

シエラ・ミレルの叔父。二人の母親の弟で自警団の団長をしている。

ジーナ

【性別】女 【年齢】37歳

バートの奥さん。おっとりとしているが、バートを尻に引いている。姉妹を実の娘のように可愛がっている。

クレア

【性別】女 【年齢】24歳

学者兼冒険者。ランクはDで、片手剣を使っている。実力はあまり

無いが、学者としては優秀。
地味にフラグが建ったが、回収することはない。

カミール町

【概要】

フレッセント村と王都ザナログリフの間にある、山に囲まれた町。
山菜がおいしい。
山に面しているために、魔物の被害が多いので冒険者が多く集う。
小さな教会もあるが九十九は寄らなかつた。
規模は15000人ほどで、治安はあまり良いとは言えない。

【人物】

アイナ・キャンベル

【性別】女 【年齢】15歳

茶髪のショートヘアで、目も同じ茶色。九十九のおかげで冒険者でランクDになった。

短剣を使ったすばしっこい戦いが得意だったが、九十九の双剣技に心を打たれ、双剣使いに転進。

その後、長い修行の末、ランクSSの英雄まで登り詰め「双剣姫」の二つ名を得た努力家。

もしかすると再登場するかも？

アルブ村

【概要】

平原に作られた長閑な農村。平原にあるため、あまり魔物の被害はない。
血を吸うという魔剣がおいてある遺跡がある。被害者は後を絶たない。

規模は600人程。

【人物】

クレオ

【性別】男 【年齢】42歳

厳つい顔と屈強な身体をしたベテラン冒険者。魔剣のせいで冒険者があまり来ない中、村のために残り続ける良い人。ランクはB。
九十九達が来るまでは魔剣騒動の唯一の生き残りだった。

ミッシユガルド帝国

【概要】

サザーランド王国とは昔戦争をしていたが、現在は軍事と経済の同盟を結んでいる。

今更なキャラ紹介（後書き）

そして重要なお知らせが。

前々から述べた通りに、パソコンの調子がおかしいので、キリが良
いここままで更新を休止したいと思っています。

調子がおかしいというのは、マザーボードがイカれているので、電
源を落とすと中々起動しなくなってしまうんです。

しかもその起動しない時間は日に日に延びていって、いつ完全に起
動しなくなるか分からない状態なのです。

この駄文を待っていてくださる方に、まだかなーと思わせるのが申
し訳ないので、休止を決定しました。

復帰の目処は今のところ立ってませんが、恐らく長くて半年でし
ょう。

大変申し訳ありませんが、どうぞご了承くださいませ（．．．）

第27話（前書き）

うああああ、すいませんんん！

復帰してからもー、大分時間経ってしまいました・・・（、・・・

言い訳はしません、すいませんでした；

待っていてくださった方達、大変お待たせ致しました！

久しぶりで、アレな小説ですけど。第27話どーぞー！

第27話

「ん・・・？」

気がついたらベッドの上に寝ていた。

隣のベッドを見ると、セラも同じように寝ている。

「何で寝てるんだ・・・いてて」

なぜか痛む頭を摩りながら、一体何があったか考えていると扉がガチャリと開いた。

「あ、お兄ちゃん起きたんだね！　おはようっ」

「ああ、おはよう」

元気よく入ってきたラディを見ると、洞窟で着ていたフルプレート
を脱いでおり、上は淡い紫色のレース使いのブラウスに、下は黒の
膝丈までのショートパンツに同じく黒のハイニーソックスで靴は赤
いヒールスニーカー履いていた。

ラディの雰囲気とピツタリな服装で、とても似合っていた。

「おお・・・可愛いな」

「えっ、えへへ・・・照れちゃうよう」

可愛いと言うとラディは、顔を赤らめもじもじと照れる。

「う、うおお・・・ホブッ」

「ああ！？ お兄ちゃんまた鼻血がつ！」

噴出す鼻血を抑えていると、ラディが直ぐにティッシュ（のようなもの、この世界では一般的に使われている）を俺に持ってきてくれた。

「お兄ちゃん、大丈夫・・・？」

「おお・・・いつもすまないねえ・・・」

「それは言わない約束だよ、おとつつあん」

「アンタ達、なんつー芝居してるのよ」

俺たちが3文芝居をしていると、開きっぱなしにしていた扉からアグニが腰に手を当て呆れた目でこちらを見ていた。

何故だろう、その目を見てると・・・身体が震えて・・・

「あ、ああ・・・鬼じゃ、鬼がおる・・・！」

「だ、誰が鬼よーッ！」

「ぎゃああああッ！？」

「まったく・・・心配して損したわっ」

「いてて・・・悪かったつてば」

あの時のアグニはトラウマ物だったぜ・・・

「そういえば、桜華達は？」

「桜華さん達なら酒場でおじさんとお話してたよ？」

おお、居ないと思ったら先にクレオさんに報告していたのか。

「そうと知ったら腹も減ってるし、セラ起こして俺達も行くか！」

「わーい、ご飯ご飯」

さて、セラの様子はと・・・

「ウフフ・・・ラディちゃん、そこが弱いね・・・かわいい子・・・ウフフ」

「さー、飯食いにいくぞー！」

だめだ！この人と関わってはいけない！

ということ、俺達は幸せな夢を見ているセラを放っておいて酒場に行くことにした。

酒場に着くと、桜華達はクレオと談笑をしていた。

「おい、桜華ー。アレスー。」

「む、おお九十九！こつちじゃ！」

談笑をしてるときは凜とした態度だった桜華は、俺を見るとまるでその名の如く、桜の花が開いたような笑みをこちら向けてきた。

それを見ていた、他の男性客は全て桜華に見惚れ。女性客は何かを悟ったような目でこちらを見ていた。

もちろん俺もちよつと見惚れかけたのは内緒だ！

「ごほん、取り合えずよく生きて帰ってきたと言っておこつ」

「ありがとさん。まあ俺には頼もしい仲間が居るからな。生きてるのは当たり前さ！」

そんな軽口を言い合いつつ、俺達はテーブルに着く。

テーブルに着くとしばらくして、ウェイトレスが注文をとりに来る。

「ご注文はお決まりですか？」

「んー、とりあえずエール2つと果物のジュース1つ。あとはー・・
・ラデイ、食いたい物はあるか？」

「お肉！」

「はいよ、じゃあお勧めの肉料理を適当によろしく」

「かしこまりました」

注文を取ったウェイトレスさんは素敵な営業スマイルで厨房へと去って行く。

「それで、詳しいことを聞いてもいいだろうか？」

「ん、ああ・・・桜華はまだ話してなかったのか」

「う・・・うむ、こういう話はやはり九十九がしたほうがいいと思
つての」

桜華の目が泳いでる、ただ単に言うのがめんどくさかったただけだな、
これは。

「はいはい了解つと、その前にまずは腹ごしらえしてもいいか？」

タイミングよく、素敵営業スマイルウェイトレスさん（仮）が「お
待たせ致しました」と料理と飲み物を持ってきた。

「なるほど、その娘が例の魔剣の正体というわけか・・・」

「うん、まあ魔族に無理やりそういうことやられてただけなんだけだな」

食べ物を粗方片付けた俺は、クレオさんに事情を説明していた。無理やりとは言え、多くの命を奪ってきたことに罪悪感を感じていたラディはしゅーんと泣きそうな顔をして落ち込んでいる。その顔も萌えるとかは思っていないぞ！

「そうか・・・、ラディだったか？別に俺はお前を恨んだりしない。だからそんな顔するな」

そう言いながらクレオさんはグシグシとラディの頭を撫でた。

「ほんと・・・？」

「ああ、それに冒険者なんていつ死のうが、どこで死のうが、どんな死に方をしようが自業自得なんだ。だからラディは罪を感じることはない・・・まあ、ただの気休めと言われたらお終いだかな」

「ううん・・・ありがとう、クレオさん」

クレオさんの言葉に、ラディが花が咲いたような笑顔でお礼を言っ

た。

クレオさんも厳つい顔に似合わないような優しい微笑みをラディに返した。

それを見ていた俺は

「なんか親子みたいだな」

と言ってしまうのは仕方ないと思うんだ。

「そうね、でもそうだとしたら、クレオさんがあたし達全員のお父さんになっちゃうわよ？」

「そうだね、ラディは僕達の妹だしね」

アグニとアレスも穏やかな笑顔を浮かべながら俺の思いに肯定する。しかしクレオさんが親父か・・・なんだか野郎には厳しそうだな。

「ふむ、となるとわらは九十九に嫁いできたと言っことじゃな」

「ちょ、なんでそうなるのよ！こいつは・・・その・・・ゴニョゴニョゴニョ」

「じゃあじゃあ、クレスはラディちゃんのお姉さんっていうことなのですね！」

頭の上で、小さく切った肉をもぐもぐしてたクレスが胸を張りながらそんなことを言ってきた。

「いや、クレスはペットだな」

「ペットじゃな」

「ペットね」

「あはは・・・」

「ええええ！？」

「そんなことないのです！お姉ちゃんなのです！」と俺の髪の毛をひっぱって暴れてるクレスを放っておいて・・・

「それじゃあ、ここは親父のおごりではーっとなるか！」

「「「「賛成ー！」「」「」」」

「お前らな・・・しょうがないガキ達だな」

そんなこと言いつつ、満更でもない顔をするクレオさん達と朝まで盛り上がるのだった。

一方その頃のセラ

「フッフ・・・あら、主様も混ざりたいのですか・・・？いいですよ、3人で楽しみましょう・・・フッフッフ」

いまだ幸せな夢を見ていたとき。

第27話（後書き）

はい、もうアレですね。文才の欠片もない小説で申し訳ありません・

こんながぶりえるですが、これからもどうぞよろしくお願いします；

そしてなんと、PVが100万アクセス、ユニークが14万突破しました！

もうホント、目がおかしくなったんじゃないかとか、夢でも見てるんじゃないかと思いましたが・・・なんかすごいうれしいです！

こんな駄文を応援してくれるなんて、とても幸せです！
これからもがんばりますので、よろしく願いしますっ！

第28話（前書き）

大変長らくお待たせしましたー！

これで年内更新はこれで最後ですね。
挨拶はあとがきで！

第28話

あの後から少し日にちが過ぎた頃の朝。

「もう行くのか、なんだかちよつとの間だが、騒がしいお前らが居なくなると寂しくなるな」

「ああ、世話になったな。いつか来るからそれまでこの宿潰すなよ？」

と言うと、おっさんに向かってニヤリと笑う。

「うるせえ、俺の宿は評判がいいんだ。ちよつとやそつとじゃ潰れねえよ！」

「おうおう、それならまた今度の楽しみにしておくよ」

こんな話をしている後ろでは、クレオの親父と他のメンバーが別れを告げていた。

「クレオよ、世話になったな。」

腕を組み妖艶に微笑みながら言う桜華。

だが俺にはわかる、あれは恥ずかしくてちゃんとお礼を言えないだけだ。

「何、俺がやったことは少しの情報と、酒をおごっただけだ。」

「それでもうれしかったよ！ありがとう、クレオお・・・お父さん・

・・」

恥ずかしさでお父さんと言えないラディ萌え！

「何か馬鹿が変なこと考えてるけど・・・クレオさん、お世話になりました。」

「あ、あはは・・・とにかく、今度着たときは僕達におごらせてくださいね？」

「ああ、期待してるよ。」

馬鹿って言ったほうが馬鹿なんだ・・・アグニサンハバカジャナイデスヨ？

そうそう、次の目的地だけど、とりあえずエルミネの塔に行ってみることにする。

アルプからエルミネの塔までは歩いて5日ほどらしい。

クレオの話によると、普段は入り口が何もない塔なのだが、満月になると一っただけ入り口が出来るということだ。

その塔は異様な雰囲気が出ていて、入り口が開いていても命知らずな冒険者くらいしか入らないようだ。

ちなみに満月が出る日がなぜ分かるのかというと、昨日の夜の月からみて、大体5〜7日で満月になると、長年培ってきた経験と勘でわかるらしい。さすがベテラン。

そんな話を聞いたのは一昨日で、昨日のうちに準備を済ませておいた。

エルミネの塔を探索し終えたら、そのままもう3日ほど歩いた先に帝国の村があるので、そこに行ける分より少し余剰ある食料などを用意することにした。

簡易テントや寝袋は古くなってきたので、これらも新しいのをアルブで買うことにする。

まあ、最悪食料が足りなくなっても、誰かが武器に戻ってくればその分だけ食料などが浮くので問題はあまりない。

そんなこんなで、出発当日となったわけである。

「よし、それじゃあ行ってくるわ。またな！」

「ああ、気をつけろよ。」

「死ぬんじゃないぞ！」

そうして俺達は、まだ朝日が昇り始める時に出発した。

「ねえ、クレスさん。主様が少し前から他所よそしくなったのだけれど、何か知ってますか？」

「さ、さあ・・・クレスは何も知らないのですよう・・・？」

アルプ前に広がる平原を小休止を入れながら進むこと約半日、モンスタ―の襲撃は特になく平和な時を過ごしていた。

もう少し進んだところには森が見えるが、桜華達が流石に夜に森に入るのは面倒だとのことで、ここいらで野宿することになった。

「しかし、なんだかんだでアルプに結構いたからキャンプも久しぶりに感じるな。」

「そうですね、ベッド生活も良かったですですが、こういったのも悪くはありません。」

「ボクは初めてー！　ねえ、お兄ちゃん。ボクは何すればいいの？」

ラディは興奮を抑えきれないのか、俺の周りをピョンピョン飛び跳ねながら笑顔で聞いてくる。

そんなラディに癒されつつ、頭を撫でながら周りに目を向けてみる。

アレスは簡易テントの準備をしている。

アグニは焚き火の準備をしている。

桜華は携帯食料だけじゃ味気ないと言って、森に入ってしまった。

クレスは俺の頭の上で器用に寝ている。働け。

そして俺とセラは料理をしている。

と言っても、スープとかそこらへんの簡単な料理だけだな！

思ってみると、ラディに出来ることはほとんどないな・・・でもそれを伝えると落ち込みそうで怖い。

うーむ、どうしたものか・・・。

「そうねえ、それならラディちゃんは料理を作ってる私達の護衛をしてくれないかしら？」

「護衛？うん、わかった！護衛はまかせろー！」（ブンブン）

やめて！っとは言えないですよ。

仕事を任されたのが嬉しいのか、自分の背丈ほどもある大剣を軽々と振り回してるラディ。可愛すぎる！

「しかしうまい事言っただな、セラ。」

「ふふふ、何か仕事を任せないとラディちゃんが拗ねてしまいそうなので・・・拗ねてるラディちゃんも見えたかったですけど（ボソ）」

聞こえてる聞こえてる！

「え、えーと。後は塩で味調えて完成だな！」

「そうですね。私と主様の愛情たっぷり特製スープを皆さんに食べて頂きましょう！」

料理がちょうど完成したところで、桜華がデカイ猪と幾つかの果物を持ってきた。

思わぬご馳走に舌鼓を打ちつつ、夜が更けていった。

食事も終わり、明日のために寝ることにした俺達はある問題に直面していた。

それは・・・

「桜華さん、主様の隣は私が寝るんです！」

「何を言うか、ここはデカイ獲物を取ってきたわらわに譲るべきであらう！」

「あ、あたしも・・・その・・・どうしてもって言うなら隣で寝てあげてもいいわ！」

「ねー、お兄ちゃん。一緒に寝よ？」

なんだこのカオス！

セラと桜華はにらみ合ってるし。アグニはなぜかこっちを睨んでるし。ラディは裾を引っ張りながら上目遣いで聞いてくるし、可愛すぎる！

とにかく、埒が明かないからアレスに助けてもらおう！

「アレス、ちょっとたすく「僕も一緒に寝たいなあ・・・」お前もかー！！」

桜華とセラの言い合いが終わり気づいた頃には、俺の隣にラディと

アグニ。アグニの隣にアレス。そして腹の上にクレスという形で寝ていたとき。

第28話（後書き）

はい、ということで・・・これを読んでくださってる皆様。
今年は応援していただきまして、誠にありがとうございます！

前書きでも描きましたとおり、これで年内の更新は最後となります。
来年もまたがんばっていきますので、よろしくお願い致します！

では皆様、良いお年をー！

第29話（前書き）

チヨー短いですが、なんとか間に合いました。

これからはたぶん、更新スパンは短めで小説も短めになってしまう
と思います・・・申し訳ない；

第29話

今更ながらの説明になるが、なぜこのエルミネの塔に行こうと決めたかと言うと、アルブの酒場で興味深い話を聞いたからだ。

クレオからは異様な雰囲気が出ていると聞いたが、その他のいつからか塔の名前になっている「エルミネ」とは実在した伝説の魔法使いの名前らしい。

そのことから、この塔には何かエルミネの手がかりがあるのではないかと噂になっている。

もちろん国はたかが噂などで調査団など動かすはずもなく、面白半分で行った冒険者達は戻ってこない。

それなら面白そうだから行ってみようぜってことになった。

それに桜華達が居れば、大抵のことはどうにかなると思ったから。

そこ、自分でもわかってるから情けないなんていうな！

そんなエルミネの塔は、アルブから帝国の関所を抜けて村まで続く街道　いつてもしつかりと整備されてはいない砂利道なのだが

の途中から不自然なほど鬱蒼とした森の中にある、辛うじて人が通れるくらいの獣道を進んだ先にある。

俺達が付いたのは、エリオのおっちゃんの予想したとおり5日後の満月の夜だった。

「うーむ、本当に入り口がぼっかりと開いてるな」

俺達の目の前には巨大な塔が聳え立っており、正面には人が3人並んでも余裕で通り抜ける大きさの穴がぼっかりと開いている。

この入り口の説明でわかると思うが、塔自体が馬鹿でかい。

試しに周囲を歩いてみたが、1周するのに普通の速さで歩いて20分ほど掛かった。

高さはというと、首が痛くなるくらいと言って置こう。

まあ、なぜさつさと入らないで塔の考察なんかをしているのかと言うと 「しかし気味悪いわね、穴の奥が霽かかってまったく見えないし・・・」 アグニが代弁してくれたが、異様なほど不気味なのである。ようするに怖い。

「そうだとっても、入らなければ始まんぞ？まあ、何が出ようとわらわ達が蹴散らすかの」

「そうですね、何があっても主様とラディちゃんには私が指一本触れさせませんのでご安心ください！」

頼もしいことをいつてくれるな、お前達。

でもなんとなく、セラの言葉に俺は邪な感情が混ざってるように思えて仕方ないんだよね・・・主にラディのことで。

「そうだよー、ボクもお兄ちゃんを守るから安心してっ」

「クレスも守るのですー！」

それに引き換え、君達はなんと眩しいことか・・・まさに天使！

「あ、あたしもどーしてもって言うなら、あんたのことを守ってあげてもいいわよ！？」

ラディとクレスを撫でくりまわしていると、うちのツンデレ姫がスタンダードなツンデレ文句を言ってきた。

「おお、そうか。なら君の手腕に期待をしよう、ツンデレ姫よ」

「ツンデレ姫ってなによ！ツンデレが余計よ！姫だけなら・・・その・・・あんたがそう呼びたいならあたしは別」

わーい、久しぶりの暴走だ！。

「ツクモ兄さん、守りなら僕が得意ですよ？」

「うん、アレスの守りにいつも助けられてるからな、今回も期待してるぞ」

「はいっ、何か何でも守り抜きます！」

満面の笑顔で、大きい瞳をキラキラ輝かせ、うつすらと頬を赤く染め、上目遣いでこっちを見るアレス。

なんだろう、最近アレスが俺を見る目が変わってきたような気がする・・・うん、気のせいだ・・・気のせいだね・・・？

と、とりあえず！

「何時までもこうしてるわけにも行かないし、エルミネの塔にのりこめー^^」

「「「「わあい^^」」」」

「あたしが姫で・・・ツ、ツクモが騎士で・・・最初は護衛対象としてみても、それはいつしか違う感情に変わってきて・・・身分違いのラブロマンス」

アグニは放っておこう。

お知らせ。

えー、感想を読まれた方も居ると思いますが。

主人公の名前が同じ、擬人化も同じ、擬人化したキャラが主人公を呼ぶときの愛称も同じという小説が他所のサイトのほうであったそうです。

私の投稿年月は2010で、その方の投稿年月は2007なので、パクリと言われれば私のほうがパクリ担ってしまうわけでして・・・。

なにが言いたいのかというと、この小説をこのまま続けてもいいのだろうか？と疑問に思いました。

言い訳になりますが、私はその方の小説を教えられるまで知らなかったので、決してぱくったということはございません。

そちらの作者さんに連絡をと思ったのですが、2ちゃんねるのスレに投稿という形式で出しているみたいで、特にご自分のサイトも持っていないので連絡が付かない状態です。

そこで一応アンケートというか、このまま続けていいのか読んでくださっている皆様に聞きたいと思ひまして、もし良かったら感想のほうにでも続けるか続けないか、書いていただけると幸いです。

期間は2週間で決めたいと思います。お手数ですがよろしく願ひします。

お知らせ。 2

お久しぶりでございます。

例の件ですが、痛烈な批判等があると覚悟して参りましたが・・・この駄文が、皆様にこんなに愛されているのか、作者は喜びと共に驚愕しております。

本当に嬉しいです。

ここまで応援されている以上は皆様の期待に答えて、誠心誠意を持って完結まで乗り切るつもりです。

相変わらず亀並みの速度になってしまいましたが、もうしばらくすればリアルも落ち着きますので、少しペースを上げていきます。

終わりになりますが、感想を書いていただきました皆様や応援してくださいの皆様、そしてこの駄文を読んでくださっている皆様に、ほんとーにありがとうございます！

これからも駄目な作者を応援していただけると幸いです！

第30話（前書き）

遅くなりましたー！

皆様のご声援のおかげで、やる気が出てますよ！

・・・と言いつても、亀更新にはかわりないのですが・・・申し
あけありません（・・・）

では、第30話どうぞー！

第30話

「アレスお兄ちゃん、がんばれー！」

ラディの声援の先には、アレスと1体のモンスターが戦っていた。ギシギシと石で出来た身体を軋ませながら、マリオネットはその手に持った無骨な斧でアレスに襲い掛かる。

「ハアッ！」

しかし、そんな攻撃が当たる筈もなく、少し横にずれるだけで簡単にかわし、痛烈なカウンターを返す。

その一撃を受けたマリオネットは石で出来ているにも関わらず引きちぎられるように胴と腰が泣き別れし、吹き飛んだ衝撃でさらにバラバラになって他のマリオネット達と同様に沈黙した。

アレスの剣は防御主体の剣だが、別段切れ味が悪いという訳ではない。

むしろ、普通の剣より分厚く重いために、遠心力を乗せれば乗せるほど威力が上がっていく。

どっちかというと、綺麗に斬るではなく、叩き切る・・・と言ったほうがいいのかもしいないが。

さて、何でセラ達が居ないのかと言うと、塔に入ってしまったらしくしての事だった。

穴を抜ければ、あれほど薄暗く不気味な雰囲気をかもし出していたにも関わらず、内部はぼんやりと明るかった。

原因を調べようと周囲を見渡してみれば、一定の間隔を置いて、光を放つ石のようなものが設置されてあった。

「ふむ、案外すんなりと入れたのう」

拍子抜けした、という様な顔をしながら話す桜華。

「そうですね、何かあるか警戒していたのですが・・・まあ」

話に乗rittつ、セラは入ってきた穴に振り返ると、ガゴーン！とまるで上から石でも降ってきて硬い地面に激突したような音が聞こえた。

驚いた皆が振り返ると。

「閉じ込められてしまったようですけどね？」

と、ぽっかりと開いた穴が隙間なく塞がった様子を見ながら、セラがおどけたように言うのだった。

「困ったな、斬ってもダメ、叩いてもダメ、聖気や妖気もダメとなると・・・おとなしく登るしか道はない、か」

先ほどふさがった壁に手をやり呟く先には、エントランスと云っていいのだろうか。

大きな家一軒が余裕で入るほどの広間があり、その奥には階段がある。

しかしこの階段が曲者で

「でも階段が二つあるけど、どうするつもり？」

そう、二つあるのだ。

こうなった以上、俺達の取れる行動は2つしかない。

「二手に別れるか、一つに集中するか・・・だよなあ。まあここは二手に別れるかな」

そう言った直後、なぜだか強烈な寒気が俺を襲った。

（これは・・・なぜだか村以来、避けられて居たのを挽回でき、尚且つ主様に接近するチャンス！？）

（ほほう・・・普段は何かと邪魔されておったが、ここであの二人を出し抜けることが出来れば・・・フッフ）

（も、もしかして・・・いやダメよアグニ、あれは下僕、下僕よ！・

・でも襲われてるところを助ければ、気持ちは私に・・・そしてそのまめくるめく禁断のゴニョゴニョゴニョ)

(そっかあ、二手に別れるなら、今まであんまり活躍できなかった僕が目立てるよね。そしてがんばって活躍して、ご褒美としてツクモ兄さんに・・・えへへ)

「『『九十九(主様(ツクモ(ツクモ兄さん)、一緒に『お兄ちゃん、一緒に昇ろー!』『おー、いいぞー!』しまったーッ!?』」」

(((((となると残り枠は一人・・・!)))))

「えーと、なんで睨みあってるのか知らないが・・・残り一人はジャンケンで決めてくれ」

そのセリフの後、俺の人生の中でもっとも白熱したジャンケンというあの戦いが勃発した。

そしてその結果はわかると思うが・・・

「ううう・・・なぜ私はあの時にグーなんて・・・」

「ば、馬鹿なわらわのチョキに断てぬ物などなかったはず・・・」

「アレス・・・帰ったらこのパーでビンタするから・・・」

「あ、あはは・・・なんでだろう? 勝ったのに、素直に喜べない・・・」

といった結果になり、冒頭に戻るのである。

「ひとまず、このフロアは制圧しましたね」

「そうだな・・・お疲れ様、アレス」

どうやらこの塔は、階段の先に大きな部屋があり、その中に入るとモンスターがいる。それを制圧して上を目指すといった仕組みらしい。

そしてモンスターは昇るごとに強くなっていく・・・最初は俺でも倒せるような雑魚だったのだが、10階を過ぎる頃からきつくなり、15階になると俺は手も足も出なかった。

自分の弱さに凹みつつ、俺を守りつつ簡単に蹴散らして行くアレスとラディに感謝している。

「さて、とりあえず20階まで来たし、一休みしようか」

「そうですね、武器の手入れもしておきたいですし」

「休憩はまかせろー！ゴロゴロ」

まじめなアレスと無邪気なラディを見ながら、俺達は休憩を入れるのだった。

一方その頃、桜華達の方はというと・・・

「九十九と一緒になれなかったのは、貴様らのせいじゃーッ！」

ドガーーンッ！

「私だって主様と一緒に行きたかったですよーッ！」

ズドーンンッ！

「べ、別にあたしはあんなやつなんて・・・あんなやつなんてーッ！」

チュドーンンッ！

八つ当たりの真っ最中でしたとき。

第30話（後書き）

如何でしたでしょうか？

とりあえず出てきたモンスターの説明を。

マリオネット

特殊な魔法で、木や石、鉄などで出来た人形に魂を籠めて生み出されたモンスターで、簡単な命令なら聴く。

動きは遅いが、手に武器を持ち、こちらを攻撃してくる。

人形なので身体がいくら傷ついても向かってくるうえに、1匹でいることはまずなく、最低でも10匹くらいで固まっている。

このことから、モンスターランクはB。石でA、鉄はSとなっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5079j/>

神の語り手といわれた少年

2011年4月6日19時52分発行